

共同研究

曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』の

原初形態の復元とその思想史的意義

研究代表者・教授 加来雄之（真宗学）

## 目次

### 一、研究成果報告について

### 二、研究論文

曇鸞の『讃阿弥陀仏偈并論』

加来雄之

### 三、資料

#### 1 解題

#### 2 『讃阿弥陀仏偈』訓点資料三本対照表

#### 3 『略論安楽土義』訓点資料三本対照表

## 一、研究成果報告について

二〇一二年度準備研究（共同研究）「曇鸞撰『讃阿弥陀仏偈并論』の原初形態の復元とその思想的意義」は、曇鸞（四七六？～五四二？）によって撰述された「讃阿弥陀仏偈并論」の原初形態の復元と、曇鸞の〈無量寿経〉に基づく浄土思想を総体的に理解する基盤を提供することを研究目的とした。研究成果の一端として、論文「曇鸞の『讃阿弥陀仏偈并論』と資料「讃阿弥陀仏偈」訓点資料三本対照表」「略論安樂土義」訓点資料三本対照表」を報告する。

### （１）研究論文「曇鸞の『讃阿弥陀仏偈并論』」

従来、曇鸞浄土教の研究は、『無量寿経優婆塞舎願生偈註』（以下、『浄土論註』）が中心であった。しかし曇鸞が〈無量寿経〉の浄土思想をどのように受容したかを把握するためには、『浄土論註』のみならず『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とを合わせた総合的研究が不可欠である。本論文は、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』がもと『讃阿弥陀仏偈并論』一卷であったという視点の形式について考察する。この課題についてはすでに『大無量寿経』の讃歌と問答―曇鸞撰『讃阿弥陀仏偈并論』を読む―（二〇一二年）において一部取り上げているが、紙数の関係で考察が不十分であったので再度論じておきたい。曇鸞が『大無量寿経』をどのように受容したかについての思想的な問題については別稿に譲る。

### （２）資料「讃阿弥陀仏偈」訓点資料三本対照表」「略論安樂土義」訓点資料三本対照表」

本研究では、平安、鎌倉、室町時代における曇鸞の原典遺文の訓点資料（未公開資料を含む）の諸本を網羅的に蒐集し総合的に分析し、曇鸞の原典が、日本においてどのように受容され、またどのようにに伝承が形成されていくかの過程を

解明するための準備を行った。この報告では、とくに詳細な訓点を有するものとして、『讃阿弥陀仏偈』については、平安時代の大原来迎院蔵良忍手沢本、室町時代書写と伝えられる大谷大学蔵円空写本模写本、明治時代の南條神興校正七祖聖教所収本の三本を、また『略論安楽土義』については、平安時代の大原来迎院蔵良忍手沢本、室町時代書写本である京都府常楽寺本、南條神興校正七祖聖教所収本の三本を対照した表を提出する（詳しくは、「資料」の解題と凡例を参照のこと）。

資料の作成については、青柳英司、小松肇、藤原智、宮谷啓法の四君の協力を得た。

また常楽寺蔵『略論安楽浄土義』の翻刻については、その奥書から関心をもちながら拝見できずにいたが、この度、常楽寺住職今小路覚真師に各別の配慮をいただくことができました。紙面を借りて感謝の意を表します。

## 二、研究論文

### 曇鸞の『讃阿弥陀仏偈并論』

研究代表者・教授 加 来 雄 之（真宗学）

#### 凡例

一、漢文を書き下す場合、原則として引用する依拠本の訓点に従ったが、一部、句読点、清濁、送り仮名を補正した。また親鸞の読みなどを参考に変更したものがある。

一、出典は次のように略記する。

『真宗聖教全書』↓『真聖全』、『大正新修大藏経』↓『大正蔵』

一、記号は以下の意味を示す。

／は、もと改行があることを示す。「」内の文字は、筆者による補記、もしくは推定であることを示す。

## 問題の所在

曇鸞には、〈無量寿経〉の伝統に立つ三つの著述があるとされる。『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下、『浄土論註』）二巻と『讃阿弥陀仏偈』一巻と『略論安楽（浄）土義』一巻である。曇鸞の浄土教の著述として現存するものはこの三書であり、また伝記によって確認できるものも、この三書以外にはない。この中の『略論安楽土義』については教義的内容から曇鸞の撰述とすることに疑問を呈する研究者もいるが、本論において示す「曇鸞撰『讃阿弥陀仏偈并論』と「曇鸞の二部作」という二つの視点によってそのいわれなき疑難から救い出すことができると考える。

この三書を曇鸞の著述と認めるならば、当然、この三書の思想的関係が問題になってこなければならぬと思われる。ところが、この三書の思想的関係を論じた研究はこれまでない。それどころか、この三書をどのように関係づけることによって曇鸞の浄土教思想の全体像を明確にするかという視点さえも確立していないのが今日の現状である。つまり、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との関係については指摘や比較はあっても、その有機的関係に積極的な意味を見出そうとする具体的な思想的考察はまったくない。また『讃阿弥陀仏偈』と『浄土論註』との思想的関係を扱ったものも見当たらない。『略論安楽土義』と『浄土論註』との関係を扱ったものとしては、八木晃恵などの論文があるが、多くは比較的な文献研究にとどまっている。過去の研究においても、近年、発表された曇鸞の浄土教についての諸研究においても『浄土論註』のみで曇鸞の思想を語るという傾向は変わらないのである。

## 曇鸞の三つの著述の性格

この三書が記された時期や、順序についてはほとんど情報がない。しかしながらおおよそ次のような期間であったと考えられる。まず三蔵法師の菩提流支が『浄土論』を訳したのが、北魏の永安二年（五二九）もしくは普泰元年（五三二）

とされ、また伝記（道宣『続高僧伝』）によれば曇鸞が陶弘景（四五六―五三六）を訪ねて梁の国に入ったのが大通年中（五二三―五二八）であると推測できるので、曇鸞が梁からの帰途、洛陽で菩提流支と値遇し帰浄したのは、菩提流支が『浄土論』を翻訳した直後、五三〇年頃の出来事であることになる。曇鸞が浄土教関係の三書を記したのは、この帰浄後であるから、同じく『続高僧伝』の記述に従って曇鸞が六十七歳まで存命したとすれば十三年間の間に、迦才の『浄土論』の「魏末高齊初猶在」という記述に従って北齊の初め（天保五（五五四）年）まで在世していたとすれば二十数年間の間に、これらの三書を著述したことになる。

三書の執筆次第についても明らかなことは分らないが、後述するように、内容から『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とが、この順序で一つの著作として執筆されたことはほぼ間違いない。問題は、この二書と『浄土論註』との前後関係であるが、私個人としては曇鸞の著述についてはもともと正確な情報を与えてくれている迦才の『浄土論』の記述にもとづき、曇鸞はまず『浄土論註』によって〈無量寿経〉の浄土思想を大乘の仏道として基礎づけ、晩年になってともに念仏生活を送った道俗に贈与したのが『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』ではないかと考えている。ただ曇鸞の浄土教思想を理解する上で重要なことは執筆順序ではなく、『浄土論註』と『讚阿弥陀仏偈』・『略論安樂土義』との著述としての性格の差異を明確にしておくことである。曇鸞の著述についてももともと信頼でき、かつ正確な情報を提供する迦才『浄土論』の記述は次のようにこれらの著述の性格をはっきりと区別している。

沙門曇鸞法師は……梁国の天子蕭王、恒に北に向かいて曇鸞菩薩と礼す。天親菩薩の往生論を註解して裁て両卷と成す。法師、無量寿経奉讃七言偈百九十五行并問答一卷を撰集し、世に流行す。道俗等を勧めて往生を決定し諸仏を見ることを得しむ。（沙門曇鸞法師……梁国天子蕭王恒向北礼曇鸞菩薩註解天親菩薩往生論裁成両卷法師撰集無量寿経奉讃七言偈百九十五行并問答一卷流行於世勸道俗等決定往生得見諸仏）

この文は、曇鸞に大きく二種類の著述活動があつたことを示している。つまり「註解天親菩薩往生論裁成両卷」と「撰集無量寿経奉讃七言偈百九十五行并問答一卷」である。前者が世親の『無量寿経優婆提舍願生偈』（以下、『浄土論』）の註解である『浄土論註』を指すことは疑いない。後者の「無量寿経奉讃七言偈百九十五行」が『讃阿弥陀仏偈』を指し「問答一卷」が『略論安楽土義』を指すと理解するか、もしくは「無量寿経奉讃七言偈百九十五行并問答」一卷と理解するか、解釈が分かれるところであるが、私は後者の方が適切であると思う。

つまり『浄土論註』は天親の『浄土論』という特定の著述の註釈書である。その内容は、〈無量寿経〉の仏道が五濁の世・無仏の時を生きる「一切外道凡夫」のための大乘の仏道（易行道）であることを顕彰する思想書である。おそらく『浄土論註』は、当時のさまざまな〈無量寿経〉の仏道に対する疑難に対して、天親の著述を註釈することを通して〈無量寿経〉の仏道が大乘仏道の課題に答えることを証明するために当時の思想界に対して提出されたものであろう。そのことは、巻頭に龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』をあげて菩薩として阿毘跋致を求める人びとに呼びかけることを明記し、巻尾において「愚かなるかな、後の学者、他力の乗ず可きことを聞きて、当に信心を生ずべし。自ら局分すること勿れ」と「後の学者」に対して信を勧めて結ぶことから窺える。

このように菩薩の論に対する註解である『浄土論註』に対して、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』は、『大無量寿経』にもとづく曇鸞自身の宗教的信念を直接に表明する撰述である。『讃阿弥陀仏偈』のなかで曇鸞はみずから二十回にわたり「我」と表白している。とくに第四十九偈においては「我無始より三界に循りて…中略…我仏恵功德の音を讃ず願わくは十方の有縁に聞かしめ」と阿弥陀仏に帰し安楽国土に生まれることを課題とする機の自覚を表白している。曇鸞が『浄土論註』においては、ただの一度も「我」とみずからを表白することがないことに比較すると、この書がいかに主体的な書であるかが分かる。『浄土論註』に曇鸞自身の「我」という表白がないことは、『浄土論註』が註釈書であり思想書であることと関係しているのかもしれない。また『略論安楽土義』は六つの主題からなる問答態（ただし第五問



答のなかに三つの問答が収められる」による四二〇〇字余りの小部の著述であり、そのなかで「我」と名のすることはないが、それはこれが問答という文体であることに関係すると思われる。例えば『浄土論』でも「我」という表白が偈頌においては四度出るが、長行には一度も出ないことに類似している。

『讃阿弥陀仏偈』は大部分が『大無量寿経』の願成就文にもとづく讃歌であり、『略論安楽土義』は『大無量寿経』を想定した問答である。しかしながら両者は、単なる『大無量寿経』の祖述ではない。「無量寿経」という名に象徴される宗教的伝統に立った曇鸞の宗教的課題によって構想され、組織化された、きわめて独創的かつ主体的な著述である。『浄土論註』の二種回向説などのように〈無量寿経〉を思想的に基礎づけようとする著述ではないが、『大無量寿経』という經典によって実現される宗教的な生き活きと表現している。

私たちは、『浄土論註』において当時の仏教思想界の龍象たる教学者・曇鸞大師に出会い、『讃阿弥陀仏偈并論』において「有縁」の道俗とともに『大無量寿経』の伝統に生きた念仏者であり願生者である曇鸞法師に出遇うであろう。

『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』は、『浄土論註』とは異なり思想的基盤構築のために撰述されたものでもないし、またみずからの宗教的信念の表白のためだけに記されたものでもない。それは曇鸞が共に生きようとした道俗たちの念仏生活の基幹となる書として、さまざまな外道の迷信や自力的修道観や浄土教への疑いが蔓延するなかで浄土信仰を純化するために贈与されたのであろう<sup>4</sup>。思想の混濁するただ中において仏道の歩みを確立するための方法が、称名と讃嘆と問答である。曇鸞は、阿弥陀仏の名号の称念と、阿弥陀仏の功德の讃嘆とによる行儀によって宗教的生活を確立し、問答を与えることによって宗教的思索の指標を示したのである。

『大無量寿経』の讃歌と問答（以下、『讃歌と問答』）で論じたように、古写本や迦才『浄土論』によれば、おそらくは『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とは、もと『讃阿弥陀仏偈并論』という一巻の書であったと推測される。

私は、曇鸞の著述を『讃阿弥陀仏偈并論』『浄土論註』の二部作として理解することによって、曇鸞の〈無量寿経〉に

基づく浄土教思想、就中、曇鸞における『大無量寿経』の受容を総体的に理解できると考える。

この『讃阿弥陀仏偈』『略論安楽土義』の両書については、後述するように、はやくより「一巻の書」「一部の書」などの指摘があった。さらに私は踏み込んで、両書の原初形態を「一巻」と理解する見解に与したい。つまり題号を『讃阿弥陀仏偈并論』一巻と想定し、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とをそれぞれ讃偈分と論義分として配当し、それらの有機的関係に心を配りながら読むことを提案したい。この『讃阿弥陀仏偈并論』一巻という視点に立つて、『讃阿弥陀仏偈』を讃偈分として『略論安楽土義』を論義分として、二つの有機的な関係をしていねいに読み解くことによって、曇鸞がどのように『大無量寿経』を受容したかを明確にできるからである。

讃偈は、迦才『浄土論』の記事や、古写本の偈の後に置かれた「百九十五行」「礼五十一拜」という記述によれば、七言を一句とし、二句一行、一九五行から成る偈頌であり、五十一の礼拝すべき主題をもつといえる。主題ごとに「稽首礼」「帰命礼」「我願往生」などと礼拝することから、筆者は『讃歌と問答』において本偈における各偈の末に置かれる礼拝文を五十一として想定し、五十一偈に分けた（資料参照）。内容としては主として『大無量寿経』の願成就経文にもとづいて製作された阿弥陀仏についての讃歌の部分と、龍樹菩薩の讃歌と、およびみずからの表白から構成される。おそらくこのような偈の形態は、本偈のなかで「本師龍樹摩訶薩」と呼び、『浄土論註』のなかで「龍樹菩薩造阿弥陀如来讃中或言稽首礼或言我帰命或言帰命礼」と述べるように、龍樹の造偈の仕事を継承したと考えられる。もとは『略論安楽土義』を并せ一書を形成していたと思われる、その場合は、『讃阿弥陀仏偈并論』の讃偈分と位置づけることができる。『略論安楽土義』が曇鸞の撰かについては疑義も提出されるが、『略論安楽土義』の記事が『讃阿弥陀仏偈』を前提としているのみならず、後述するように、その二つの書の『大無量寿経』理解における有機的な関係からしても『讃阿弥陀仏偈』と同じ著者によるものであることは疑えない。その場合、『讃阿弥陀仏偈并論』の論義分と位置づけられることになる。

『讃阿弥陀仏偈并論』の書誌

ここで『讃阿弥陀仏偈并論』一卷を措定できるテキストについて書誌的な検討をしておきたい。『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを一巻の書として示す現存のテキストは敦煌出土本の二本のみである。この敦煌出土本の二本についてはカラー影印が矢田了章編『略論安楽浄土義』の基礎的研究』（二〇一二年）に収録されている。同書の解題には次のようにある。

（1）大英博物館蔵スタイン本（卷子）

「オーレル・スタイン（一八六二—一九四三）蒐集敦煌出土の古写本であり、現在、大英博物館に所蔵されている。大正初期に渡英した矢吹慶輝氏が、写真資料として日本に将来したことにより、その存在が明らかとなった。／装丁は卷子本であり、曇鸞の著述である『讃阿弥陀仏偈』に続く形で『略論安楽土義』の全文が書写されている。／当写本は、前半部（『讃阿弥陀仏偈』の箇所）が欠損しており、現存する部分で十紙を数えることができる。この内、九紙が『略論』である。／一紙二十四行、一行二十～二十一字内外、外題・撰号は欠損しているため不明、内題は「略論安楽土義」、尾題は「讃阿弥陀仏偈并論上巻」、識語には「景雲二年三月十九日弟子帳万及写」とある。景雲二年は唐代の年号であり、西暦七二一年に当たる。<sup>7</sup>

（2）龍谷大学蔵赤松文庫本（卷子）

「龍谷大学図書館の赤松文庫として所蔵されている古写本である。装丁はスタイン本と同様の卷子本であり、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽浄土義』が途切れることなく書写されている。／スタイン本と同様に、『讃阿弥陀仏偈』

の冒頭より欠損していることから外題を欠き、内題には「略論安樂土義」、尾題には「讃阿弥陀佛并論上卷」とあるが、年紀等を記した識語はない。／約十一紙が現存しているが、その約四枚が『讃阿弥陀仏偈』に当たり、『略論』は七枚を数える。一紙二十八行、一行二十～二十三字内外の古写本である。／その本文は、スタイン本と異なる点もあるが、全体的にはほぼ一致し、同系統である可能性が高い。ただし、当写本の方が『讃阿弥陀仏偈』の部分を多く有している。／なかには誤写と考える箇所<sup>8</sup>に記号を付し、語順を入れ替えることを指示していると考えられる記号も見受けられる。／当写本については、禿氏祐祥氏は「讃阿弥陀仏偈」の古本」（『龍谷大学論集』三〇二）において「赤松連城勸学の記念図書として昨年我が龍谷大学へ購入することが出来た」と述べ、また書風や紙質などから隋末唐初のもものと推定している（一九三頁参照）。ただ、スタイン本のごとき年紀等の識語がないことから、その詳しい書写年代は明らかとならない。

このように当該書の解説は、敦煌出土の二本を曇鸞撰述の『讃阿弥陀仏偈』と途切れることなく書写された『略論安樂土義』という二つの著述の写本であるという理解を示している。このような記述になったのは従来の二つの独立した著述という見解を重視したためと、『略論安樂土義』は曇鸞の著述ではないという学界の一部の見解に配慮したためであらう。

しかし、私はこのような理解には不十分さを感じる。この記述では、写本の形態として、『讃阿弥陀仏偈』には尾題が置かれていないことになり、また『略論安樂土義』は主題と尾題が齟齬するという結果を招くことになるからである。また管見のかぎりではあるが、矢吹慶輝氏が紹介するスタイン本の他の写本では二つの著述がこのような形式で続けて書写されている例を見ることができない。このような写本としての体裁上の矛盾は、「略論安樂土義」という文を題号ではなく、問答導入句、もしくは問答主題提示句として見ることによって解決するのではないかと思う。解題が指摘する

ようにこの二つの写本はともに前半部分が欠損しているために外題と首題（内題）と撰号を確認することができないが、讃偈が終わった後に「讃有一百九十五行禮有五十一拝竟」と讃礼の数を記し、改行して「略論安樂土義」という一文を置き、さらに改行して現在『略論安樂浄土義』として伝えられる同様の全文を収め、尾題に「讃阿弥陀佛并論上卷」と記している。つまり先入観なしに見れば、この写本は次のように理解すべきなのである。この二つの写本は、讃偈と問答からなっている「讃阿弥陀佛并論 上卷」という著述の後半部分の残存である。

# 想定される題号

では『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とが一卷の書であったと推測した場合、どのような題号が想定できるであろうか。『讃歌と問答』において検討したが、紙面の関係で省いた箇所も多く、誤記もあったので再度検討してみたい。現在、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』とが本来一卷であった可能性を指示する題号は以下のものである。

迦才『浄土論』	「無量寿経奉讃七言偈百九十五行并問答一卷」
スタイン本	尾題 「讃阿弥陀仏并論上卷」
赤松本	尾題 「讃阿弥陀仏并論上卷」
良忍手沢本	首題 「□□弥陀仏偈并論」
祐誓寺	内題 「讃阿弥陀仏偈并論」
『安養集』	引文 「讃阿弥陀仏偈并論」

祐誓寺本については、筆者は未見であるが、名畑によれば『略論安樂浄土義』に相当する部分をもっていないという

ことなので、良忍手沢本の『讃阿弥陀仏偈』と同じ形態ということになる。

私は一覧に掲げた題号から「讃阿弥陀仏偈并論」を一巻の題号として想定したいのだが、敦煌出土の二本の尾題に「偈」の一字を欠くことから、題号に「偈」を加えるかどうか問題になるところである。「偈」を入れない場合は、敦煌出土本によって「讃阿弥陀仏并論」として「讃阿弥陀仏と論〔阿弥陀仏〕」という意味に理解することができる。ただ私は、別流した偈が『讃阿弥陀仏偈』と呼ばれているところから「偈」の字を入れて題号を「讃阿弥陀仏偈并論一巻」と想定したいと思う。

ちなみに「讃阿弥陀仏偈」という名称については、道綽の『安樂集』のなかでは「大経讃」などと呼んでいるが、この名称は、この偈讃の内容にもとづいているものであり、『浄土論註』や『略論安樂土義』の名称を明示しないという引用の仕方と照らしても、著述名を示しているとは考えにくい。また迦才の名称も形態についての言及であり、著述名とは考えにくい。そもそも道宣、道綽、迦才がいずれも曇鸞の著述について明確な書名をあげていない。このことから曇鸞自身による題号がもとこの二書に存在したのだろうかという疑問さえも提示されている。

### 想定される撰号

曇鸞の『浄土論註』における「人に因つて法を重ずるを庶ふが故に某造と云ふ<sup>10</sup>」という撰号の理解に従えば、もし撰号が後人によって置かれたとすれば、道綽、迦才、道宣が同じく「法師」という呼称を用いていることから、「曇鸞法師作」であったと思われる。

上述したように『略論安樂土義』については、撰者を曇鸞とすることには、古くから疑義が提出されている。非曇鸞説の有力な基盤を与えるのが、元暉（六一七―六八六）撰の『両卷無量寿経宗要』および撰と伝えられる『遊心安樂道』において、『略論安樂土義』の第九問答を「什公説言」と鳩摩羅什の所説として引用していることである。しかしこの鳩

摩羅什説は『観無量寿経』『浄土論』の訳出が鳩摩羅什以降であることなどから成立しないことが論証されている。ただ岡亮二はほぼ同時代の迦才と元暁に異なる二説が存在していた事実は重要であるとして、『略論安楽土義』の曇鸞撰述説を再検討するべきであるとし、『浄土論註』と『略論安楽浄土義』との思想的差異などを指摘して、曇鸞以後、『安楽集』以前に誰かによって撰述されたと主張している。<sup>11</sup>ただ私は、元暁にもとづく羅什説が成り立たないことが論理的に明らかである以上、迦才の『浄土論』の記述にもとづき曇鸞撰として受け止めることが穏当であると思う。また岡の『浄土論註』と『略論安楽土義』との思想的差異を示しての非曇鸞撰述説は、これまでの『浄土論註』を曇鸞の名著とする先入観に基づいた視点からの考察であり、曇鸞の二部作という視点が欠如しているところに問題があると思われる。つまり二部作という視点から言えば『浄土論註』と『讃阿弥陀仏偈并論』の論議分の教義についての筆格が相異するのはむしろ当然なのである。また上述したように、私にとつての重要な論点は、『略論安楽土義』が曇鸞撰かどうかという点よりも、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを一人の人間による著述と認めなければならないという点にある。

### 原初形態

以上の見解によつて想定される敦煌出土本（スタイン本）の原形は次のような形態であつたと推測することができる。

讃阿弥陀佛并論上卷

曇鸞法師作

南無阿弥陀仏 〔釈名無量寿傍経／奉讃亦曰安養〕

現在西方去此界 十万億土安樂土

（…一九三行略…）



如是十方無量佛 咸各至心頭面礼

讃有一百九十五行 礼有五十一拜竟

略論安樂土義

問安樂國於三界何界所攝答曰釋論言如斯淨土

(…中略…)

安樂國時一入正定聚更何所憂

讃阿弥陀佛并論上卷

もちろんスタイン本の書写された七一一年は、曇鸞の寂後よりほぼ一五〇年の年月を経ており、曇鸞の原本の形態をどれほど保持しているかは不明としかいえないが、迦才の記録する形態に合致することから、おそらく両書を一卷とする伝承があったのであろう。

### 「一卷」という視点の形成

中国・朝鮮において、両書を一卷としてみる唯一の情報とは、迦才『浄土論』の記述のみである。しかし迦才の「法師撰集無量寿経奉讃七言偈百九十五行并問答一卷」という記述によつて「無量寿」以下を書名とみることは難しい。なぜなら迦才は『浄土論註』についても「沙門曇鸞法師……注解天親菩薩往生論裁両卷」としか述べていないからである。また道宣の『続高僧伝』は著述名において錯誤があるし、曇鸞の浄土思想の継承者と目される道綽の『安樂集』は、書名を示さずに『浄土論註』『讃阿弥陀仏偈』『略論安樂土義』を引用し、『讃阿弥陀仏偈』にあたる偈文を「大経讃」「傍経



大経奉讃」「大経偈」と呼んでいるが、それを書名と見ることは難しく、結果、これらの記述からは『讃阿弥陀仏偈并論』を想定する情報どころか曇鸞の著述の正式の名を窺う情報もない。彼ら以後にも『讃阿弥陀仏偈并論』という著述を示すような記録は目録類を含めても見出せない。

転じて日本に目を向けると、この両書を一卷として書写したテキストは現在のところ発見されていない。ただ後に紹介するように一卷であったことを示唆する書として良忍手沢本をあげることができる。

日本では、曇鸞の著述に言及したのは、元興寺三論宗の智光の『無量寿経論釈』五卷（宝亀年間七七〇～七八〇年）が初めてとされている。そこには『浄土論註』の多くと、十二光の解説に『讃阿弥陀仏偈』が依用されているが『略論安楽土義』の引用はない。

禿氏祐祥によれば、平安時代、寛治八（一〇九四）年永超の勘録した『東域伝灯目録』には『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とが羅什の著述として記載されていた。

無量寿経論註述	一卷
同論偈註解	一卷 曇鸞
同論釈	五卷 日本智光
讃歎阿弥陀仏偈	羅什
略論安楽土義	同上

（禿氏祐祥「往生論註解説」<sup>12</sup>）

また源隆国の『安養集』<sup>13</sup>（二〇七〇年頃）には、『浄土論註』が曇鸞撰として引用されている一方、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』が鳩摩羅什作として引用されている。まず『讃阿弥陀仏偈』は『讃阿弥陀偈《羅什》云』（三二九頁）、『讃阿弥陀仏偈《羅什》云』（三八六・四四四・五一五頁）、『阿弥陀偈《羅什》云』（四二八頁）などの名称で引用される。ただ一箇所、『讃阿弥陀仏』安樂土義偈《羅什》云（四〇五頁）という特殊な例も見出すことができるが、これは「安樂土義」の四文字を削除し、右に「讃阿弥陀」と訂正すべきところ「安樂土義」の四文字が残ってしまったもの（梶信暁『安養集』四〇五頁）であろう。とくに注目すべきこととして『讃阿弥陀仏偈并論《羅什》云』（三三七頁）として『讃阿弥陀仏偈』が引用されている。この名称は後述する良忍手沢本『讃阿弥陀仏偈』の首題との関連を見ることができる。つぎに『略論安樂土義』は、『安樂土義《羅什》云』（九六頁）「安樂土義云《羅什》」（二六六・三五二頁）と、やはり鳩摩羅什作として引用されている。このように源隆国の『安養集』やその影響下に作られた良慶の『安養抄』<sup>14</sup>などを見ると、天台の伝統では、概ね両書がそれぞれ鳩摩羅什作の別書であるとして扱われていたといえる。

ただ両書が一卷であったことを暗示するテキストがある。それが大原来迎院如来蔵の良忍手沢本として知られる『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』である。奥書によると両書ともに「執筆僧藥源」によって書写移点され、『讃阿弥陀仏偈』は康和元（二〇九九）年十二月一日に書写を、同二日に移点を了え、『略論安樂土義』は翌康和二（二一〇〇）年二月四日に書写を、同六日に移点を了えていることが分かる。この両書は、『讃阿弥陀仏偈』から『略論安樂土義』の次第でほぼ二ヶ月を空けて書写され、良忍（二〇七三―一一三三）の用に供せられたものであることが分かる。良忍や藥源が両書をどのような関係として理解していたかは不明である。ただ『讃阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』を鳩摩羅什作とする『遊心安樂道』も同じく書写されていることから鳩摩羅什作と理解していたのかもしれない。また、この書写と同時期（康和元年（二〇九九―一二三三）の間）と思われる写本に良忍の自筆署名のある迦才『浄土論』（中巻のみ）が大念仏寺に残されている<sup>15</sup>。このことから、良忍は曇鸞に「無量寿経奉讃百九十五行并問答一卷」という著述があったことは知っ

ていたと思われる。また良忍とほぼ同時代の珍海（一〇九一一一五二）の『決定往生集』にも迦才の所説として「曇鸞法師注解往生論、撰無量寿讚并問答一卷、勸道俗等決定往生」と述べている。<sup>16</sup>とすれば書写された原本が羅什作となっていたのに従っただけかもしれない。

ともかく良忍手沢本の両書は、日本に現存するものとしてはともに最古の写本であり、とくに『讚阿弥陀仏偈』は一九五行の偈文がほぼ完備しているものとしてきわめて貴重である。ただ卷末に示される「讚一百九十五」の示す一九五行の句数としては三句が不足している。つまり第六偈で二句「遇斯光者業繫除 是故稽首畢竟依」、第九偈で一句「光所至処得法喜」に相当する部分が欠けている。注目したいのは、卷末に示される「礼五十一拜」によって偈文を五十一段に分科する意図を見ることができることである。『讚阿弥陀仏偈』は、外題には良忍の自筆で「讚阿弥陀仏偈 良忍之」とあり、首題には「□□弥陀仏偈并論 羅什法師作」とあるが尾題は置かれていない。また『略論安楽土義』は、外題には「安楽土義 良忍之」とあり、首題、尾題ともに「略論安楽土義」とある。現在、両書は別の巻に書写されているが、『讚阿弥陀仏偈』の首題「讚阿弥陀仏偈并論」が敦煌出土本の尾題「讚阿弥陀仏并論」と類似していること、また偈文の後に尾題が置かれていないことも敦煌出土本と同じであることから、敦煌出土本と同じく、もと一卷であった可能性を窺うことができる。ただし敦煌出土の二本と異なるのは、敦煌出土本の尾題が「讚阿弥陀仏并論」であるのに対して、良忍手沢本の首題は「讚阿弥陀仏偈并論」と「偈」の一字が加わっていることと、良忍手沢本の『略論安楽土義』の尾題が「略論安楽土義」であることである。

このようにして見ると、中国・日本を通して『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを一巻の書として明示した記述は迦才の『浄土論』のみということになる。おそらく迦才以後、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』は別に流布したのであろう。ただし両書が深い関係にあることは江戸時代の学僧たちによって指摘されていたし、さらに近代に入り、二つの敦煌出土本や良忍手沢本が相次いで紹介されるに至り、両書が一部の書であった可能性が研究者によって指摘さ

れるようになるのである。

### 『讃阿弥陀仏偈并論』という視点の形成

これまでに両書の関係を指摘した見解を紹介しておこう。廃仏毀釈に立ち向かった明治の浄土宗の僧侶・福田行誠（?～一八八八）は、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との両書の関係について、「されとも共に大經の文義にして。一人の製作なれば。古来は讃と論と合帙して流行せしが。今も合帙の本ま、あり一論讃さして関ることもなければ。近ごろは総て論のみ別行せるなり」<sup>17</sup>（『玄譚并私説』一八四〇年頃）と二書の関係を否定的に述べている。このような見解もあるが、浄土真宗の宗学者においては、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とが深い関係にあるという指摘がはやくからあった。今回、注目したいのは、浄土真宗本願寺派の学僧であり仰誓の門人であった栖浄院誓鑑（一七五三～?）の『略論安楽浄土義讃慧録』二卷（一七九三年、以下、『讃慧録』）である。『讃慧録』は、『略論安楽土義』を玄義分と正積分との二門に分け、さらに玄義分を、一に真偽を判ず、二に造由を挙ぐ、三に大意を明かす、四に流伝を示す、五に注疏を評すの五門に分けて解説している。その中の第二において次のように『略論安楽土義』と『讃阿弥陀仏偈』との関係を指摘している。

第二に造由を挙げるとは、蓋し夫れ勸信誠疑の法門は浄教の鴻基・大經の綱領なり。鸞大師前に大經に傍て<sup>よ</sup>一百九十五行の奉讃を作る、「讃阿弥陀仏偈」と名づく是れなり。然るに彼の偈の中、専ら經中の勸信の文を頌して物をして願生の心を生ぜしめて未だ一句の誠疑に亘る者有らず。豈に闕くこと無きことを得んや。故に次いで斯の『論』を撰し、正しく誠疑の文を述して以て人をして惑を仏智不思議に解く者なり。若し夫れ『往生論注』は勸誠兼ねて存す。如実不如実を判ずる等の如きは是れなり。然れば則ち此の論と讃偈と由<sup>な</sup>を鳥翼車輪のごとく一も闕ては則ち不

可なり。迦才、凝然之を讃偈に併せて言を為すは良に由有るかな。当に知るべし。勸誠を具足の為に此の論を造るなり。然を有る人之を知らず、「何の益有りてか『論注』の外に『略論安楽浄土義』を作るや」等と言うは疎昧の甚だしき一に何ぞ此に至る<sup>18</sup>。

このように『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との関係を、「勸信誠疑の法門」にもとづいて鳥の両翼や車の両輪のような関係として理解している。つまり『讃阿弥陀仏偈』は勸信の著述であり、『略論安楽土義』は誠疑の著述として、「一も關いては則ち不可なり」とその密接な関係を指摘している。さらに曇鸞の『浄土論註』が勸信誠疑を兼ね備えている著述である以上、『讃阿弥陀仏偈』のみを曇鸞の著述として、『略論安楽土義』を認めないことは理に合わないとして批判している。誓鑑は一卷の書とまでは述べていないが、敦煌本などが紹介されていないことを考えれば当然であろう。

江戸時代後期の真宗大谷派の学僧であり、鳳霊の養子となつて豊前正行寺を継職した雲華院大谷（一七七三—一八五〇）は、天保十五年に『讃阿弥陀仏偈』を安居で講じており、年代は不詳だがその後には講義したと推測される『略論安楽浄土義講義』において『略論安楽土義』を曇鸞の撰述とする理由を次のように述べている。

故に論註開卷第一義に謹案龍樹菩薩十住毘婆沙等と天親の論を釈し乍ら、龍樹を上て其信方便の易行を龍樹より天親御相承あらせられて浄土論を作り玉へば、論註もとより其の心なり、よて鸞師の讃弥陀偈はその源にかえられて龍樹に習ひ、唯大經にのみよて弥陀の仏徳を讃嘆し玉ふ、よてこれを大經讃と称す、その次が略論を作り玉ふ、その所由は其初めに作り玉ふ大經讃に略する所の大經の要義を論ぜん為めの此書撰集なり、其大經讃に略する要義を数番問答して一卷を成し玉ふ略論なり、これを迦才の問答一卷と申さる、は宜なり、爾れば略論と大經讃と一組に

して大経讃に属すべきものなり、」<sup>19</sup>「此論は大経讃にそへて作り玉ふ」<sup>20</sup>

大含は、迦才の「并問答一卷」という記述に言及したうえで、両書を「一組」、「(略論は)大経讃に属すべきもの」「此の論は大経讃にそへて作り玉ふ」と述べて、両書の親密な関係について指摘している。ただ「大経讃に略する所の大経の要義を論ぜん為め」としか位置づけておらず思想的有機的関係には言及していない。これらの点については天保十五年の安居講義『讃阿弥陀仏偈講義』(未翻刻)においても言及していない。

さて『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とを曇鸞の著述として合わせて所収したはじめての七祖聖教として南條神興校正『七祖聖教』(十行本)がある。<sup>21</sup>そのことについては南條の師であった大含が『略論安楽土義』を曇鸞の著述と断定したことによるのであろう。

両書の関係という点では、矢吹慶輝「敦煌出土讃阿弥陀仏偈併に略論安楽浄土義に就て」<sup>22</sup>に敦煌出土本が紹介されてから状況は大きく進展した。ただし文献的関心を離れ、思想的関心によって両書を考察する研究はわずかばかりしか現れなかった。

毛利憲明は、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』とが合本かあるいは本来一具のものかについて、もと一書であったものが二書として流传するようになった時代を推測している。また『浄土論註』と『略論安楽土義』との内容を比較として同一人物の筆格であるとしている。<sup>23</sup>

これらの研究を承けた八木晃恵は、『略論安楽浄土義』研究崖略」において『略論安楽土義』の要を『浄土論註』と比較し、思想内容の合致や文体の契同を検討することで曇鸞の撰述であることを論証し、また「第四章『略論』の内容と『讃阿弥陀仏偈』」という項目を掲げ次のように述べている。

「先哲は略論は『讃弥陀偈』に言及せられないものを補足されたものとして種々に論じてある……中略……如上、『略論』を『讃弥陀偈』の補義として見ることは決して不当ではない。『讃弥陀偈』が『大経』のみに止まるのを、今は今日は『大経』の外に『観経』・『無行経』及び『論註』に出名する『業道経』を出し、論は南天(龍樹)の『大論』、北天(世親)の『浄土論』を双翼両輪として集成せられ、『讃弥陀偈』と合して安楽浄土論の有機体系を完備するのである。敦煌写本に「讃阿弥陀仏(偈)并論」として此の二部を一括してあるのは蓋し一部の書名としての原基的形態を示すものと云へよう。<sup>24</sup>

八木は、この課題には二頁ほどしか割いていない。そして『略論安楽土義』は「『讃弥陀偈』と合して安楽浄土論の有機体系を完備する」、また敦煌出土本の尾題は「一部の書名としての原基的形態」とまで述べているが、結局は『略論』を『讃弥陀偈』の補義として見る」という理解にとどまっている。

ついで文献的研究において大きな転機をもたらしたのは、前述の良忍手沢本である『讃阿弥陀仏偈』『略論安楽土義』の二本の古写本の紹介である。藤原凌雪は、この書がもと一部の書であったことを前提に、二書として別に流伝した理由について次のように推測している。

私も、先輩の示唆の如く、曇鸞の原著は、大経によつて浄土の二報を讃じた讃偈と、それによつて明かし得なかつた重要教義に関する要義問題としての略論から成る「讃阿弥陀仏偈並論」なる一部の書であつたが、讃偈の方はやがて礼文廻向等を加えて頌誦用に編曲せられて、日常勤式として浄土教徒に珍重されるに至つたのだと思う。<sup>25</sup>

藤原は、両書を「一部の書」と呼び、讃偈と略論が別に流布するようになった事情を讃偈が日常勤式のために使用さ



れるようになったからではないかと推測している。ちなみにこの件については毛利憲明によって早くから指摘されていたと付言している。

名畑応順の『略論安楽浄土義講案』は、現在まで『略論安楽土義』についてのものともまとまった著述である。名畑は敦煌出土本を紹介するなかで「この写本によれば、讃偈と略論とは併せて一部の書であって、別行すべき性質のもではなかったのである」と指摘している。<sup>26</sup>しかしながら両書の関係について考察するよりは、『略論安楽浄土義』と『浄土論註』との関係に焦点を当てている。

最近では松尾得晃が『略論安楽土義』に限ってではあるが、これまでの先行研究をまとめて次のように述べている。

だからといって、『略論』が『讃阿弥陀仏偈』そのものを略して論じたものではないことに注意しておきたい。あくまで、『讃阿弥陀仏偈』・『略論』は、『無量寿経』所説の阿弥陀仏およびその浄土について著されたものである。一方、『略論』は『無量寿経』に説かれる内容について問答したものであり、『讃阿弥陀仏偈』そのものについて言及したのではない。前書の浄土教思想を論じる場合、両書は、『無量寿経』そのものを対象とした典籍であることを基本的に据えなければならない。

(『略論安楽浄土義』の概要と研究課題)<sup>27</sup>

松尾は、『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』との親密な関係と『浄土論註』とは異なった関心で読むことを指示する点で従来の研究成果をよくまとめているが、二つの書の思想的関係についてはほとんど示すところがない。しかしながら、この見解こそが両書のおかれた今日の研究状況をよくあらわしているといえよう。



## 小 結

以上、『讃阿弥陀仏偈并論』一卷という視点の形成、およびそれにもとづいた曇鸞の二部作という視点が曇鸞の浄土教理解に必要な理由を述べてきた。

『讃阿弥陀仏偈』は『略論安楽土義』を想定しており、『略論安楽浄土義』は『讃阿弥陀仏偈』を前提としている。しかし、両書が「一部」「一具」であるという理解は、いまだ曇鸞の『讃阿弥陀仏偈并論』という営みの本質を明らかにするためには不十分なのである。『讃阿弥陀仏偈并論』一卷における讃偈分と論義分という理解によってのみ、曇鸞が『大無量寿経』をどのように受容したかを総体的に理解する視点を確立できるのである。与えられた紙数をこえたので曇鸞における『大無量寿経』受容の思想的な意義についての考察は別稿に譲りたい。

## 註

- 1 迦才『浄土論』下（『浄土宗全書』六・六五七（三二）頁。ちなみに『浄土宗全書』は「法師、無量寿経を撰集し、七言偈百九十五行并問答一卷を讃じ奉る」と読んでいるようである。
- 2 曇鸞『浄土論註』上（『真聖全』一・二七九頁）。
- 3 曇鸞『浄土論註』下（『真聖全』一・三四八頁）。
- 4 当時の状況に対する曇鸞の受け止めは、『浄土論註』の冒頭における五三の難がよく示している（『真聖全』一・二七九頁）。
- 5 『真聖全』一・三八二頁。
- 6 曇鸞が龍樹の偈、おそらくは『十住毘婆沙論』『易行品』の弥陀讃か、『十二礼』を継承するかたちで偈を形成したという伝承があったのかもしれない。
- 7 矢田了章『略論安楽浄土義』の基礎的研究』四頁。
- 8 矢田『略論安楽浄土義』の基礎的研究』六二頁。

- 9 名畑『講案』三一頁。
- 10 『真聖全』一・二八一頁。
- 11 岡亮二「『略論安樂浄土義』の一考察―曇鸞撰述説をめぐりて―」（『宗学院論集』三八・一九六七年）。
- 12 禿氏祐祥「往生論註解説」（『宗学院論輯』三五、三三頁）。
- 13 梯信曉「宇治大納言源隆國編 安養集 本文と研究」（『百華苑』一九九三年）。
- 14 『安養抄』第二卷（『大正蔵』八四・一六五頁上）。
- 15 筆者は未見。工藤量導「迦才『浄土論』と中国浄土教―凡夫化土往生説の思想形成」（法蔵館、二〇一三年、二八頁）に依る。
- 16 珍海『往生決定集』（『大正蔵』八四・一一五頁下）。
- 17 福田行誠『玄譚并私説』（二八四〇年頃、『浄土宗全書続六』七四頁）。
- 18 誓鑑『讃慧録』第七丁ウ（第八丁オ）。
- 19 大含『講義』二九八頁。
- 20 大含『講義』二九九頁。
- 21 名畑は、「南條神興が校訂して、明治十二年に、京都の西村九郎右衛門以下六書肆によつて出版せられた、三冊の小型七祖聖教に至つて、始めて略論が編入せられた」（名畑三六頁）としている。
- 22 『宗教界』一三六・一九一七年。『鳴沙餘韻』解説篇所収、一九三三年に再録。
- 23 毛利憲明「略論作者の研究（一）から（五）」（『真宗研究』一四〇一八、一九二八年）および「讃阿弥陀仏偈の原形」（『真宗研究』二九、一九三〇年）。
- 24 八木昊恵「『略論安樂浄土義』研究涯略」（二〇七〇九頁）。
- 25 藤原凌雪「讃阿弥陀仏偈の古写本―来迎院の良忍手沢本に就て―」（一九五五年）。
- 26 名畑『略論安樂浄土義講案』二九頁。
- 27 松尾得見「『略論安樂浄土義』の概要と研究課題」（『略論安樂浄土義』の基礎的研究）二〇一二年、一五五頁。

主要参考文献一覧

- 加来雄之『大無量寿経』の讃歌と問答―曇鸞撰『讃阿弥陀仏偈并論』を読む― 東本願寺、二〇一二年。
- 名畑應順『略論安楽浄土義講案』 東本願寺、一九六六年。
- 矢田了章編『略論安楽浄土義』の基礎的研究』 永田文昌堂、二〇一二年。



### 三、資料

#### 1 解題

準備研究の成果として『讃阿弥陀仏偈』（以下、『讃弥陀偈』）と『略論安楽土義』（以下、『略論』）との訓点資料について「『讃阿弥陀仏偈』訓点資料三本対照表」・「『略論安楽土義』訓点資料三本対照表」を作成した。

この対照表は凡例にも記すが以下のような構成になっている。

『讃弥陀偈』については、

上段 良忍手沢本（良忍本）

中段 円空写本模写本（円空本）

下段 南條校正本（南條本）

『略論』については、

上段 良忍手沢本（良忍本）

中段 常楽寺蔵本（常楽寺本）

下段 南條校正本（南條本）

『讃弥陀偈』および『略論』も、上段は良忍本、下段は南條本となっているのは、この二本については『讃弥陀偈』と『略論』とが同一者によって訓点を施されたテキストであることによる。

良忍本の『讃弥陀偈』は、すでに『大無量寿経』の讃歌と問答（以下、講録）資料篇で紹介したが、『略論』の訓点を含めた翻刻はこれまでなかった。（ちなみに『浄土真宗聖典全書』所収本は良忍本を底本としているが、訓点については採用していない。）南條本『讃弥陀偈』についてはすでに講録資料篇で校異を含めて紹介済みである。『讃弥陀偈』対照表中段の円空本は講録資料篇に掲載済みである。『略論』対照表中段の常楽寺本についてははじめての翻刻である。ただし円空本や常楽寺本が両書の流传過程においてどのような位置をもつかは今後の課題である。

『讃弥陀偈』および『略論』は北魏から北斉時代に活躍した仏者曇鸞和尚によって造られた。両書は迦才の『浄土論』に「法師撰集無量寿经。奉讃七言偈百九十五行。并问答一卷。流行于世。勸道俗等。決定往生。得見諸佛。」（『大正藏』四七・九七頁）と紹介され、それぞれ『大無量寿経』についての讃偈と問答の著述である。

『讃弥陀偈』は、巻末に置かれる「讃一百九十五 禮五十一拜」（南條本）という指示に従えば、七言一句、二句一行で、全体は一九五行、五十一段の偈頌から構成される。題号および、巻頭の「南無阿彌陀佛」「釋名無量壽傍經」奉讃亦曰安養」（南條本）という仏号・釈名文の示す通り、仏の名号すなわち「南無阿彌陀仏」を根本原理とし、その展開として『無量寿経』に傍えて、阿弥陀仏とその安養国を讃嘆することを内容とする。

構造としては『無量寿経』の文に基づく総讃、衆生世間清浄（阿弥陀仏、聖衆）、器世間清浄（安樂土の地、虚空、水）の讃嘆。それから『無量寿経』に基づかず、曇鸞が讃偈を造る背景として、師徳（龍樹）の讃嘆や自身の懺悔と回向、十方諸仏への帰依をうたう結讃という次第である。

『略論』は、阿弥陀仏の安樂土と、そこに衆生が往生していくことについての主要な問題を問答形式で論ずる散文の書である。構造としては大きく六問答から成り、前二は安樂土の義を論じ、後四は往生の義を論ずる。第一「三界摂不問答」、第二「莊嚴数量問答」、第三「輩品因縁問答」、第四「胎生快樂問答」、第五「仏智疑惑問答」、第六「十念相続問答」という次第である。特に第五問答は胎生往生の原因となる仏智疑惑の所以を『無量寿經』の「不了仏智」等の文に見定め、総じては「仏智」への疑惑を対治するはたらくとして、別して仏の「不思議智」、「不可称智」、「大乘広智」、「無等無倫最上勝智」についてそれぞれ詳しく論じている。

この『讃弥陀偈』と『略論』は今日では別々に流布しているが、『略論』の第二問答には、「讃を尋ねて知るべし、復た重て序べず。」(南條本)と、明かに『讃弥陀偈』を前提した記述がある。また現存最古の敦煌出土スタイン本が『讃弥陀偈』と『略論』を連続して記した後、尾題に「讃阿弥陀佛并論上卷」としていることや、日本最古の写本である良忍本の『讃弥陀偈』の内題に「□□彌陀佛偈并論」とあること等から両書が一具の書であった可能性が指摘されている。講録ではさらに踏み込んで、これらの原初形態は『讃阿弥陀仏偈并論』という一巻の著述であったという視点を提出している。

讃阿弥陀佛偈訓点資料三本

(一) 大原来迎院蔵良忍手沢本

京都大原の来迎院所蔵。日本においては現存する最古の写本である。外題に「讃阿弥陀佛偈 良忍之」、奥書に「康和元年十二月一日申時於大原報身房書寫功畢／同二日移點了 執筆僧藥源／願依此書寫功自他共生極樂國矣」とある。ここから康和元年(一〇九九)執筆僧桑門藥源の手によって書写・移点され、来迎院の創立者である良忍の用に供されたものと知ることができる。

所有者の良忍は延久五年（一〇七三）一月一日、尾州知多郡富田の莊（現愛知県東海市）に生まれた。十二歳で比叡山にて出家、檀那院良賀より天台の教観を学んだとされる。嘉保二年（一〇九五）、二十三歳の時に大原に隠遁、薬源によって『讃阿弥陀仏偈』が書写されたのはその後二十七歳の時に当たる。そして天仁二年（一一〇九）、大原に来迎院を創立、永久五年（一一一七）に阿弥陀如来の示誨を受けて融通念仏を感得し、以後その勧進に務める。天承二年（一一三二）、六〇歳で大原来迎院にて入寂する。来迎院にある如来蔵に収められてある良忍関係の資料中、良忍の書写本や手沢本は十五点現存している。『法華玄義』や『摩訶止観』など天台研究を志向していたことを示す資料の中で、浄土教系の書物は『讃阿弥陀仏偈』と『略論安楽土義』、そして筆者不明の『遊心安楽道』の三点である。

良忍は大乗円頓戒の戒系として禅仁と観勢からその戒脈をうけ、薬忍、叡空、嚴賢の三系を輩出している。その中で叡空は法然の師に当たり、このことは法然の弟子親鸞が『讃阿弥陀仏偈』を重用し、また孫弟子に当たる円空が本偈を書写していたことも併せて、日本浄土教の伝統の中で本偈が流伝していた可能性を伺わせる。

本書の装丁は一卷の卷子本であり、野引の四紙よりなる。一紙の行数は二十八行、一行四句、一句は基本七言である。ただし六言あるいは八言の箇所もあり、また第六段に二句、第九段に一句の欠失、第十九段に一句の付加ありと、他の本と異なるところが多い。不完全ではあるが訓点が付され流布本（『真宗聖教全書』二所収）にあるような礼拝・回向文はない。

巻首には「□□（欠失）彌陀佛偈并論 羅什法師作」とある。これは本書が本来『略論』と一具のものであったことを決定付ける資料として重要である。また源隆国の『安養集』（一〇七〇頃）や永超の『東域伝灯目錄』（一〇九四）に伝えられるように、本書が鳩摩羅什の撰述として流伝していたことを示している。

第十四、十七、四十三、四十九段を除いて、一段ごとに右肩に一から五十一までの番号が振られており、六字名号「南無阿彌陀佛」が第一段に組み入れられていることも特徴的である。



(二) 大谷大学蔵天保十五年深草円空写本模写本

京都大谷大学所蔵。外題は「讃阿彌陀佛偈 深草圓空本」、内題は「讃阿彌陀佛偈一卷」、撰号は「曇鸞法師作」とある。本となる「円空本」の奥書として、「願以書寫力早生彌陀國、一校了、寛元々年後七月廿一日書寫了、釋圓空」と、京都深草にある真宗院の開祖、円空立信が寛元元年（一二四三）にこれを書写したことを示している。また奥書には「深草霞谷眞宗律院開祖立信上人眞本摹寫即了、天保十五辰四月廿三日 同所 善福寺住僧良實、甲辰六月廿六日講此偈了日良實學人舉贈之、雲華院大含領受、以爲藏本」とある。すなわち円空の真筆になる写本を、天保十五年（一八四四）、同所善福寺の僧良実が書写した。書写が終えられたのは同年四月十五日に開講された安居で本偈が講じられている最中であり、満講時にその講師であつた大谷派の学僧雲華院大含（一七七三―一八五〇）に贈与されたことになる。

円空は法然滅後二年に当たる建保元年（一二二三）八月十日、大和国（現奈良県天理市）に生まれた。十五歳で法然の弟子西山証空の下で出家、以後二十余年浄土教を学んだとされ、本偈を書写したのはその後半、三十一歳の時に当たる。証空の示寂を転機とし、建長三年（一二五二）、三十九歳で京都深草に真宗院を建立。以降弘安七年（一二八四）の入寂まで専修念仏に励み、研究・講説に務めたとされる。著作に『観経疏記』十卷があり、弟子として顕意道教などがある。本書の装丁は和綴じの十四丁、半葉八行で、一行二句、一句七言で整っている。ただし大きな誤綴があり、あるべき丁の順を一、十四とすると、本書は一、二、七、八、五、六、三、四、九以降という順で綴じられている。訓点が附され、礼拝・回向文はない。

巻頭には迦才の『浄土論』と『浄土五祖伝』・『続高僧伝』で本偈について記述された箇所の抜き書きと、本偈を大きく五科に分けた図が記載されている。内題・撰号・名号・釈名が二箇所があり、撰号と名号の位置など異なりがあるが、前者の末尾には「イ」とあり異本の表記であることを示している。

(三) 南條神興校正『真宗・校本七祖聖教』所収本

明治十二年（一八七九）三月に出版された『真宗校本七祖聖教』三巻の中、上巻所収のもの。この『七祖聖教』については表紙裏に「明治十二年三月發兌／南條神興校正／七祖聖教／京都書林 六書堂藏版」とある。出版以来、昭和八年（一九三三）の昭和校訂本が出るまで真宗教団・学界に普及し、汎く依用された。曇鸞の撰述として『往生論註』に次いで『讃阿弥陀仏偈』、『略論安樂浄土義』が続いて載せられている。校正者の南條神興（二八一四―一八八七）は、『讃阿弥陀仏偈』・『略論安樂浄土義』を安居において講述した大含の弟子である。

題号「讃阿弥陀佛偈」、撰号「曇鸞法師作」とある。全体十六丁、半葉十行、一行二句、一句七言で整っている。訓点が付され、各偈文の前後には流布本と同様に礼拝・回向文があり、偈文の区切りが明確であるが、総計五十段となっている。

『略論安樂土義』訓点資料三本

(一) 大原来迎院蔵良忍手沢本

上述の『讃阿弥陀仏偈』良忍本と共に大原来迎院に蔵されている。外題は「安樂土義 良忍之」、内題・尾題ともに「略論安樂土義」とあり、撰号はない。奥書に「康和二年二月四日未時敬書寫了／同月六日巳時□於大原草菴移點了／桑門藥源／自他法界同利益共生極樂成佛道」とある。すなわち本書は『讃阿弥陀偈』が書写されて翌年、同じく執筆僧藥源によって書写・移点され、良忍が所有したものである。

装丁も偈文と同じく一巻の卷子本で、同様の野引紙七枚を用い、一紙二十八行、一行二十三字前後である。

(二) 京都常樂寺蔵室町時代写本

京都常樂寺所蔵。室町時代末期の写本とされる。室町時代の写本として知られるのは目下、本書と大阪府菰屋本泉寺

所蔵の実悟書写本との二部のみである。外題は「略論」、内題は「略論安樂浄土義」、撰号は「曇鸞法師作」とある。奥書には「右此一巻者六道衆生之骨目出能三界、麟、麒麟教也亦聖人之財自毫也、常樂寺、什物」とある。龍谷大学所蔵の天保九年刊本『略論安樂浄土義 附讐比』に墨書校合されており、その奥書は「大正二年八月二十二日常樂寺所蔵寺傳宗祖眞筆本ヲ以一校了」と、浄土真宗祖親鸞の眞筆として伝えられていたことを示している。

装丁は粘葉綴で十四丁、半葉九行、一行十八字前後。訓点が付され、誤植が多く訂正されている。

(三) 南條神興校正『真宗、校本七祖聖教』所収本

『七祖聖教』については上述の『讃阿弥陀仏偈』の解説を参照されたい。題号「略論安樂浄土義」、撰号「曇鸞法師作」とある。全体十一丁、半葉十行、一行は二十二字前後である。なお漢字、訓点ともに天保九年刊本『略論安樂浄土義 附讐比』のものとはほぼ完全に一致している。

(宮谷啓法)

## 参考文献

- 『昭和校訂 真宗七祖聖教』可西大秀、上杉慧岳校 昭和八年四月八日 破塵閣書房発行
- 『良忍上人の研究』融通念仏宗教学研究編 昭和五十六年五月十日 百華苑発行
- 『深草派祖円空立信上人』奥村玄祐著 昭和六十一年三月一日 浄土宗西山深草派宗務所発行
- 『古写古本 真宗聖教現存目録』真宗本願寺派宗学院編 昭和五十一年三月十五日 永田文昌堂発行
- 『日本仏教人名辞典』斎藤昭俊、成瀬良徳編 昭和六十一年五月三十日 新人物往来社発行
- 『日本仏家人名辞書』鷺尾順敬著 明治三十六年六月三十日 光融館発行

## 参考文献

『讃阿弥陀仏偈の古写本——来迎院の良忍手沢本に就て——』藤原凌雪著 『顕真学苑論集』第四十七号所収

「略論に関する一考察―来迎院の良忍手沢本を中心に―」藤原凌雪著『真宗学』第十三・十四号所収  
「『略論安楽浄土義』研究屋略」八木昊恵著『宗学院論輯』第三十五号所収

## 2 『讃阿弥陀仏偈』 訓点資料三本対照表

凡例

一、本表は以下の三本を対照した。

上段……大原来迎院藏良忍手沢本（康和元年書写。以下、良忍本）

中段……大谷大学藏深草円空本模写本（天保十五年書写。以下、円空本）

下段……南條神興校正『真宗』校本七祖聖教上（明治十二年発兌）所収（以下、南條本）

一、依拠本に使用する古体、異体等の漢字は原則として通用の正体に改めた。また「己」「巳」「已」の三字については文脈によって適宜補正した。

一、フ、ノなどの合字は仮名に改めた。菩薩・声聞・菩提などの略字は通常の表記に改めた。依拠本で漢字の連記を示す記号は「々」に統一した。

一、依拠本で汚損等により不明瞭な箇所は「□」で示した。また依拠本にはない文字で便宜上補ったもの及び推定したものは「」で示した。

一、「讀有百九十五行」（良忍本）という説示から二句一行の偈文として考えられるが、スペースの関係上、一句一行で表し、二句目を一字下げで示した。また良忍本については基本四句一行で整えられており、その改行箇所を「」で示した。

一、良忍本については、依拠本では返り点、句切りの記号が点で記されているが、ここでは便宜上それぞれ「一」、「。」で表した。

一、偈文の次第番号は良忍本に依った。ただし「」で括った次第番号は良忍本にはない。

一、良忍本、円空本については南條本と漢字の異なる箇所を網掛けで示した。

一、南條本の訓点については『昭和校訂七祖聖教』所収本に依った。

段			一	二	三
良忍本	<p>【外題】</p> <p>讚阿彌陀佛偈</p> <p>良忍之</p>	<p>□□彌陀佛偈并論 羅什法師作</p> <p>□□無量壽傍經奉讚亦名安樂</p>	<p>南無阿彌陀佛」</p> <p>現在西方去此界</p> <p>十萬億刹安樂土</p> <p>佛世尊号阿彌陀</p> <p>我願往生歸命禮</p>	<p>成佛已來歷十劫</p> <p>壽命方將無量</p> <p>法身光輪遍法界</p> <p>照世盲冥一故頂禮</p>	<p>智慧光明不可量</p> <p>故佛又号無量光</p> <p>有量諸相蒙光照</p> <p>是故稽首眞實明</p>
円空本	<p>【外題】</p> <p>讚阿彌陀佛偈</p> <p>深草圓空本</p>	<p>①讚阿彌陀佛偈一卷 曇鸞法師作</p> <p>釋名無量壽傍經奉讚亦名</p> <p>安養 南無阿彌陀佛</p>	<p>現在西方去此界</p> <p>十萬億刹安養土</p> <p>佛世尊号阿彌陀</p> <p>我願往生歸命禮</p>	<p>成佛已來歷十劫</p> <p>壽命方將無量</p> <p>法身光輪遍法界</p> <p>照世盲冥一故頂禮</p>	<p>智慧光明不可量</p> <p>故佛又号無量光</p> <p>有量諸相蒙光照</p> <p>是故稽首眞實明</p>
南條本		<p>讚阿彌陀佛偈 曇鸞法師作</p> <p>南無阿彌陀佛 釋名無量壽傍經</p> <p>奉讚亦曰安養</p>	<p>現在西方去此界</p> <p>十萬億刹安樂土</p> <p>佛世尊号阿彌陀</p> <p>我願往生歸命禮</p>	<p>成佛已來歷二十劫</p> <p>壽命方將無量</p> <p>法身光輪遍法界</p> <p>照世盲冥一故頂禮</p>	<p>智慧光明不可量</p> <p>故佛又号無量光</p> <p>有量諸相蒙光照</p> <p>是故稽首眞實明</p>

<p>四</p> <p>解脱<sup>ノ</sup>光輪<sup>ヲ</sup>无<sup>シ</sup>限<sup>ス</sup>齊<sup>ニ</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>邊<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>觸<sup>ル</sup>者<sup>モ</sup>離<sup>リ</sup>有<sup>ラ</sup>无<sup>ク</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ム</sup>首<sup>ヲ</sup>平<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>覺<sup>ス</sup>。」</p>	<p>解脱<sup>ノ</sup>光輪<sup>ヲ</sup>无<sup>シ</sup>限<sup>ス</sup>齊<sup>ニ</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>邊<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>觸<sup>ル</sup>者<sup>モ</sup>離<sup>リ</sup>有<sup>ラ</sup>无<sup>ク</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ム</sup>首<sup>ヲ</sup>平<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>覺<sup>ス</sup>。」</p>	<p>解脱<sup>ノ</sup>光輪<sup>ヲ</sup>无<sup>シ</sup>限<sup>ス</sup>齊<sup>ニ</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>號<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>邊<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>觸<sup>ル</sup>者<sup>モ</sup>離<sup>リ</sup>有<sup>ラ</sup>无<sup>ク</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ム</sup>首<sup>ヲ</sup>平<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>覺<sup>ス</sup>。」</p>
<p>五</p> <p>光雲<sup>ノ</sup>无<sup>シ</sup>礙<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>虛<sup>ニ</sup>空<sup>ト</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>礙<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          一切<sup>ノ</sup>有<sup>ラ</sup>礙<sup>ニ</sup>蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>澤<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>難<sup>シ</sup>思<sup>ハ</sup>議<sup>ス</sup>。」</p>	<p>光雲<sup>ノ</sup>无<sup>シ</sup>礙<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>虛<sup>ニ</sup>空<sup>ト</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>礙<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          一切<sup>ノ</sup>有<sup>ラ</sup>礙<sup>ニ</sup>蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>澤<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>難<sup>シ</sup>思<sup>ハ</sup>議<sup>ス</sup>。」</p>	<p>光雲<sup>ノ</sup>如<sup>クシテ</sup>无<sup>シ</sup>礙<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>虛<sup>ニ</sup>空<sup>ト</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>號<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>礙<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          一切<sup>ノ</sup>有<sup>ラ</sup>礙<sup>ニ</sup>蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>澤<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>難<sup>シ</sup>思<sup>ハ</sup>議<sup>ス</sup>。」</p>
<p>六</p> <p>清淨<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>明<sup>ニ</sup>滅<sup>ス</sup>有<sup>ラ</sup>對<sup>ス</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>對<sup>ス</sup>光<sup>ト</sup>。</p>	<p>清淨<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>明<sup>ニ</sup>滅<sup>ス</sup>有<sup>ラ</sup>對<sup>ス</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>對<sup>ス</sup>光<sup>ト</sup>。          遇<sup>フ</sup>斯<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>業<sup>ヲ</sup>繫<sup>ス</sup>除<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ム</sup>首<sup>ヲ</sup>畢<sup>ス</sup>竟<sup>ス</sup>依<sup>ス</sup>。」</p>	<p>清淨<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>明<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup>有<sup>ラ</sup>對<sup>ス</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>號<sup>ス</sup>无<sup>シ</sup>對<sup>ス</sup>光<sup>ト</sup>。          遇<sup>フ</sup>斯<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>業<sup>ヲ</sup>繫<sup>ス</sup>除<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ム</sup>首<sup>ヲ</sup>畢<sup>ス</sup>竟<sup>ス</sup>依<sup>ス</sup>。」</p>
<p>七</p> <p>佛光照耀<sup>シテ</sup>最<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>一<sup>ナリ</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>光<sup>ヲ</sup>艷<sup>ト</sup>王<sup>ト</sup>。          三塗<sup>ノ</sup>黑闇<sup>ノ</sup>蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>啓<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>大<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>供<sup>ス</sup>。」</p>	<p>佛光照耀<sup>シテ</sup>最<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>一<sup>ナリ</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>光<sup>ヲ</sup>艷<sup>ト</sup>王<sup>ト</sup>。          三塗<sup>ノ</sup>黑闇<sup>ノ</sup>蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>啓<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>大<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>供<sup>ス</sup>。」</p>	<p>佛光照耀<sup>シテ</sup>最<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>一<sup>ナリ</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>號<sup>ス</sup>光<sup>ヲ</sup>炎<sup>ト</sup>王<sup>ト</sup>。          三塗<sup>ノ</sup>黑闇<sup>ノ</sup>蒙<sup>ル</sup>光<sup>ヲ</sup>啓<sup>ス</sup>。          是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>大<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>供<sup>ス</sup>。」</p>
<p>八</p> <p>道光<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>朗<sup>ニシテ</sup>色<sup>ヲ</sup>超<sup>ス</sup>絶<sup>ス</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>清<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          一蒙<sup>ヒルニ</sup>光<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>垢<sup>ヲ</sup>除<sup>テ</sup>。          皆<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>解<sup>カ</sup>脱<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>。」</p>	<p>道光<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>朗<sup>ニシテ</sup>色<sup>ヲ</sup>超<sup>ス</sup>絶<sup>ス</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>号<sup>ス</sup>清<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          一蒙<sup>ヒルニ</sup>光<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>垢<sup>ヲ</sup>除<sup>テ</sup>。          皆<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>解<sup>カ</sup>脱<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>。」</p>	<p>道光<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>朗<sup>ニシテ</sup>色<sup>ヲ</sup>超<sup>ス</sup>絶<sup>ス</sup>。          故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>又<sup>モ</sup>號<sup>ス</sup>清<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>光<sup>ト</sup>。          一蒙<sup>ヒルニ</sup>光<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>垢<sup>ヲ</sup>除<sup>テ</sup>。          皆<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>解<sup>カ</sup>脱<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>頂<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup>。」</p>

<p>九</p> <p>慈光<sup>ハルカニ</sup>遙<sup>テ</sup>被<sup>ス</sup>施<sup>ス</sup>安樂<sup>ヲ</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>歡喜光<sup>ト</sup>。          稽首<sup>シ</sup>頂禮<sup>ル</sup>大安慰<sup>ヲ</sup>。</p>	<p>慈光<sup>ハルカニ</sup>遐<sup>ラシメテ</sup>被<sup>ス</sup>施<sup>ス</sup>安樂<sup>ヲ</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>歡喜光<sup>ト</sup>。          光<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>處<sup>ニ</sup>得<sup>テ</sup>法喜<sup>ヲ</sup>。          稽首<sup>シテ</sup>頂禮<sup>ス</sup>大安慰<sup>ニ</sup>。</p>	<p>慈光<sup>ニ</sup>遐<sup>ラシメ</sup>被<sup>ス</sup>施<sup>ス</sup>安樂<sup>ヲ</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又號<sup>ス</sup>歡喜光<sup>ト</sup>。          光<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>處<sup>ニ</sup>得<sup>テ</sup>法喜<sup>ヲ</sup>。          稽首<sup>シテ</sup>頂禮<sup>ス</sup>大安慰<sup>ニ</sup>。</p>
<p>十</p> <p>佛光能<sup>ク</sup>破<sup>ス</sup>无明<sup>ノ</sup>闇<sup>ヲ</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>智慧光<sup>ト</sup>。          一切<sup>ノ</sup>諸佛三乘<sup>ノ</sup>衆<sup>ニ</sup>咸<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>讚譽<sup>タマハカニ</sup>故稽首<sup>ツル</sup>。</p>	<p>佛光能<sup>ク</sup>破<sup>ス</sup>无明<sup>ノ</sup>闇<sup>ヲ</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>智慧光<sup>ト</sup>。          一切<sup>ノ</sup>諸佛三乘<sup>ノ</sup>衆<sup>ニ</sup>咸<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>嘆譽<sup>ス</sup>故稽首<sup>ス</sup>。</p>	<p>佛光能<sup>ク</sup>破<sup>ス</sup>无明<sup>ノ</sup>闇<sup>ヲ</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又號<sup>ス</sup>智慧光<sup>ト</sup>。          一切<sup>ノ</sup>諸佛三乘<sup>ノ</sup>衆<sup>ニ</sup>咸<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>歡譽<sup>ス</sup>故稽首<sup>シテ</sup>。</p>
<p>十一</p> <p>光明<sup>ニ</sup>切<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>普照<sup>ス</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>不斷光<sup>ト</sup>。          聞<sup>ク</sup>光<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>故心<sup>ニ</sup>不斷<sup>ナレハ</sup>。          皆得<sup>テ</sup>往生<sup>スルコトヲ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p>	<p>光明<sup>ニ</sup>一切<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>普照<sup>ス</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>不斷光<sup>ト</sup>。          聞<sup>ク</sup>光<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>故心<sup>ニ</sup>不斷<sup>ナレハ</sup>。          皆得<sup>テ</sup>往生<sup>スルコトヲ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p>	<p>光明<sup>ニ</sup>一切<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>普照<sup>ス</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又號<sup>ス</sup>不斷光<sup>ト</sup>。          聞<sup>ク</sup>光<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>故心<sup>ニ</sup>不斷<sup>シテ</sup>斷<sup>ユ</sup>。          皆得<sup>テ</sup>往生<sup>シム</sup>故頂禮<sup>シテ</sup>。</p>
<p>十二</p> <p>其<sup>ノ</sup>光除<sup>テハ</sup>佛<sup>ヲ</sup>莫<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>測<sup>ルコト</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>難思光<sup>ト</sup>。          十方<sup>ノ</sup>諸佛讚<sup>テ</sup>往生<sup>ス</sup>。          稱<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>故稽首<sup>ス</sup>。</p>	<p>其<sup>ノ</sup>光降<sup>シテハ</sup>佛<sup>ヲ</sup>莫<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>測<sup>ルコト</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>難思光<sup>ト</sup>。          十方<sup>ノ</sup>諸佛讚<sup>メテ</sup>往生<sup>ス</sup>。          稱<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>故稽首<sup>ス</sup>。</p>	<p>其<sup>ノ</sup>光除<sup>テハ</sup>佛<sup>ヲ</sup>莫<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>測<sup>ルコト</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又號<sup>ス</sup>難思光<sup>ト</sup>。          十方<sup>ノ</sup>諸佛歎<sup>シ</sup>往生<sup>ス</sup>。          稱<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>故稽首<sup>シテ</sup>。</p>
<p>十三</p> <p>神光離<sup>テ</sup>相<sup>ヲ</sup>不可<sup>レ</sup>名<sup>ク</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>無稱光<sup>ト</sup>。          因<sup>テハ</sup>光來<sup>スル</sup>佛<sup>ヲ</sup>光赫<sup>タリ</sup>然<sup>ル</sup>。          諸佛<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>讚<sup>ス</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p>	<p>神光離<sup>テ</sup>相<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>名<sup>ク</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又号<sup>ル</sup>無稱光<sup>ト</sup>。          恩<sup>ニ</sup>光感<sup>テ</sup>佛<sup>ヲ</sup>光赫<sup>タリ</sup>然<sup>ル</sup>。          諸佛<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>讚<sup>ス</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p>	<p>神光離<sup>ハ</sup>相<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>名<sup>ク</sup>。          故佛<sup>ヲ</sup>又號<sup>ス</sup>無稱光<sup>ト</sup>。          因<sup>テハ</sup>光<sup>ニ</sup>成<sup>シ</sup>佛<sup>シ</sup>光赫<sup>タリ</sup>然<sup>ル</sup>。          諸佛<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>歎<sup>シ</sup>故頂禮<sup>シテ</sup>。</p>



<p>〔十四〕</p> <p>光明照耀<sup>ル</sup> 超<sup>コト</sup>日月<sup>ニ</sup>。 故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>号<sup>ス</sup>超<sup>ニ</sup>日月<sup>ト</sup>光<sup>一</sup>。 釋迦佛<sup>ニ</sup>讚<sup>ツル</sup> 尚<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>盡<sup>キ</sup>。 故<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>稽<sup>ス</sup>首<sup>ヲ</sup> 无<sup>レ</sup>等<sup>々</sup>々<sup>一</sup>。</p>	<p>光明照耀<sup>シテ</sup> 超<sup>タリ</sup> 二日月<sup>ニ</sup>。 故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>号<sup>ス</sup>超<sup>ニ</sup>日月<sup>ト</sup>光<sup>一</sup>。 釋迦佛<sup>ニ</sup>讚<sup>シテ</sup> 尚<sup>ラ</sup>不<sup>レ</sup>盡<sup>キ</sup>。 故<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>稽<sup>ス</sup>首<sup>ヲ</sup> 无<sup>レ</sup>等<sup>等</sup>。</p>	<p>光明照耀<sup>シテ</sup> 過<sup>タリ</sup> 二日月<sup>ニ</sup>。 故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>號<sup>ス</sup>超<sup>ニ</sup>日月<sup>ト</sup>光<sup>一</sup>。 釋迦佛<sup>ニ</sup>歎<sup>シテ</sup> 尚<sup>ラ</sup>不<sup>レ</sup>盡<sup>キ</sup>。 故<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>稽<sup>ス</sup>首<sup>ヲ</sup> 无<sup>レ</sup>等<sup>等</sup>。</p>
<p>十五</p> <p>阿彌陀佛<sup>ノ</sup> 初<sup>ニ</sup>會<sup>ス</sup> 衆<sup>ニ</sup>。 聲聞菩薩數<sup>ナリ</sup> 无<sup>レ</sup>量<sup>一</sup>。 神通巧妙<sup>ニ</sup> 不<sup>レ</sup>能<sup>コト</sup>算<sup>一</sup>。 是<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ス</sup>首<sup>ヲ</sup> 廣<sup>ク</sup>大<sup>ニ</sup> 依<sup>ル</sup>。</p>	<p>阿彌陀佛<sup>ノ</sup> 初<sup>ニ</sup>會<sup>ス</sup> 衆<sup>ニ</sup>。 聲聞菩薩數<sup>ナリ</sup> 无<sup>レ</sup>量<sup>一</sup>。 神通巧妙<sup>ニ</sup> 不<sup>レ</sup>能<sup>コト</sup>算<sup>一</sup>。 是<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ス</sup>首<sup>ヲ</sup> 廣<sup>ク</sup>大<sup>ニ</sup> 依<sup>ル</sup>。</p>	<p>阿彌陀佛<sup>ノ</sup> 初<sup>ニ</sup>會<sup>ス</sup> 衆<sup>ニ</sup>。 聲聞菩薩數<sup>ナリ</sup> 无<sup>レ</sup>量<sup>一</sup>。 神通巧妙<sup>ニ</sup> 不<sup>レ</sup>能<sup>コト</sup>算<sup>一</sup>。 是<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>稽<sup>ス</sup>首<sup>ヲ</sup> 廣<sup>ク</sup>大<sup>ニ</sup> 會<sup>ス</sup>。</p>
<p>十六</p> <p>安樂<sup>ノ</sup> 无<sup>レ</sup>量<sup>一</sup> 摩訶薩<sup>ヲ</sup>。 咸<sup>ク</sup>當<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup> 補<sup>ス</sup>佛處<sup>ニ</sup>。 除<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>本願<sup>ヲ</sup> 大弘誓<sup>ヲ</sup>。 普<sup>ク</sup>欲<sup>ク</sup> 度<sup>セム</sup>脫<sup>ト</sup> 諸<sup>ノ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。 斯等<sup>ノ</sup> 寶林功德聚<sup>ニ</sup>。 一<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>合掌<sup>シテ</sup> 頭<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup> 禮<sup>ル</sup>。</p>	<p>安樂<sup>ノ</sup> 无<sup>レ</sup>量<sup>一</sup> 摩訶薩<sup>ヲ</sup>。 咸<sup>ク</sup>當<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup> 補<sup>ス</sup>佛處<sup>ニ</sup>。 除<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>本願<sup>ヲ</sup> 大弘誓<sup>ヲ</sup>。 普<sup>ク</sup>欲<sup>ク</sup> 度<sup>セム</sup>脫<sup>ト</sup> 諸<sup>ノ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。 斯等<sup>ノ</sup> 寶林功德聚<sup>ニ</sup>。 一<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>合掌<sup>シテ</sup> 頭<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup> 禮<sup>ス</sup>。</p>	<p>安樂<sup>ノ</sup> 无<sup>レ</sup>量<sup>一</sup> 摩訶薩<sup>ヲ</sup>。 咸<sup>ク</sup>當<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup> 補<sup>ス</sup>佛處<sup>ニ</sup>。 除<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>本願<sup>ヲ</sup> 大弘誓<sup>ヲ</sup>。 普<sup>ク</sup>欲<sup>ク</sup> 度<sup>セム</sup>脫<sup>ト</sup> 諸<sup>ノ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。 斯等<sup>ノ</sup> 寶林功德聚<sup>ニ</sup>。 一<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>合掌<sup>シテ</sup> 頭<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup> 禮<sup>ス</sup>。</p>
<p>〔十七〕</p> <p>安樂國土<sup>ノ</sup> 諸<sup>ノ</sup> 聲聞<sup>ノ</sup>。 背<sup>ク</sup> 光<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>尋<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 流<sup>シ</sup>星<sup>一</sup>。 菩<sup>ク</sup>薩<sup>ノ</sup> 光<sup>ヲ</sup> 輪<sup>ヲ</sup> 四<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>里<sup>一</sup>。 若<sup>シ</sup> 秋<sup>ノ</sup> 滿<sup>ク</sup>月<sup>ノ</sup> 映<sup>ス</sup> 紫<sup>ニ</sup>金<sup>一</sup>。 集<sup>テ</sup> 佛<sup>ヲ</sup> 法<sup>ヲ</sup> 藏<sup>ヲ</sup> 爲<sup>ス</sup> 衆<sup>ニ</sup>生<sup>一</sup>。 故<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>頂<sup>ス</sup>禮<sup>ス</sup> 大<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>海<sup>一</sup>。</p>	<p>安樂國土<sup>ノ</sup> 諸<sup>ノ</sup> 聲聞<sup>ノ</sup>。 皆<sup>ク</sup> 光<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>尋<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 流<sup>シ</sup>星<sup>一</sup>。 菩<sup>ク</sup>薩<sup>ノ</sup> 光<sup>ヲ</sup> 輪<sup>ヲ</sup> 四<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>里<sup>一</sup>。 若<sup>シ</sup> 秋<sup>ノ</sup> 滿<sup>ク</sup>月<sup>ノ</sup> 映<sup>ス</sup> 紫<sup>ニ</sup>金<sup>一</sup>。 集<sup>テ</sup> 佛<sup>ヲ</sup> 法<sup>ヲ</sup> 藏<sup>ヲ</sup> 爲<sup>ス</sup> 衆<sup>ニ</sup>生<sup>一</sup>。 故<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>頂<sup>ス</sup>禮<sup>ス</sup> 大<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>海<sup>一</sup>。</p>	<p>安樂國土<sup>ノ</sup> 諸<sup>ノ</sup> 聲聞<sup>ノ</sup>。 皆<sup>ク</sup> 光<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>尋<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 流<sup>シ</sup>星<sup>一</sup>。 菩<sup>ク</sup>薩<sup>ノ</sup> 光<sup>ヲ</sup> 輪<sup>ヲ</sup> 四<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>里<sup>一</sup>。 若<sup>シ</sup> 秋<sup>ノ</sup> 滿<sup>ク</sup>月<sup>ノ</sup> 映<sup>ス</sup> 紫<sup>ニ</sup>金<sup>一</sup>。 集<sup>テ</sup> 佛<sup>ヲ</sup> 法<sup>ヲ</sup> 藏<sup>ヲ</sup> 爲<sup>ス</sup> 衆<sup>ニ</sup>生<sup>一</sup>。 故<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>頂<sup>ス</sup>禮<sup>ス</sup> 大<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>海<sup>一</sup>。</p>

<p>十八</p> <p>又觀世音大勢至・ 於諸聖衆一最第一ナリ。 慈光照曜大千界一 侍佛左右顯神通 度諸有緣不暫息 如大海潮不失時 如是大悲大勢力 一心稽首頭面禮</p>	<p>十九</p> <p>其有衆生安樂ニ 悉具三十有一相 智慧滿足入深法 究暢道要無障礙 隨根利鈍成就忍 三忍乃至不可説 宿命五通常在 至佛不更難惡趣 除生他方五濁世 示現同如大牟尼 如是功德無邊量 是故至心頭面禮</p>
<p>又觀世音大勢至 於諸聖衆一最第一タリ 慈光照曜大千界一 侍佛左右顯神通 度諸有緣不暫息 如大海潮不失時 如是大悲大勢力 一心稽首頭面禮</p>	<p>其有衆生一々安樂ニ 悉具三十有一相一 智慧滿足入深法一 究暢道要一無障礙 隨根利鈍一成就忍一 三忍乃至不可説 宿命五通常在 至佛不更難惡趣 除生他方五濁世 示現同如大牟尼 如是功德無邊量 是故至心頭一面一禮</p>
<p>又觀世音大勢至 於諸聖衆一最第一ナリ 慈光照曜大千界一 侍佛左右顯神通儀 度諸有緣不暫息 如大海潮不失時 如是大悲大勢力 一心稽首頭面禮</p>	<p>其有衆生二生ニ安樂ニ 悉具三十有二相ニ 智慧滿足入深法ニ 究暢道要一無障礙 隨根利鈍一成就忍一 二忍乃至不可計 宿命五通常在 至佛不更難惡趣 除生二佗方五濁世 亦現同如大牟尼 生ニ安樂國一成大利一 是故至心頭面禮</p>

廿一	廿
<p>安樂佛國諸菩薩 夫可宣說隨智慧</p>	<p>安樂菩薩承佛神 於一食頃詣十方 不可算數佛世界 恭敬供養諸如來 花香伎樂從念現 寶蓋幢幡隨意出 珍奇絕世无能名 散華供養殊生寶 化成華蓋光晃耀 香氣普薰莫不周 花蓋小者四百里 乃有遍覆一佛界 隨其前後一次化生 是諸菩薩僉欣悅 於虛空中一奏天樂 雅讚德頌揚佛惠 聽受經法供養已 未食之前騰虛還 神力自在不可測 故我頂禮無上導</p>
<p>安樂佛國諸菩薩 夫可宣說隨智慧</p>	<p>安樂菩薩承佛神 於一食頃詣十方 不可算數佛世界 恭敬供養諸如來 花香伎樂從念現 寶蓋幢幡隨意出 珍奇絕世无能名 散華供養殊生寶 化成花蓋光晃耀 香氣普薰莫不周 花蓋少者四百里 乃有遍覆一佛界 隨其前後一次化去 是諸菩薩會欣悅 於虛空中一奏天樂 雅讚德頌揚佛惠 聽受經法供養已 未食之前騰虛還 神力自在不可測 故我頂禮無上導</p>
<p>安樂佛國諸菩薩 夫可宣說隨智慧</p>	<p>安樂菩薩承佛神 於一食頃詣十方 不可算數佛世界 恭敬供養諸如來 花香伎樂從念現 寶蓋幢幡隨意出 珍奇絕世无能名 散華供養殊生寶 化成華蓋光晃耀 香氣普薰莫不周 華蓋小者四百里 乃有遍覆一佛界 隨其前後一次化去 是諸菩薩僉欣悅 於虛空中一奏天樂 雅讚德頌揚佛惠 聽受經法供養已 未食之前騰虛還 神力自在不可測 故我頂禮無上導</p>

<p>於<sup>テ</sup>己<sup>ニ</sup>萬物<sup>ニ</sup>亡<sup>シ</sup>我所<sup>ニ</sup>淨<sup>コト</sup>若<sup>シ</sup>蓮華<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>ケ</sup>塵<sup>ヲ</sup>往來進止若<sup>シ</sup>汎<sup>シ</sup>舟<sup>ノ</sup>利安<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>務<sup>ヲ</sup>捨<sup>ツ</sup>適莫<sup>ヲ</sup>彼<sup>レ</sup>己<sup>モ</sup>猶<sup>モ</sup>空<sup>ニ</sup>斷<sup>リ</sup>二想<sup>ヲ</sup>燃<sup>モヤシテ</sup>智惠<sup>ノ</sup>炬<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>長夜<sup>ヲ</sup>三明六通皆已足<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>萬行貫<sup>ク</sup>心眼<sup>ヲ</sup>如是<sup>レ</sup>功德無<sup>シ</sup>邊量<sup>ニ</sup>是故至心<sup>ニ</sup>頭面<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup></p>	<p>於<sup>テ</sup>己<sup>ニ</sup>萬物<sup>ニ</sup>亡<sup>ス</sup>我所<sup>ヲ</sup>淨<sup>キコト</sup>若<sup>シ</sup>蓮花<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>ケ</sup>塵<sup>ヲ</sup>往來進止若<sup>シ</sup>汎<sup>シ</sup>舟<sup>ノ</sup>利安<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>務<sup>ヲ</sup>誓<sup>ス</sup>適莫<sup>ヲ</sup>彼<sup>レ</sup>己<sup>モ</sup>猶<sup>モ</sup>空<sup>ニ</sup>斷<sup>リ</sup>二想<sup>ヲ</sup>燃<sup>モヤシテ</sup>智惠<sup>ノ</sup>炬<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>長夜<sup>ヲ</sup>三明六通皆已足<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>萬行貫<sup>ク</sup>心眼<sup>ヲ</sup>如是<sup>レ</sup>功德無<sup>シ</sup>邊量<sup>ニ</sup>是故至心<sup>ニ</sup>頭面<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup></p>	<p>於<sup>テ</sup>己<sup>ニ</sup>萬物<sup>ニ</sup>亡<sup>シ</sup>我所<sup>ニ</sup>淨<sup>コト</sup>若<sup>シ</sup>蓮華<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>ケ</sup>塵<sup>ヲ</sup>往來進止若<sup>シ</sup>汎<sup>シ</sup>舟<sup>ノ</sup>利安<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>務<sup>ヲ</sup>捨<sup>ツ</sup>適莫<sup>ヲ</sup>彼<sup>レ</sup>己<sup>モ</sup>猶<sup>モ</sup>空<sup>ニ</sup>斷<sup>リ</sup>二想<sup>ヲ</sup>然<sup>トモシテ</sup>智惠<sup>ノ</sup>炬<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>長夜<sup>ヲ</sup>三明六通皆已足<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>萬行貫<sup>ク</sup>心眼<sup>ヲ</sup>如是<sup>レ</sup>功德無<sup>シ</sup>邊量<sup>ニ</sup>是故至心<sup>ニ</sup>頭面<sup>ニ</sup>禮<sup>ス</sup></p>
<p>安樂<sup>ノ</sup>聲聞菩薩衆<sup>ト</sup>人天<sup>ノ</sup>智惠咸<sup>ク</sup>洞達<sup>ス</sup>身相莊嚴无<sup>シ</sup>殊異<sup>ニ</sup>但順<sup>ニ</sup>他方<sup>ニ</sup>故別<sup>ニ</sup>名<sup>ヲ</sup>顏容端正<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>比<sup>フ</sup>精微妙<sup>ニ</sup>軀<sup>ニ</sup>非人天<sup>ニ</sup>虛無<sup>ノ</sup>之身無<sup>シ</sup>極<sup>ニ</sup>體<sup>ヲ</sup>是故頂禮<sup>ス</sup>平等身<sup>ヲ</sup></p>	<p>安樂<sup>ノ</sup>聲聞菩薩衆<sup>ト</sup>人天<sup>ノ</sup>智惠咸<sup>ク</sup>洞達<sup>シテ</sup>身相莊嚴无<sup>シ</sup>殊異<sup>ニ</sup>但順<sup>ニ</sup>他方<sup>ニ</sup>故別<sup>ニ</sup>名<sup>ヲ</sup>顏容端正<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>比<sup>フ</sup>精微妙<sup>ニ</sup>軀<sup>ニ</sup>非人天<sup>ニ</sup>虛無<sup>ノ</sup>之身無<sup>シ</sup>極<sup>ニ</sup>體<sup>ヲ</sup>是故頂禮<sup>ス</sup>平等力<sup>ヲ</sup></p>	<p>安樂<sup>ノ</sup>聲聞菩薩衆<sup>セリ</sup>人天<sup>ノ</sup>智惠咸<sup>ク</sup>洞達<sup>セリ</sup>身相莊嚴无<sup>シ</sup>殊異<sup>ニ</sup>但順<sup>ニ</sup>他方<sup>ニ</sup>故別<sup>ニ</sup>名<sup>ヲ</sup>顏容端正<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>比<sup>フ</sup>精微妙<sup>ニ</sup>軀<sup>ニ</sup>非人天<sup>ニ</sup>虛無<sup>ノ</sup>之身無<sup>シ</sup>極<sup>ニ</sup>體<sup>ヲ</sup>是故頂禮<sup>ス</sup>平等力<sup>ヲ</sup></p>
<p>敢<sup>テ</sup>能<sup>ハ</sup>得<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>安樂國<sup>ニ</sup>皆悉住<sup>ス</sup>於<sup>ニ</sup>正定聚<sup>ニ</sup>邪定不定其國<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup></p>	<p>敢<sup>テ</sup>能<sup>ハ</sup>得<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>安樂國<sup>ニ</sup>皆悉住<sup>ス</sup>於<sup>ニ</sup>正定聚<sup>ニ</sup>邪定不定其國<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup></p>	<p>敢<sup>テ</sup>能<sup>ハ</sup>得<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>安樂國<sup>ニ</sup>皆悉住<sup>ス</sup>於<sup>ニ</sup>正定聚<sup>ニ</sup>邪定不定其國<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup></p>

<p>廿六</p> <p>天人一切有所須<sup>コト</sup>無不稱欲一應念一至<sup>ニ至テ</sup>。</p>	<p>諸佛咸讚<sup>ク スルカ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p> <p>諸聞阿彌陀德号<sup>ヲ</sup>信心歡喜慶<sup>ニ</sup>所聞<sup>ヲ</sup>。乃暨一念至心一者<sup>チオヨフマテ モス ヲモノニ</sup>廻向願生<sup>シテ スル レムト</sup>皆得往<sup>コト</sup>唯除<sup>シ</sup>五逆謗正法<sup>ハ</sup>故我頂禮願往生<sup>シテ フ セムト</sup>。</p>	<p>廿五</p> <p>安樂菩薩聲聞輩<sup>ノ</sup>於此世界無比方<sup>ヲ</sup>。釋迦無礙大辯才<sup>ノ</sup>設諸假令示少分<sup>ヲ</sup>。最賤乞人竝帝王<sup>ニ</sup>帝王傷比金輪王<sup>ニ</sup>如是一展轉至六天<sup>ニ</sup>次第相形<sup>ニ</sup>皆如始<sup>シ</sup>。以天色像<sup>ヲ</sup>喻<sup>ルニ</sup>於彼<sup>ニ</sup>千萬億倍<sup>ニ</sup>非其類<sup>ニ</sup>。皆是法藏願力故<sup>ニ</sup>。稽首頂禮大心力<sup>ヲ</sup>。</p>	<p>廿四</p> <p>諸佛咸讚<sup>ク スルカ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p> <p>諸聞阿彌陀德号<sup>ヲ</sup>信心歡喜慶<sup>ニ</sup>所聞<sup>ヲ</sup>。乃暨一念至心一者<sup>チオヨフマテ モス ヲモノニ</sup>廻向願生<sup>シテ スル レムト</sup>皆得往<sup>コト</sup>唯除<sup>シ</sup>五逆謗正法<sup>ハ</sup>故我頂禮願往生<sup>シテ フ セムト</sup>。</p>
<p>天人一切有所須<sup>ユル</sup>無<sup>レ</sup>不稱欲應念至<sup>ニ至ル</sup>。</p>	<p>諸佛咸讚<sup>ク ム ニ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p> <p>諸聞阿彌陀德号<sup>ヲ</sup>信心歡喜慶<sup>ニ</sup>所聞<sup>ヲ</sup>。乃暨一念至心一者<sup>チオヨフマテ ニ ス ヲモノニ</sup>廻向願生<sup>シテ スル ハ ムト</sup>皆得往<sup>コトヲ</sup>唯除<sup>シ</sup>五逆謗正法<sup>ハ</sup>故我頂禮願往生<sup>シテ フ ヲ</sup>。</p>	<p>安樂菩薩聲聞輩<sup>ノ</sup>於此世界無<sup>スル</sup>比方<sup>ヲ</sup>。釋迦無礙大辯才<sup>ノ</sup>設諸假令示少分<sup>ヲ</sup>。最賤乞人竝帝王<sup>ニ</sup>帝王復比金輪王<sup>ニ</sup>如是一展轉至六天<sup>ニ</sup>次第相形<sup>ニ</sup>皆如始<sup>シ</sup>。以天色像<sup>ヲ</sup>喻<sup>ルニ</sup>於彼<sup>ニ</sup>千萬億倍<sup>ニ</sup>非其類<sup>ニ</sup>。皆是法藏願力故<sup>ニ</sup>。稽首頂禮大心力<sup>ヲ</sup>。</p>	<p>諸佛咸讚<sup>ク ム ニ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p> <p>諸聞阿彌陀德号<sup>ヲ</sup>信心歡喜慶<sup>ニ</sup>所聞<sup>ヲ</sup>。乃暨一念至心一者<sup>チオヨフマテ ニ ス ヲモノニ</sup>廻向願生<sup>シテ スル ハ ムト</sup>皆得往<sup>コトヲ</sup>唯除<sup>シ</sup>五逆謗正法<sup>ハ</sup>故我頂禮願往生<sup>シテ フ ヲ</sup>。</p>
<p>天人一切有所須<sup>レハ</sup>無<sup>レ</sup>不稱欲應念至<sup>ニ至ラ</sup>。</p>	<p>諸佛咸讚<sup>ク シテ フ ニ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p> <p>諸聞阿彌陀佛號<sup>ヲ</sup>信心歡喜慶<sup>ニ</sup>所聞<sup>ヲ</sup>。乃暨一念至心一者<sup>チオヨフマテ ニ ス ヲモノニ</sup>廻向願生<sup>シテ スル ハ セント</sup>皆得往<sup>シム</sup>唯除<sup>シ</sup>五逆謗正法<sup>ハ</sup>故我頂禮願往生<sup>シテ フ ヲ</sup>。</p>	<p>安樂菩薩聲聞輩<sup>ノ</sup>於此世界無<sup>シ</sup>比方<sup>ヲ</sup>。釋迦無礙大辯才<sup>ノ</sup>設諸假令示少分<sup>ヲ</sup>。最賤乞人竝帝王<sup>ニ</sup>帝王復比金輪王<sup>ニ</sup>如是一展轉至六天<sup>ニ</sup>次第相形<sup>ニ</sup>皆如始<sup>シ</sup>。以天色像<sup>ヲ</sup>喻<sup>ルニ</sup>於彼<sup>ニ</sup>千萬億倍<sup>ニ</sup>非其類<sup>ニ</sup>。皆是法藏願力爲<sup>ニ</sup>。稽首頂禮大心力<sup>ヲ</sup>。</p>	<p>諸佛咸讚<sup>ク シテ フ ニ</sup>故頂禮<sup>ス</sup>。</p> <p>諸聞阿彌陀佛號<sup>ヲ</sup>信心歡喜慶<sup>ニ</sup>所聞<sup>ヲ</sup>。乃暨一念至心一者<sup>チオヨフマテ ニ ス ヲモノニ</sup>廻向願生<sup>シテ スル ハ セント</sup>皆得往<sup>シム</sup>唯除<sup>シ</sup>五逆謗正法<sup>ハ</sup>故我頂禮願往生<sup>シテ フ ヲ</sup>。</p>

<p>一寶二寶無量寶・ 隨心化造受用具。」 堂宇飲食悉如此。 故我稽首無稱佛。</p>	<p>廿七 諸往生者悉具足 清淨色身無可比。」 神通功德及宮殿 服飾莊嚴如六天。 應器寶鉢自然至。 百味嘉肴饌已滿。 見色聞香意爲食。 忽然飽足受適悅。 所味清淨無所着。 事已化去後須現。」 宴安快樂次泥洹。 是故至心頭面禮。</p>	<p>廿八 十方佛土菩薩衆 及諸比丘生安樂」 無量無數不可計。 已生今生當亦然。 皆曾供養無量佛。</p>
<p>一寶二寶无量寶 隨心化造受用具。 堂宇飲食悉如此。 故我稽首無稱佛。</p>	<p>諸往生者悉具足 清淨色身無可比 神通功德及宮殿 服飾莊嚴如六天 應器寶鉢自然至 百味嘉肴饌已滿 見色聞香意爲食 忽然飽足受適悅 所味清淨無所着 事已化去須復現 宴安快樂次泥洹 是故至心頭面禮</p>	<p>十方佛土菩薩衆 及諸比丘生安樂 无量無數不可計 已生今生當亦然 皆曾供養无量佛</p>
<p>一寶二寶無量寶 隨心化造受用具 堂宇飲食悉如此 故我稽首無稱佛</p>	<p>諸往生者悉具足 清淨色身無可比 神通功德及宮殿 服飾莊嚴如六天 應器寶鉢自然至 百味嘉肴饌已滿 見色聞香意爲食 忽然飽足受適悅 所味清淨無所著 事已化去須復現 宴安快樂次泥洹 是故至心頭面禮</p>	<p>十方佛土菩薩衆 及諸比丘生安樂 無量無數不可計 已生今生當亦然 皆曾供養無量佛</p>

卅	廿九	
<p>神力無極、阿彌陀 十方無量、佛所嘆一。 東方恆沙、諸佛國、 菩薩無數、悉往觀。 亦復供養、安樂國、 菩薩聲聞諸大衆、 聽受經法、宣道化。 自餘九方、亦如是。 釋迦如來說、偈頌 無量功德、故頂禮。」</p>	<p>若開阿彌陀佛号 歡喜讚仰、心歸依。 下至一念、得大利。 則爲具足、功德寶。 設滿大千世界、火 亦應直過、聞佛名。 聞阿彌陀、不復退。 是故至心、稽首禮。</p>	<p>攝取、百千、堅固、法。 如是、大士、悉往生。 是故頂禮、阿彌陀。</p>
<p>神力无極、阿彌陀 十方无量、佛所レ歎 東方恆沙、諸佛、國 菩薩无数、悉往、觀 亦復供養、安樂國、 菩薩聲聞諸、大衆、 聽受、經法、宣、道化 自餘、九方、亦如、是 釋迦如來說、偈頌 无量功德、故、頂禮</p>	<p>若開阿彌陀佛号 歡喜讚仰、心歸依 下至一念、得大利 則爲具足、功德寶 設滿大千世界、火 亦應直過、聞佛名 聞阿彌陀、不復退 是故至心、稽首禮</p>	<p>攝取、百千、堅固、法 如是、大士、悉往生 是故頂禮、阿彌陀</p>
<p>神力無極、阿彌陀、ハ 十方無量、佛、所、レ歎 東方恆沙、諸、佛、國、 菩薩無數、悉、往、觀、 亦復供、養、安樂國、 菩薩聲聞、諸、大衆、 聽、受、經法、宣、道化、 自餘、九方、亦如、是、 釋迦如來說、偈、頌、 無量功德、故、頂禮、</p>	<p>若開阿彌陀、德號 歡喜讚仰、心歸依 下至、一念、得、大利、 則爲、具足、功德、寶、 設滿、大千世界、火、 亦應、直過、聞、佛名、 聞、阿彌陀、不復退、 是故、至心、稽首禮、</p>	<p>攝取、百千、堅固、法、 如是、大士、悉、往生、 是故、頂禮、阿彌陀、</p>

卅一	卅二
<p>諸來<sup>ノ</sup>無量<sup>ノ</sup>菩薩衆<sup>ス</sup>  為<sup>レ</sup>殖<sup>ハ</sup>德本<sup>ニ</sup>致<sup>ス</sup>虔恭<sup>ヲ</sup>  或奏<sup>ハ</sup>天樂<sup>ニ</sup>歌嘆<sup>シ</sup>佛<sup>ヲ</sup>  或頌<sup>ス</sup>佛惠<sup>ヲ</sup>照世間<sup>ニ</sup>  或以<sup>ハ</sup>天花<sup>ヲ</sup>衣<sup>ニ</sup>供養<sup>シ</sup>  或睹<sup>テ</sup>淨土<sup>ニ</sup>興等願<sup>ヲ</sup>  如是<sup>レ</sup>聖衆悉現前<sup>ニ</sup>  蒙<sup>リ</sup>八梵聲<sup>ヲ</sup>授<sup>ケル</sup>佛記<sup>ヲ</sup>  一切<sup>ノ</sup>菩薩增願行<sup>ヲ</sup>  故我頂禮<sup>ニ</sup>婆伽婆<sup>ヲ</sup></p>	<p>聖主世尊說<sup>フ</sup>法<sup>ヲ</sup>一時<sup>ニ</sup>  大衆雲集<sup>ス</sup>七寶堂<sup>ニ</sup>  聽<sup>テ</sup>佛開示<sup>ヲ</sup>咸悟入<sup>ニ</sup>  歡喜充遍<sup>ニ</sup>皆得道<sup>ヲ</sup>  于<sup>レ</sup>時四面<sup>ヨリ</sup>起<sup>リ</sup>清風<sup>ヲ</sup>  擊動<sup>シテ</sup>寶樹<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>妙響<sup>ヲ</sup>  和韻<sup>ナリシメ</sup>清徹<sup>ニ</sup>過<sup>リ</sup>糸竹<sup>ニ</sup>  踰<sup>テ</sup>於金石<sup>ニ</sup>無倫比<sup>ニ</sup>  天花繽紛<sup>トシテ</sup>逐香風<sup>ヲ</sup>  自然<sup>ニ</sup>供養<sup>シテ</sup>常不息<sup>ニ</sup>  諸天復持<sup>テ</sup>天香花<sup>ヲ</sup>  百千伎樂<sup>ヲ</sup>用致敬<sup>ヲ</sup></p>
<p>諸<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>無量<sup>ノ</sup>菩薩衆<sup>ス</sup>  為<sup>レ</sup>殖<sup>ハ</sup>德本<sup>ニ</sup>致<sup>ス</sup>虔恭<sup>ヲ</sup>  或奏<sup>ハ</sup>天樂<sup>ニ</sup>歌嘆<sup>シ</sup>佛<sup>ヲ</sup>  或頌<sup>ス</sup>佛惠<sup>ヲ</sup>照世間<sup>ニ</sup>  或以<sup>ハ</sup>天花<sup>ヲ</sup>衣<sup>ニ</sup>供養<sup>シ</sup>  或睹<sup>テ</sup>淨土<sup>ニ</sup>興等願<sup>ヲ</sup>  如是<sup>レ</sup>聖衆悉現前<sup>ニ</sup>  蒙<sup>リ</sup>入<sup>ニ</sup>梵聲<sup>ヲ</sup>授<sup>ケル</sup>佛記<sup>ヲ</sup>  一切<sup>ノ</sup>菩薩增願行<sup>ヲ</sup>  故我頂禮<sup>ニ</sup>婆伽婆<sup>ヲ</sup></p>	<p>聖主世尊說<sup>フ</sup>法<sup>ヲ</sup>時<sup>ニ</sup>  大衆雲<sup>ノ</sup>集<sup>ス</sup>七寶堂<sup>ニ</sup>  聽<sup>テ</sup>佛開示<sup>ヲ</sup>咸悟入<sup>ニ</sup>  歡喜充遍<sup>ニ</sup>皆得道<sup>ヲ</sup>  于<sup>レ</sup>時四面<sup>ヨリ</sup>起<sup>リ</sup>清風<sup>ヲ</sup>  擊動<sup>シテ</sup>寶樹<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>妙響<sup>ヲ</sup>  和韻<sup>ナリシメ</sup>清徹<sup>ニ</sup>過<sup>リ</sup>糸竹<sup>ニ</sup>  踰<sup>テ</sup>於金石<sup>ニ</sup>無倫比<sup>ニ</sup>  天花繽紛<sup>トシテ</sup>逐香風<sup>ヲ</sup>  自然<sup>ニ</sup>供養<sup>シテ</sup>常不息<sup>ニ</sup>  諸天復持<sup>テ</sup>天香<sup>ヲ</sup>  百千伎樂<sup>ヲ</sup>用致<sup>ス</sup>敬<sup>ヲ</sup></p>
<p>諸來<sup>ノ</sup>無量菩薩衆<sup>ス</sup>  為<sup>レ</sup>植<sup>ハ</sup>德本<sup>ニ</sup>致<sup>ス</sup>虔恭<sup>ヲ</sup>  或奏<sup>ハ</sup>音樂<sup>ニ</sup>歌<sup>ニ</sup>歎<sup>シ</sup>佛<sup>ヲ</sup>  或頌<sup>ス</sup>佛慧<sup>ヲ</sup>照<sup>ス</sup>世間<sup>ニ</sup>  或以<sup>ハ</sup>天華衣<sup>ヲ</sup>供養<sup>シ</sup>  或睹<sup>テ</sup>淨土<sup>ニ</sup>興<sup>ス</sup>等願<sup>ヲ</sup>  如是<sup>レ</sup>聖衆悉現前<sup>ニ</sup>  蒙<sup>リ</sup>三<sup>ノ</sup>八<sup>ノ</sup>梵聲<sup>ヲ</sup>授<sup>ケル</sup>佛記<sup>ヲ</sup>  一切<sup>ノ</sup>菩薩增願行<sup>ヲ</sup>  故我頂禮<sup>ニ</sup>婆伽婆<sup>ヲ</sup></p>	<p>聖主世尊說法<sup>フ</sup>時<sup>ニ</sup>  大衆雲<sup>ニ</sup>集<sup>シ</sup>七寶堂<sup>ニ</sup>  聽<sup>テ</sup>佛開示<sup>ヲ</sup>咸悟入<sup>ニ</sup>  歡喜充遍<sup>ニ</sup>皆<sup>シテ</sup>得<sup>ル</sup>道<sup>ヲ</sup>  于<sup>レ</sup>時四面<sup>ヨリ</sup>起<sup>リ</sup>清風<sup>ヲ</sup>  擊動<sup>シテ</sup>寶樹<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>妙響<sup>ヲ</sup>  和韻<sup>ナリシメ</sup>清徹<sup>ニ</sup>過<sup>リ</sup>糸竹<sup>ニ</sup>  踰<sup>テ</sup>於金石<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>倫比<sup>ニ</sup>  天花繽紛<sup>トシテ</sup>逐<sup>ニ</sup>香風<sup>ヲ</sup>  自然<sup>ニ</sup>供養<sup>シテ</sup>常<sup>ニ</sup>不息<sup>ニ</sup>  諸天復持<sup>テ</sup>天華香<sup>ヲ</sup>  百千伎樂<sup>ヲ</sup>用致<sup>レ</sup>敬<sup>ヲ</sup></p>



卅三	<p>如是<sup>ニ</sup>功德三寶<sup>ノ</sup>聚<sup>ナリ</sup>。 故我運<sup>テ</sup>想<sup>ハ</sup>禮<sup>ス</sup>講堂<sup>ヲ</sup>。」</p> <p>妙土廣大<sup>ニシテ</sup>超<sup>タリ</sup>數限<sup>ニ</sup>。 自然<sup>ノ</sup>七寶<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>合成<sup>セ</sup>。 佛<sup>ノ</sup>本願力<sup>ヲ</sup>莊嚴<sup>レリ</sup>起<sup>リ</sup>。 稽首<sup>ニ</sup>清淨<sup>ノ</sup>大攝受<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅四	<p>世界光曜<sup>シテ</sup>妙<sup>コト</sup>殊絶<sup>ニタリ</sup>。 適悅宴安<sup>ニシテ</sup>無四時<sup>。</sup>。 自利化利<sup>ノ</sup>力圓滿<sup>セリ</sup>。 歸命<sup>ル</sup>方便<sup>ノ</sup>巧莊嚴<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅五	<p>寶地澄靜<sup>ニシテ</sup>平<sup>コト</sup>如<sup>シ</sup>掌<sup>ノ</sup>。 無<sup>シ</sup>有<sup>コト</sup>山川陵谷<sup>ノ</sup>阻<sup>ヘタテ</sup>。 若<sup>シ</sup>佛<sup>ノ</sup>神力<sup>ヲ</sup>須<sup>ム</sup>則<sup>ユ</sup>見<sup>ユ</sup>。 稽首<sup>ニ</sup>不可思議尊<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅六	<p>道樹<sup>ノ</sup>高<sup>ナリ</sup>四百万里<sup>。</sup>。 周圍<sup>ノ</sup>由旬<sup>ハ</sup>有五十<sup>ナリ</sup>。 枝葉<sup>ノ</sup>布<sup>ケル</sup>里<sup>ハ</sup>二十万<sup>ナリ</sup>。 自然<sup>ノ</sup>衆寶<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>合成<sup>セ</sup>。 月光摩尼<sup>ノ</sup>海輪寶<sup>ヲ</sup>。 衆寶<sup>ノ</sup>之王<sup>ニシテ</sup>而莊嚴<sup>セリ</sup>。」</p>
卅三	<p>如<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>功德三寶<sup>ノ</sup>聚<sup>ナリ</sup>。 故我運<sup>テ</sup>想<sup>ハ</sup>禮<sup>ス</sup>講堂<sup>ヲ</sup>。」</p> <p>妙土廣大<sup>ニシテ</sup>超<sup>タリ</sup>數限<sup>ニ</sup>。 自然<sup>ノ</sup>七寶<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>合成<sup>セ</sup>。 佛<sup>ノ</sup>本願力<sup>ヲ</sup>莊嚴<sup>ヨリ</sup>起<sup>リ</sup>。 稽首<sup>ニ</sup>清淨<sup>ノ</sup>大攝受<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅四	<p>世界<sup>ノ</sup>光曜<sup>ニ</sup>妙<sup>ニ</sup>殊絶<sup>ス</sup>。 適悅宴安<sup>ニシテ</sup>無四時<sup>一</sup>。 自利他<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>圓滿<sup>スレハ</sup>。 歸命<sup>メ</sup>方便<sup>ノ</sup>巧莊嚴<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅五	<p>寶地澄靜<sup>ニシテ</sup>平<sup>コト</sup>如<sup>シ</sup>掌<sup>ノ</sup>。 無<sup>シ</sup>有<sup>コト</sup>山<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>谷<sup>ノ</sup>阻<sup>ノ</sup>。 若<sup>シ</sup>佛<sup>ノ</sup>神力<sup>ヲ</sup>須<sup>ム</sup>則<sup>ユ</sup>見<sup>ユ</sup>。 稽首<sup>ニ</sup>不可思議尊<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅六	<p>道樹<sup>ノ</sup>高<sup>サ</sup>四百万里<sup>。</sup>。 周圍<sup>ノ</sup>由旬<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>五千<sup>一</sup>。 枝葉<sup>ノ</sup>布<sup>ケル</sup>里<sup>ハ</sup>二十万<sup>ナリ</sup>。 自然<sup>ノ</sup>衆寶<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>合成<sup>ス</sup>。 月光摩尼<sup>ノ</sup>海輪寶<sup>ヲ</sup>。 衆寶<sup>ノ</sup>之王<sup>ヲモテ</sup>而莊嚴<sup>ス</sup>。」</p>
卅三	<p>如<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>功德三寶<sup>ノ</sup>聚<sup>ナリ</sup>。 故我運<sup>テ</sup>想<sup>ハ</sup>禮<sup>ス</sup>講堂<sup>ヲ</sup>。」</p> <p>妙土廣大<sup>ナルコト</sup>超<sup>ユ</sup>數限<sup>ヲ</sup>。 自然<sup>ノ</sup>七寶<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>合成<sup>ス</sup>。 佛<sup>ノ</sup>本願力<sup>ヲ</sup>莊嚴<sup>ヨリ</sup>起<sup>リ</sup>。 稽首<sup>ニ</sup>清淨<sup>ノ</sup>大攝受<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅四	<p>世界<sup>ノ</sup>光曜<sup>ニシテ</sup>妙<sup>ニ</sup>殊絶<sup>ス</sup>。 適悅宴安<sup>ニシテ</sup>無<sup>ニ</sup>四時<sup>一</sup>。 自利他<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>圓滿<sup>セリ</sup>。 歸<sup>ニ</sup>命<sup>ス</sup>方便<sup>ノ</sup>巧莊嚴<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅五	<p>寶地澄靜<sup>ニシテ</sup>平<sup>ナルコト</sup>如<sup>シ</sup>掌<sup>ノ</sup>。 無<sup>シ</sup>有<sup>コト</sup>山<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>谷<sup>ノ</sup>阻<sup>ノ</sup>。 若<sup>シ</sup>佛<sup>ノ</sup>神力<sup>ヲ</sup>須<sup>ム</sup>則<sup>ユ</sup>見<sup>ユ</sup>。 稽首<sup>ニ</sup>不可思議尊<sup>ヲ</sup>。」</p>	卅六	<p>道樹<sup>ノ</sup>高<sup>サ</sup>四百萬里<sup>。</sup>。 周圍<sup>ノ</sup>由旬<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>三五十<sup>ナリ</sup>。 枝葉<sup>ノ</sup>布<sup>ケル</sup>里<sup>ハ</sup>二十萬<sup>ナリ</sup>。 自然<sup>ノ</sup>衆寶<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>合成<sup>ス</sup>。 月光摩尼<sup>ノ</sup>海輪寶<sup>ヲ</sup>。 衆寶<sup>ノ</sup>之王<sup>ヲ以テ</sup>而莊嚴<sup>ス</sup>。」</p>

卅九	<p>周匝<sup>シテ</sup>垂<sup>タル</sup>間<sup>ニ</sup>寶瓔珞<sup>ス</sup>          百千萬種<sup>ニシテ</sup>色變異<sup>ス</sup>」          光焰照曜<sup>シテ</sup>超<sup>ヘリ</sup>千<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>。          無極<sup>ヘリ</sup>寶網覆<sup>ニ</sup>其上<sup>ニ</sup>。          一切<sup>ニ</sup>莊嚴隨<sup>テ</sup>應<sup>ニ</sup>現<sup>ス</sup>。          稽首<sup>ヲ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>微風吹<sup>テ</sup>樹<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>法音<sup>ヲ</sup>。          普流<sup>ク</sup>十方<sup>ノ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>刹<sup>ニ</sup>。          聞<sup>ク</sup>斯<sup>ノ</sup>音<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>□□忍<sup>ス</sup>。          至<sup>ル</sup>成<sup>ル</sup>佛道<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>遭<sup>ル</sup>苦<sup>ニ</sup>。」          神力廣大<sup>シテ</sup>不可量<sup>ス</sup>。          稽首<sup>ヲ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>樹<sup>ノ</sup>香樹<sup>ノ</sup>色樹<sup>ノ</sup>音聲<sup>ノ</sup>・          樹<sup>ノ</sup>觸樹<sup>ノ</sup>味及樹<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>」          六情遇<sup>フ</sup>者得<sup>ル</sup>法忍<sup>ス</sup>。          故我<sup>ニ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>
卅八	<p>周匝<sup>シテ</sup>垂<sup>ル</sup>間<sup>タニ</sup>寶瓔珞<sup>アリ</sup>          百千萬種<sup>ノ</sup>色變異<sup>ス</sup>」          光焰超<sup>⑩</sup>曜<sup>シテ</sup>超<sup>ヘリ</sup>千<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>。          無極<sup>ヘリ</sup>寶網覆<sup>フ</sup>其上<sup>ニ</sup>。          一切<sup>ニ</sup>莊嚴隨<sup>テ</sup>應<sup>スレハ</sup>現<sup>ス</sup>。          稽首<sup>ヲ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>微風吹<sup>クニ</sup>樹<sup>ヲ</sup>出<sup>シテ</sup>法音<sup>ヲ</sup>。          普流<sup>ク</sup>十方<sup>ノ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>刹<sup>ニ</sup>。          聞<sup>ク</sup>斯<sup>ノ</sup>音<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>深法忍<sup>ス</sup>。          至<sup>ル</sup>成<sup>ル</sup>佛道<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>遭<sup>ル</sup>苦<sup>ニ</sup>」          神力廣大<sup>シテ</sup>不可量<sup>ス</sup>。          稽首<sup>ヲ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>樹<sup>ノ</sup>香樹<sup>ノ</sup>色樹<sup>ノ</sup>音聲<sup>ノ</sup>・          樹<sup>ノ</sup>觸樹<sup>ノ</sup>味及樹<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>」          六情遇<sup>フ</sup>者得<sup>ル</sup>法忍<sup>ス</sup>。          故我<sup>ニ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>
卅七	<p>周匝<sup>シテ</sup>垂<sup>ルル</sup>間<sup>ニ</sup>寶瓔珞<sup>ハ</sup>          百千萬種<sup>ノ</sup>色變異<sup>ス</sup>」          光焰照曜<sup>スルコトヲ</sup>超<sup>ユ</sup>二千日<sup>ニ</sup>。          無極<sup>ヘリ</sup>寶網覆<sup>フ</sup>其<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>。          一切<sup>ニ</sup>莊嚴隨<sup>テ</sup>應<sup>ニ</sup>現<sup>ス</sup>。          稽首<sup>ヲ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>微風吹<sup>テ</sup>樹<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>法音<sup>ヲ</sup>。          普流<sup>ク</sup>十方<sup>ノ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>刹<sup>ニ</sup>。          聞<sup>ク</sup>斯<sup>ノ</sup>音<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>深法忍<sup>ス</sup>。          至<sup>ル</sup>成<sup>ル</sup>佛道<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>遭<sup>ル</sup>苦<sup>ニ</sup>」          神力廣大<sup>シテ</sup>不可量<sup>ス</sup>。          稽首<sup>ヲ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>樹<sup>ノ</sup>香樹<sup>ノ</sup>色樹<sup>ノ</sup>音聲<sup>ノ</sup>・          樹<sup>ノ</sup>觸樹<sup>ノ</sup>味及樹<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>」          六情遇<sup>フ</sup>者得<sup>ル</sup>法忍<sup>ス</sup>。          故我<sup>ニ</sup>頂禮<sup>ス</sup>道場樹<sup>ヲ</sup>。」</p>

<p>冊二</p> <p>清風時吹<sup>テ</sup>寶樹<sup>ヲ</sup>一宮商和<sup>ス</sup>。 出<sup>テ</sup>五音聲<sup>ヲ</sup>一宮商和<sup>ス</sup>。 微妙<sup>ノ</sup>雅曲自然<sup>ニ</sup>成<sup>ス</sup>。 故我頂禮<sup>ル</sup>清淨動<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>冊一</p> <p>七寶樹林周<sup>ニ</sup>世界<sup>ニ</sup>。 光耀鮮明<sup>ニシテ</sup>相映發<sup>ス</sup>。 花菓枝葉更<sup>ニ</sup>互<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>。 稽首<sup>ル</sup>本願功德聚<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>冊</p> <p>從世<sup>ノ</sup>帝王<sup>ニ</sup>至<sup>マテ</sup>六天<sup>ニ</sup>。 音樂轉<sup>タ</sup>妙<sup>ニ</sup>有八重<sup>ニ</sup>。 展轉<sup>シテ</sup>勝<sup>ル</sup>千億万倍<sup>ナリ</sup>。 寶樹<sup>ノ</sup>音麗<sup>ニ</sup>倍亦然<sup>ナリ</sup>。 復有自然<sup>ノ</sup>妙伎樂<sup>ヲ</sup>。 法音清和<sup>ニシテ</sup>悅<sup>ム</sup>心神<sup>ヲ</sup>。 哀婉雅亮<sup>ニシテ</sup>超<sup>リ</sup>十方<sup>ニ</sup>。 故我稽首<sup>ル</sup>清淨果<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>皆是如來<sup>ノ</sup>五種<sup>ノ</sup>力<sup>ナリ</sup>。 神力<sup>ト</sup>本願<sup>ト</sup>及滿足<sup>シテ</sup>。 明了堅固<sup>ト</sup>究竟願<sup>ヲ</sup>。 慈悲方便不可<sup>レ</sup>稱<sup>ス</sup>。 歸命<sup>シテ</sup>稽首<sup>ル</sup>眞無量<sup>ヲ</sup>。」</p>
<p>清風時々<sup>ニ</sup>吹<sup>ケハ</sup>寶樹<sup>ヲ</sup>。 出<sup>テ</sup>五音聲<sup>ヲ</sup>宮商和<sup>ス</sup>。 微妙<sup>ノ</sup>雅曲自然<sup>ニ</sup>成<sup>ス</sup>。 故我頂禮<sup>ル</sup>清淨動<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>七寶樹林周<sup>メクレリ</sup>世界<sup>ニ</sup>。 光耀鮮明<sup>ニシテ</sup>相映發<sup>ス</sup>。 花菓枝葉更<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>。 稽首<sup>ス</sup>本願功德聚<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>從<sup>リ</sup>世<sup>ノ</sup>帝王<sup>ニ</sup>至<sup>マテ</sup>六天<sup>ニ</sup>。 音聲轉<sup>タ</sup>妙<sup>ニ</sup>有八重<sup>ニ</sup>。 展轉<sup>シテ</sup>勝<sup>ル</sup>千億万倍<sup>ナリ</sup>。 寶樹<sup>ノ</sup>音麗<sup>ニ</sup>倍亦然<sup>ナリ</sup>。 復有自然<sup>ノ</sup>妙伎樂<sup>ヲ</sup>。 法音清和<sup>ニシテ</sup>悅<sup>ム</sup>心神<sup>ヲ</sup>。 哀嫁雅亮<sup>ニシテ</sup>超<sup>リ</sup>十方<sup>ニ</sup>。 故我稽首<sup>ル</sup>清淨樂<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>皆是如來<sup>ノ</sup>五種<sup>ノ</sup>力<sup>ト</sup>。 神力<sup>ト</sup>本願<sup>ト</sup>及滿足<sup>トナリ</sup>。 明了堅固<sup>ト</sup>究竟願<sup>ヲ</sup>。 慈悲方便不可<sup>レ</sup>稱<sup>ス</sup>。 歸命<sup>シテ</sup>稽首<sup>ス</sup>眞無量<sup>ヲ</sup>。」</p>
<p>清風時時吹<sup>クニ</sup>寶樹<sup>ヲ</sup>。 出<sup>テ</sup>二五音聲<sup>ヲ</sup>一宮商和<sup>ス</sup>。 微妙<sup>ノ</sup>雅曲自然<sup>ニ</sup>成<sup>ス</sup>。 故我頂禮<sup>ル</sup>清淨薰<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>七寶<sup>ノ</sup>樹林周<sup>ニ</sup>世界<sup>ニ</sup>。 光耀鮮明<sup>ニシテ</sup>相映發<sup>ス</sup>。 華果枝葉更<sup>ニ</sup>互<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>。 稽首<sup>ル</sup>本願功德聚<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>從<sup>リ</sup>世<sup>ノ</sup>帝王<sup>ニ</sup>至<sup>マテ</sup>六天<sup>ニ</sup>。 音樂轉<sup>タ</sup>妙<sup>ニ</sup>有二八重<sup>ニ</sup>。 展轉<sup>シテ</sup>勝<sup>ル</sup>前億萬倍<sup>ナリ</sup>。 寶樹<sup>ノ</sup>音麗<sup>ニ</sup>倍亦然<sup>ナリ</sup>。 復有自然<sup>ノ</sup>妙伎樂<sup>ヲ</sup>。 法音清和<sup>ニシテ</sup>悅<sup>ム</sup>心神<sup>ヲ</sup>。 哀婉雅亮<sup>ニシテ</sup>超<sup>リ</sup>十方<sup>ニ</sup>。 故我稽首<sup>ル</sup>清淨樂<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>皆是<sup>レ</sup>如來<sup>ノ</sup>五種<sup>ノ</sup>力<sup>ナリ</sup>。 神力<sup>ト</sup>本願<sup>ト</sup>及滿足<sup>シテ</sup>。 明了堅固<sup>ト</sup>究竟願<sup>ヲ</sup>。 慈悲方便不可<sup>レ</sup>稱<sup>ス</sup>。 歸命<sup>シテ</sup>稽首<sup>ル</sup>眞無量<sup>ニ</sup>。」</p>

冊四	〔冊三〕
<p>衆寶蓮華盈世界一 一々花百千億葉 其葉光明色无量 朱紫紅綠間五色</p>	<p>其土廣大无崖際。 衆寶羅網遍覆上。 金縷珠璣奇異珍。 不可名寶爲校飾。 周匝四面垂寶鈴。 調風吹動出妙法。 和雅德香常流布。 聞者塵勞習不起。 此風觸身受快樂。 如比丘得滅盡定。 風吹散華滿佛土。 隨色次第不雜亂。 花質柔軟烈芬芳。 足履其上一下四指。 隨舉足一時還如故。 用訖地開設无遺。 隨其時節一花六反 不思議報故頂禮。</p>
<p>衆寶蓮花盈世界一 一々花百千億葉 其葉光明色无量 朱紫紅綠間五色</p>	<p>其土廣大无崖際。 衆寶羅網遍覆上。 金縷珠璣奇異珍。 不可名寶爲校飾。 周匝四面垂寶鈴。 調風吹動出妙法。 和雅德香常流布。 聞者塵勞習不起。 此風觸身受快樂。 如比丘得滅盡定。 風吹散華滿佛土。 隨色次第不雜亂。 花質柔軟列芬芳。 足履其上一下四指。 隨舉足一時還如故。 用訖地開設无遺。 隨其時節一花六反 不可誼報故頂禮。</p>
<p>衆寶蓮華盈世界一 一々華百千億葉 其華光明色无量 朱紫紅綠間五色</p>	<p>其土廣大无涯際。 衆寶羅網遍覆上。 金縷珠璣奇異珍。 不可名寶爲校飾。 周匝四面垂寶鈴。 調風吹動出妙法。 和雅德香常流布。 聞者塵勞習不起。 此風觸身受快樂。 如比丘得滅盡定。 風吹散華滿佛土。 隨色次第不雜亂。 華質柔軟烈芬芳。 足履其上一下四指。 隨舉足一時還如故。 用訖地開設无遺。 隨其時節一華六反 不可議報故頂禮。</p>

冊五		冊六
<p>焔燁煥爛<sup>シテカ、ヤカス</sup> 曜日光<sup>ヲ</sup>。 是故一心稽首禮<sup>ニ</sup>。」</p>	<p>一々花<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>所出<sup>ス</sup>光<sup>ヲ</sup>。 三十六百有千億<sup>ナリ</sup>。 一々光<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>有佛身<sup>ヲ</sup>。 多少亦如所出光<sup>ノ</sup>。 佛身相好如金山<sup>ノ</sup>。 一々又放百千光<sup>ヲ</sup>。 普爲十方一說妙法<sup>ヲ</sup>。 各安衆生於佛道<sup>ニ</sup>。 如是神力無邊量<sup>ニ</sup>。 故我歸命阿彌陀<sup>ニ</sup>。」</p>	<p>樓閣殿堂非工造<sup>ニ</sup>。 七寶彫綺化<sup>シテ</sup>所成<sup>ナリ</sup>。 明月珠璫交露縵<sup>ヘリ</sup>。 各有浴池一形相稱<sup>ニ</sup>。 八功德水滿池中<sup>ニ</sup>。 色味香潔如甘露<sup>ニ</sup>。 黃金池者白銀沙<sup>アリ</sup>。 七寶池沙互如此<sup>ニ</sup>。 池岸香樹垂布上<sup>ニ</sup>。</p>
<p>④焔燁煥爛<sup>キヨウクワナムトシテ</sup> 曜日光<sup>ス</sup>。 是故一心稽首禮<sup>ス</sup>。」</p>	<p>一一花<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>所出<sup>ス</sup>光<sup>ヲ</sup>。 三十六百有千億<sup>ナリ</sup>。 一一光<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>有佛身<sup>ヲ</sup>。 多少亦如所出光<sup>ノ</sup>。 佛身相好如金山<sup>ノ</sup>。 一一又放百千光<sup>ヲ</sup>。 普爲十方一說妙法<sup>ヲ</sup>。 各安衆生於佛道<sup>ニ</sup>。 如是神力無邊量<sup>ニ</sup>。 故我歸命阿彌陀<sup>ニ</sup>。」</p>	<p>樓閣殿堂非工造<sup>ス</sup>。 七寶彫綺化<sup>シテ</sup>所成<sup>ナリ</sup>。 ④明月珠璫交露縵<sup>ミツレタリ</sup>。 各有浴池一形相稱<sup>ニ</sup>。 八功德水滿其中<sup>ニ</sup>。 色味香潔如甘露<sup>ニ</sup>。 黃金池者白銀沙<sup>アリ</sup>。 七寶池沙互如此<sup>ニ</sup>。 池岸香樹垂布上<sup>ニ</sup>。</p>
<p>焔燁煥爛<sup>エウ</sup> 曜日光<sup>ト</sup>。 是故一心稽首禮<sup>シル</sup>。」</p>	<p>一一華<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>所出<sup>ス</sup>光<sup>ヲ</sup>。 三十六百有千億<sup>ナリ</sup>。 一一光<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>有佛身<sup>ヲ</sup>。 多少亦如所出光<sup>ノ</sup>。 佛身相好如金山<sup>ノ</sup>。 一一又放百千光<sup>ヲ</sup>。 普爲十方一說妙法<sup>ヲ</sup>。 各安衆生於佛道<sup>ニ</sup>。 如是神力無邊量<sup>ニ</sup>。 故我歸命阿彌陀<sup>ニ</sup>。」</p>	<p>樓閣殿堂非工造<sup>ニ</sup>。 七寶彫綺化<sup>シテ</sup>所成<sup>ル</sup>。 明月珠璫交露縵<sup>ヲ以ス</sup>。 各有浴池一形相稱<sup>カチヒ</sup>。 八功德水滿池中<sup>ニ</sup>。 色味香潔如甘露<sup>ニ</sup>。 黃金池者白銀沙<sup>アリ</sup>。 七寶池沙互如此<sup>ニ</sup>。 池岸香樹垂布上<sup>ニ</sup>。</p>

<p>             栴檀芬馥<sup>シテ</sup>常流<sup>ニス</sup>聲<sup>ヲ</sup>。              天花彩<sup>サニシテ</sup>璨<sup>セリ</sup>爲<sup>ス</sup>映飾<sup>スルコトヲ</sup>。              水上<sup>ノ</sup>焰燿<sup>シウエウコト</sup>若<sup>シ</sup>景雲<sup>ノ</sup>。              無漏<sup>ノ</sup>依果難<sup>シ</sup>思議<sup>ヲ</sup>。              是故稽首<sup>ニ</sup>功德藏<sup>ニ</sup>。<sup>一</sup> </p>	<p>             三七              菩薩聲聞入<sup>テ</sup>寶池<sup>ニ</sup>。              隨意淺深如<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>欲<sup>フ</sup>。              若須<sup>ヘキニハ</sup>灌<sup>メ</sup>身<sup>ニ</sup>自然<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>。              欲<sup>レハ</sup>令<sup>メ</sup>旋復<sup>ニ</sup>一水尋<sup>チ</sup>還<sup>ル</sup>。<sup>一</sup>              調和冷暖<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>不<sup>コト</sup>稱<sup>ヲ</sup>。              神開體悅<sup>ニシテ</sup>蕩<sup>シ</sup>心垢<sup>ヲ</sup>。              清明澄潔<sup>ニシテ</sup>若<sup>シ</sup>無<sup>レ</sup>形<sup>ヲ</sup>。              寶沙映徹<sup>シテ</sup>如<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>深<sup>カラ</sup>。<sup>一</sup>              澹淡廻轉<sup>シテ</sup>相<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>灌<sup>ヲ</sup>。              綽約容豫<sup>ニシテ</sup>和<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>神<sup>ヲ</sup>。              微波無量<sup>ニシテ</sup>出<sup>テ</sup>妙響<sup>ヲ</sup>。              隨<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>所應<sup>ニ</sup>一聞<sup>ニ</sup>法語<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>三寶之妙章<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>寂靜<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>無我<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>無量波羅蜜<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              力不共<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>通惠<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup> </p>
<p>             栴檀芬馥<sup>シテ</sup>常流<sup>ニス</sup>聲<sup>ヲ</sup>。              天花<sup>④⑤</sup>彩<sup>サニシテ</sup>際<sup>セリ</sup>爲<sup>ス</sup>映飾<sup>スルコトヲ</sup>。              水上<sup>ノ</sup>焰燿<sup>④⑦</sup>若<sup>シ</sup>景雲<sup>ノ</sup>。              無漏<sup>ノ</sup>依果難<sup>シ</sup>思議<sup>ヲ</sup>。              是故稽首<sup>ニ</sup>功德藏<sup>ニ</sup>。<sup>一</sup> </p>	<p>             菩薩聲聞入<sup>テ</sup>寶池<sup>ニ</sup>。              隨<sup>テ</sup>意<sup>ニ</sup>淺深如<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>欲<sup>スル</sup>。              善須<sup>ヨク</sup>灌<sup>キレハ</sup>身<sup>ニ</sup>自然<sup>ニ</sup>注<sup>スル</sup>。              欲<sup>レハ</sup>令<sup>メ</sup>旋復<sup>ニ</sup>一水尋<sup>チ</sup>還<sup>ル</sup>。<sup>一</sup>              調<sup>ト</sup>和<sup>ラカニ</sup>冷暖<sup>ナム</sup>無<sup>レ</sup>不<sup>ト云フコト</sup>稱<sup>カナハ</sup>。              神<sup>シヒ</sup>開<sup>ラケス</sup>體悅<sup>フテ</sup>蕩<sup>シ</sup>心垢<sup>ノアカラ</sup>。<sup>一</sup>              清明澄潔<sup>ニシテ</sup>若<sup>シ</sup>無<sup>レ</sup>形<sup>チ</sup>。<sup>一</sup>              寶沙映徹<sup>シテ</sup>如<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>深<sup>カラ</sup>。<sup>一</sup>              ④⑤澹淡<sup>テムテム</sup>廻轉<sup>ムミトシテ</sup>相<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>灌<sup>ヲ</sup>。              ④⑥綽約<sup>シヤクコウヨウ</sup>容豫<sup>ヨウ</sup>和<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>神<sup>ニ</sup>。<sup>一</sup>              ④⑦微波<sup>タト</sup>無量<sup>ニシテ</sup>出<sup>テ</sup>妙響<sup>ナルヲ</sup>。<sup>一</sup>              隨<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>所應<sup>ニ</sup>一聞<sup>ニ</sup>法語<sup>ハ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>三寶之妙章<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>寂靜<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>無我<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>無量<sup>ニ</sup>波羅蜜<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              力不共<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>隨<sup>テ</sup>通惠<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup> </p>
<p>             栴檀芬馥<sup>トシテ</sup>常流<sup>ニス</sup>聲<sup>ヲ</sup>。              天華<sup>トシテ</sup>璀璨<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>映飾<sup>スルコトヲ</sup>。              水上<sup>ノ</sup>焰燿<sup>トシテ</sup>若<sup>シ</sup>景雲<sup>ノ</sup>。              無漏<sup>ノ</sup>依果難<sup>シ</sup>思議<sup>ヲ</sup>。              是故稽首<sup>ニ</sup>功德藏<sup>ニ</sup>。<sup>一</sup> </p>	<p>             菩薩聲聞入<sup>ル</sup>寶池<sup>ニ</sup>。              隨<sup>テ</sup>意<sup>ニ</sup>淺深如<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>欲<sup>ス</sup>。              若須<sup>シキハ</sup>灌<sup>メ</sup>身<sup>ニ</sup>自然<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>。              欲<sup>レハ</sup>令<sup>メ</sup>旋復<sup>ニ</sup>一水尋<sup>チ</sup>還<sup>ル</sup>。<sup>一</sup>              調和冷暖<sup>ニシテ</sup>無<sup>レ</sup>不<sup>コト</sup>稱<sup>ヲ</sup>。              神開體悅<sup>ヲキメテ</sup>蕩<sup>シ</sup>心垢<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              清明澄潔<sup>ニシテ</sup>若<sup>シ</sup>無<sup>レ</sup>形<sup>チ</sup>。<sup>一</sup>              寶沙映徹<sup>シテ</sup>如<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>深<sup>カラ</sup>。<sup>一</sup>              澹淡<sup>タンタン</sup>廻轉<sup>クワン</sup>相<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>灌<sup>ヲ</sup>。              綽約<sup>クワクワ</sup>容豫<sup>ヨウ</sup>和<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>神<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              微波<sup>ミハ</sup>無量<sup>ニシテ</sup>出<sup>テ</sup>妙響<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              隨<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>所應<sup>ニ</sup>一聞<sup>ニ</sup>法語<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>三寶之妙章<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>寂靜<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>無我<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              或聞<sup>キ</sup>無量波羅蜜<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup>              力不共<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>通惠<sup>ヲ</sup>。<sup>一</sup> </p>

<p>或聞、無作無生忍。 乃至甘露灌頂法。 隨根、性欲、皆歡喜。 順三寶、相眞實、義。 菩薩聲聞所行道。 於是、一切悉具聞。 三塗苦難名永閉。 但有自然快樂音。 是故其國、號安樂。 頭面頂禮、無極尊。</p>	<p>冊八 大師龍樹摩訶薩 誕形像始一理頹網 關閉邪扇、開正徹。 是閻浮提、一切眼。 伏承、尊悟、歡喜地。 歸阿彌陀、生安樂。 譬如龍動、雲必隨。 閻浮檀放、百卉舒。 南無慈悲龍樹尊 至心歸命、頭面禮。</p>
<p>或聞、无作无生忍。 乃至甘露灌頂法。 隨根、性欲、皆歡喜。 順三寶、相眞實、義。 菩薩聲聞所行道。 於是、一切悉具聞。 三塗苦難名永閉。 但有自然快樂音。 是故其國、號安樂。 頭面頂禮、无極尊。</p>	<p>大師龍樹摩訶薩 誕形像始一理頹網 關閉邪扇、開正徹。 是閻浮提、一切眼。 伏承、尊悟、歡喜地。 歸阿彌陀、生安樂。 譬如龍動、雲必隨。 閻浮檀放、百卉舒。 南無慈悲龍樹尊 至心歸命、頭面禮。</p>
<p>或聞、無作無生忍。 乃至甘露灌頂法。 隨根、性欲、皆歡喜。 順三寶、相眞實、義。 菩薩聲聞所行道。 於是、一切悉具聞。 三塗苦難名永閉。 但有自然快樂音。 是故其國、號安樂。 頭面頂禮、無極尊。</p>	<p>本師龍樹摩訶薩 誕形像始一理頹網 關閉邪扇、開正徹。 是閻浮提、一切眼。 伏承、尊悟、歡喜地。 歸阿彌陀、生安樂。 譬如龍動、雲必隨。 閻浮檀放、百卉舒。 南無慈悲龍樹尊 至心歸命、頭面禮。</p>

<p>五十</p> <p>十方三世、无量、惠・同乘、一如、一、号、正覺。」</p> <p>二智圓滿、道平等、攝化、隨緣、故、若于、我歸、阿彌陀、淨土、一、即是歸命、諸佛、國。」</p>	<p>〔冊九〕</p> <p>我從無始、一、循、三界、一、爲、虛妄、輪、一、所、廻轉、一、一念、一時、所造、業、一、足繫、六道、一、滯、一、三途、一、唯願、慈光、護念、我、一、令、我、一、不、失、菩提心、一、我讚、佛惠、功德、者、一、願聞、十方、諸、有緣、一、欲得、往生、一、安樂、一、者、一、普皆如、意、一、無、障礙、一、所有、功德、若、大小、一、廻施、一切、一、共、往生、一、南無、不可思議光、一、一切歸命、稽首、禮、一、</p>
<p>十方三世、无量、慧・同乘、一如、一、号、正覺、一、二智圓滿、道平等、攝化、隨緣、故、若于、我歸、阿彌陀、淨土、一、即是歸命、諸佛、國、一、</p>	<p>我從、無始、一、循、三界、一、爲、虛妄、一、輪、所、廻轉、一、一念、一時、所造業、一、足繫、六道、一、滯、一、三途、一、唯願、慈光、護念、我、一、令、我、一、不、失、菩提心、一、我讚、佛惠、功德、音、一、普皆如、一、意、一、無、障礙、一、所有、功德、若、一、大小、一、廻施、一切、一、共、往生、一、南無、不可思議光、一、一心歸命、稽首、禮、一、</p>
<p>十方三世、無量、慧・同乘、二、一、如、一、號、正覺、一、二智圓滿、道平等、攝化、隨緣、故、若干、我歸、阿彌陀、淨土、一、即是歸命、諸佛、國、一、</p>	<p>我從、無始、一、循、三界、一、爲、二、虛妄、輪、一、所、廻轉、一、一念、一時、所造業、一、足繫、六道、一、滯、一、三途、一、唯願、慈光、護念、我、一、令、我、一、不、失、菩提心、一、我讚、佛惠、功德、音、一、願聞、十方、諸、有緣、一、欲得、往生、一、安樂、一、者、一、普皆如、一、意、一、無、障礙、一、所有、功德、若、大小、一、廻施、一切、一、共、往生、一、南無、不可思議光、一、一心歸命、稽首、禮、一、</p>



<p>五十一</p> <p>我以一心一讚一佛。 願遍十方無礙人。 如是十方無量佛 咸各至心頭面禮。」</p>	<p>我以一心一讚一佛。 願遍十方無礙人。 如是十方無量佛 咸各至心頭面禮。」</p>	<p>我以一心一讚一佛。 願遍十方無礙人。 如是十方無量佛 咸各至心頭面禮。」</p>
<p>讀有百九十五行。禮有五十一拜竟。」</p> <p>康和元年十二月一日申時於大原報 身房書寫功畢」 同二日移點了 執筆僧藥源」 願依此書寫功自他共生極樂國矣」</p>	<p>讚有百九十五行 禮有五十一拜竟」</p> <p>讚阿彌陀佛偈一卷 願以書寫力早生彌陀國 一校了 寬元々年後七月廿一日書寫了 釋圓空</p> <p>深草霞谷眞宗律院開祖立信上人眞 本摹寫卽了 天保十五辰四月廿三日 同所 善 福寺住僧良實 甲辰六月廿六日講此偈了日良實學 人舉贈之 雲華院大含領受 以爲藏本</p>	<p>讚阿彌陀佛偈 讚一百九十五 禮五十一拜</p>

良忍本

①上欄に「潮イ」。

②上欄に「道イ」。

③「或生<sup>テ</sup>安樂國<sup>ニ</sup>成大利<sup>ヲ</sup>」は割書きを誤って本文に組み込んだものか。

④下欄に「次イ」。

⑤下欄に「爲イ」。

⑥上欄に「意イ」。

⑦上欄に「徳」。

⑧上欄に「日イ」。

⑨「亮」に「リヤウ」の左訓。

⑩上欄に「眼イ」。

⑪「樂」の下の下欄に「國イ」とあるが、どの字の校異か不明。

⑫「放」に「□ツニ」の左訓。

⑬上欄に「草イ」。

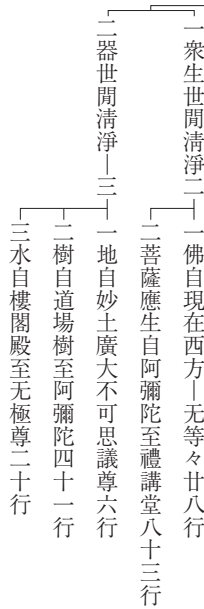
円空本

①内題の前に以下の記述がある。

迦才浄土論下巻云法師撰集无量壽經奉讀七言偈百九十五行并問答一卷流行於世勸道俗等決定往生得見諸佛

五祖傳云續高僧傳云選禮浄土十二偈續龍樹偈後

南无阿彌陀佛二



讚阿彌陀佛偈一卷

曇鸞法師作

南无阿彌陀佛

〔釋名无量壽傍經〕奉讀亦曰安養イ

②「澤」に「マミル／ナタラカナリ」の左訓。

③「滅」右に「无イ」。

④「艶」に「ウルハシ／イロフ」の左訓。

⑤「讚」右に「歎イ」。

⑥「恩」に「ウツクシ」の左訓。また右に「因イ」。

⑦「感」右に「成イ」。

⑧「讚」右に「歎イ」。

⑨「超」右に「過イ」。

- ⑩「流」に「メクル ナカル」の左訓。
- ⑪「通」右に「儀イ」。
- ⑫「力」右に「至イ」。
- ⑬「如<sup>レ</sup>是功德」右に「生<sup>スレハ</sup>ニ安樂國<sup>ニ</sup>「イ」。
- ⑭「絶」に「ワタテ」の左訓。
- ⑮「絶」右に「名<sup>クヘキコト</sup>イ」。
- ⑯「成」右に「滅イ」。
- ⑰「雅」に「ウルハシ」の左訓。
- ⑱「導」右に「尊イ」。
- ⑲「適」に「カナフ」の左訓。
- ⑳「敢」に「アヘテ\カシコマテ」の左訓。
- ㉑「後」右に「彼イ」。
- ㉒「故<sup>セハ</sup>」送り仮名の「セ」は「ナレ」の合字か。右に「爲<sup>ナリ</sup>イ」。
- ㉓下欄に「歎<sup>タムシテ</sup>イ」。
- ㉔「晏」「安」それぞれ左下に丸（圈発）。
- ㉕「号」依拠本では「名<sup>ナ</sup>」となっており、左に丸、右に「号」とある。
- ㉖「虔」に「ツ、シミ\ウヤマフ」の左訓。
- ㉗「入」に「サトルコトヲ」の左訓。
- ㉘上欄に「遏イ」。
- ㉙「陵」に「ツカ」の左訓。
- ㉚「超」右に「照」。
- ㉛「嫁」に「タヲヤカナリ\ヤハラカナリ」の右訓。
- ㉜「亮」に「サヤケシ\アキラカナリ」の左訓。
- ㉝「平」右に「互<sup>ニ</sup>」。
- ㉞「縷」に「ロウ」の左訓。
- ㉟「列」に「ツラナリ」の左訓。
- ㊱「芬」に「カウハシ\ニアヒテ」、「芳」に「ニホフ」の左訓。
- ㊲上欄に「芬<sup>カウハシ</sup>芳」。
- ㊳「用」に「ルト」の左訓。
- ㊴「訖」に「ルトニ」の左訓。
- ㊵「朱」に「アカシ」、「紫」に「ムラサキナリ」、「紅」に「クレナイ」、「緑」に「ミトリ」の左訓。
- ㊶「焯」に「カ、ヤキ」、「燂」に「ヒカリ」、「煥」に「アキラカ」、「爛」に「テル」の左訓。
- ㊷「彫」に「エル」、「綺」に「イロフ」の左訓。
- ㊸「明」に「ミヤウ」の左訓。
- ㊹「珠」に「シュ」、「璫」に「タウ」の左訓。
- ㊺「其」に「池イ」の左訓。

- ④⑥ 「彩」に「ウルハシ／イロフ」の左訓。
- ④⑦ 「熠」に「ヒカリ」、「燿」に「カ、ヤク」の左訓。
- ④⑧ 「澹」に「アラフ」の左訓。
- ④⑨ 「綽」に「ヒロシ／ユタカナリ」、「約」に「マトフ」の左訓。
- ⑤⑩ 上欄に「勸イ」。
- ⑤⑪ 「語」に「ラヒヲ」の左訓。
- ⑤⑫ 「隨」右に「諸イ」。
- ⑤⑬ 下欄に「如イ」。
- ⑤⑭ 「放」に「ユルシテ」の左訓。
- ⑤⑮ 「卉」に「クサ」の左訓。  
シメム
- ⑤⑯ 行間に「願聞」  
下十方諸有緣ニ 欲スレハ 得ムト 往レ 生スルコトヲ  
 安樂ニ 者ニ」。
- ⑤⑰ 上欄に「實智／方便智」。

### 3 『略論安楽土義』 訓点資料三本対照表

凡例

一、本表は以下の三本を対照した。

上段……大原来迎院藏良忍手沢本（康和二年書写。以下、良忍本）

中段……京都常楽寺藏本（室町時代書写といわれる。以下、常楽寺本）

下段……南條神興校正『真宗／校本七祖聖教上』（明治十二年発兌）所収（以下、南條本）

一、適宜改行し、主要な問答ごとに線で区切った。

一、依拠本に使用する古体、異体等の漢字は原則として通用の正体に改めた。また「己」「巳」「巳」の三字、「莊」「庄」の二字、「比」「此」の二字については文脈によつて適宜補正した。

一、「ㄣ」などの合字は仮名に改めた。菩薩・声聞・菩提などの略字は通常の表記に改めた。依拠本で漢字の連記を示す記号は「々」に統一した。

一、依拠本で汚損等により不明瞭な箇所は「□」で示した。また依拠本にはない文字で便宜上補ったもの及び推定したものは「〔 〕」で示した。

一、依拠本の改行箇所を「」で示した。

一、良忍本については、依拠本では返り点、句切りの記号が点で記されているが、ここでは便宜上それぞれ「一」、「。」で表した。

一、常楽寺本については、依拠本にある訂正や挿入を【 】で示した。

一、良忍本、常楽寺本については南條本と漢字の異なる箇所を網掛けで示した。

良忍本（康和二年）	<p>【外題】</p> <p>安樂土義 良忍之</p>	<p>略論安樂土義」</p> <p>問曰安樂國於三界中何界所攝。</p> <p>答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居故非色界。有形色」故非無色界。</p>	<p>經曰阿彌陀佛本行菩薩道時作比丘一名曰法藏。於世自在王佛所請問諸佛淨土之行。時佛爲說二百一十億諸佛刹土天人善惡國土精麤悉現與之。于時法藏菩薩即於佛前發弘誓大願取諸佛土。於無量阿僧祇劫如所發願一行諸波羅密一萬行圓滿（成）無上道。別業所得非三界一也。」</p>
常樂寺本（室町時代）	<p>【外題】</p> <p>略論</p>	<p>略論安樂淨土義 曇鸞法師作」</p> <p>問曰安樂國於三界中何界所攝。</p> <p>答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居」故非色界。有形色故非無色界。</p>	<p>經曰阿彌陀佛」本行菩薩道時作比丘一名曰法藏。於世自在王佛所請問諸佛淨土之行。時佛爲說二百一十億諸佛刹土天人善惡國土精麤悉現與之。于時法藏菩薩即於佛前發弘誓大願取諸佛土。於無量阿僧祇劫如所發願一行諸波羅密一萬善圓滿（成）無上道。別業所得非三界一也。</p>
南條本（明治十二年）	<p>略論安樂淨土義 曇鸞法師作」</p> <p>問曰安樂國於三界中何界所攝。</p> <p>答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居」故非色界。有形色故非無色界。</p>	<p>略論安樂淨土義 曇鸞法師作」</p> <p>問曰安樂國於三界中何界所攝。</p> <p>答曰如釋論言。如斯淨土非三界所攝。何以故無欲故非欲界。地居」故非色界。有形色故非無色界。</p>	<p>經曰阿彌陀佛」本行菩薩道時作比丘一名曰法藏。於世自在王佛所請問諸佛淨土之行。時佛爲說二百一十億諸佛刹土天人善惡國土精麤悉現與之。于時法藏菩薩即於佛前發弘誓大願取諸佛土。於無量阿僧祇劫如所發願一行諸波羅密一萬善圓滿（成）無上道。別業所得非三界一也。</p>

問曰安樂國有幾種莊嚴一名爲淨土。	問曰安樂國有幾種莊嚴一名爲淨土。	問曰安樂國有幾種莊嚴一名爲淨土。
答曰若依經一據義一法一藏菩薩卅八願卽是其事。尋讀一可知。不復重序。若依無量壽論以二種清淨攝二十九種莊嚴成就。以二種清淨者一器世間清淨。二是衆生世間清淨。	答曰若依經一據義一法一藏菩薩卅八願卽是其事。尋讀一可知。不復重序。若依無量壽論以二種清淨攝二十九種莊嚴成就。以二種清淨者一器世間清淨。二是衆生世間清淨。	答曰若依經一據義一法一藏菩薩卅八願卽是其事。尋讀一可知。不復重序。若依無量壽論以二種清淨攝二十九種莊嚴成就。以二種清淨者一器世間清淨。二是衆生世間清淨。
器世間清淨有十七種莊嚴成就。一者國土相勝過三界道。二者其國大廣量如虛空一無有齊限。	器世間清淨有十七種莊嚴成就。一者國土相勝過三界道。二者其國大廣量如虛空一無有齊限。	器世間清淨有十七種莊嚴成就。一者國土相勝過三界道。二者其國大廣量如虛空一無有齊限。
三者從菩薩正道大慈悲出世善根所起。	三者從菩薩正道大慈悲出世善根所起。	三者從菩薩正道大慈悲出世善根所起。
四者清淨光明圓滿莊嚴。	四者清淨光明圓滿莊嚴。	四者清淨光明圓滿莊嚴。
五者備具第一珍寶性一出奇妙寶物。	五者備具第一珍寶性一出奇妙寶物。	五者備具第一珍寶性一出奇妙寶物。
六者潔淨光明常照世間。	六者潔淨光明常照世間。	六者潔淨光明常照世間。
七者其國寶物柔軟觸者適悅生於勝樂。	七者其國寶物柔軟觸者適悅生於勝樂。	七者其國寶物柔軟觸者適悅生於勝樂。

八者千万、寶花莊嚴、池沼、寶殿樓閣、種々、寶樹雜、色、光明影納、世界、無量寶羅網覆、虛空、四面懸鈴、常吐法、音。	九者於虛空中、自然、常雨天華、天衣、香、莊嚴普勦。	十者佛惠、光明照除、癡闇。	十一者梵聲開悟、遠聞十方。	十二者、阿彌陀佛無上法王、善力住持。	十三者從如來淨花之所、化生。	十四者愛樂、佛法、味、禪三昧、爲食。	十五者永離身心諸苦、受、樂、無間。	十六者乃至不聞、二乘女人根缺之名。	十七者衆生有、所欲樂、隨心、稱意、無不、滿足。	如是、等十七種是、名器世間清、淨。
八者千万、寶華莊嚴、池沼、寶殿・樓閣種々、寶、樹雜色、光明影、網、世界、無量、寶羅網覆、虛空、四、面懸鈴、常吐法音。	九者於、虛空中、自然、常雨天華、天衣、天香、莊嚴普、薰。	十者佛慧、光明照、除、癡、闇。	十一者梵聲開、悟、遠聞、十方。	十二者阿彌陀、佛無上法王、善力住持。	十三者從、如來淨華、之、所、化生。	十四者愛、樂、佛法、味、禪三昧、爲食。	十五者永、離、身心、諸苦、受、樂、無間。	十六者乃至不聞、二乘女人根缺之名。	十七者衆生有、所、欲樂、隨心、稱意、無不、滿足。	如是、等十七種是、名、器世間清、淨。
八者千萬、寶花莊嚴、池沼、寶殿寶樓閣種々、寶樹、雜色、光明影、納、世界、無量、寶羅網覆、虛空、四面懸鈴、常吐、法音。	九者於、虛空中、自然、常雨、天華、天衣、天香、莊嚴、普、薰。	十者佛慧、光明照、除、癡、闇。	十一者梵、聲開悟、遠聞、十方。	十二者阿彌陀佛無上法王、善、力住持。	十三者從、如來、淨華、所、化生。	十四者愛、樂、佛法、味、禪三昧、爲食。	十五者永、離、身心、諸苦、受、樂、無間。	十六者乃至不聞、二乘、女人根缺、之名。	十七者衆生有、所、欲樂、隨心、稱意、無不、滿足。	如是、等、十、七種是、名、器世間清、淨。



衆生世間清淨有十二種莊成就。  
一者無量大珍寶王微妙淨華臺以爲佛座。  
二者無量相好無量光明莊嚴佛身。  
三者佛無量弁才應機說法。具足清白令人樂聞。々者必悟解言不虛設。  
四者佛眞如智慧猶如虛空照了諸法物相別相心無分別。  
五者天人不動衆廣大莊嚴譬如須彌山映顯四大海。法王相具足。  
六者成就無上果尚無能及。況復過者。  
七者爲天人丈夫調御師大衆恭敬圍遶如師子王師子圍遶。

衆生世間清淨有十二種莊嚴成就。  
一者無量、大珍寶王微妙、華臺、以爲佛座。  
二者無量、相好無量、光明莊嚴佛身。  
三者佛、無量、辨才應機說法、具足清白、令人樂聞。  
四者、必解言不虛說。  
四者「佛、眞如、智慧猶如虛空、照了諸法、總持別相、無分別」。  
五者天人不動、衆廣大莊嚴、譬如須彌山、映顯「四大海、法王、相具足」。  
六者成就、無上果、尚無能及、況復過者。  
七者爲「天人丈夫調御師、大衆恭敬圍遶、如師子王、師子圍遶」。

衆生世間清淨有二十二種莊嚴成就。  
一者無量、大珍寶微妙、華臺、以爲佛座。  
二者無量、相好無量、光明莊嚴佛身。  
三者佛、無量、辯才應機說法、具足清白、令人樂聞。  
四者、必悟解言不虛說。  
四者佛、眞如智慧、猶如虛空、照了諸法、總相別相、心無分別。  
五者天人不動、衆廣大莊嚴、譬如須彌山、映顯「四大海、法王、相具足」。  
六者成就、無上果、尚無能及、況復過者。  
七者爲「天人丈夫調御師、大衆恭敬圍遶、如師子王、師子圍遶」。

八者佛本願力莊嚴持住<sup>シテ</sup>諸功德<sup>ヲ</sup>遇者無空過<sup>ニ</sup>。能令速<sup>ニ</sup>滿足<sup>ニ</sup>一切功德海<sup>ニ</sup>與諸淨心<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ヲ</sup>畢竟得證<sup>シテ</sup>平等法身<sup>ヲ</sup>。淨心菩薩<sup>ト</sup>與上地<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ニ</sup>畢竟同得寂滅平等<sup>ニ</sup>。

九者安樂國諸菩薩衆身不<sup>シテ</sup>動搖<sup>ニ</sup>而遍至十方<sup>ニ</sup>種々應化<sup>ス</sup>。如實<sup>ニ</sup>修行常作佛事<sup>ヲ</sup>。

十者如是<sup>ニ</sup>菩薩應<sup>ニ</sup>化身一切時不前<sup>ニ</sup>不後<sup>ニ</sup>一心一念<sup>ニ</sup>放大光明<sup>ニ</sup>悉能遍至十方世界<sup>ニ</sup>教化衆生<sup>ヲ</sup>種々方便修行所成<sup>ニ</sup>滅除一切衆生苦惱<sup>ヲ</sup>。

十一者如<sup>ニ</sup>是等菩薩於一切世界<sup>ニ</sup>無余照<sup>シ</sup>諸佛大會無余<sup>ヲ</sup>廣大無量<sup>ニ</sup>供養恭敬讚嘆<sup>ス</sup>諸佛如來功德<sup>ヲ</sup>。

十二者是諸菩薩於十方一切<sup>ニ</sup>世界<sup>ニ</sup>無三寶<sup>ニ</sup>處住持莊嚴<sup>シテ</sup>佛法僧寶功德大海<sup>ニ</sup>遍示<sup>シテ</sup>令解<sup>シテ</sup>如實<sup>ニ</sup>修行<sup>ス</sup>。

八者佛<sup>ノ</sup>本願莊嚴<sup>シ</sup>住<sup>ニ</sup>持<sup>シテ</sup>諸功德<sup>ヲ</sup>遇者<sup>ノ</sup>無空過<sup>ニ</sup>能令速<sup>ニ</sup>滿足<sup>ニ</sup>一切功德海<sup>ニ</sup>與諸淨心<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ヲ</sup>畢竟得<sup>シテ</sup>證<sup>ス</sup>平等法身<sup>ヲ</sup>與淨心<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ト</sup>與上地<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ニ</sup>畢竟同得<sup>ニ</sup>寂滅平等<sup>ニ</sup>。

九者安樂國<sup>ノ</sup>諸菩薩<sup>ノ</sup>衆身不<sup>シテ</sup>動搖<sup>ニ</sup>而遍至十方<sup>ニ</sup>種々應化<sup>ス</sup>如<sup>レ</sup>實<sup>ニ</sup>修行<sup>ス</sup>常作<sup>ニ</sup>佛事<sup>ヲ</sup>。

十者如<sup>レ</sup>是菩薩應化身一切時不<sup>ニ</sup>前<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>一心一念<sup>ニ</sup>放大光明<sup>ニ</sup>悉能遍至十方世界<sup>ニ</sup>教化衆生<sup>ヲ</sup>種々方便修行<sup>ニ</sup>所成滅除<sup>ス</sup>一切衆生<sup>ノ</sup>苦惱<sup>ヲ</sup>。

十一者<sup>ニ</sup>是等菩薩於一切世界<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>餘照<sup>シ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>大會<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>餘廣大無量<sup>ニ</sup>供<sup>ス</sup>養恭敬讚嘆<sup>ス</sup>諸佛如來<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>。

十二者<sup>ニ</sup>是諸菩薩於十方世界<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>三寶<sup>ニ</sup>處住<sup>ニ</sup>持<sup>シテ</sup>莊嚴<sup>シテ</sup>佛法僧寶<sup>ノ</sup>功德大海<sup>ニ</sup>遍示<sup>シテ</sup>令<sup>下</sup>解<sup>リ</sup>如<sup>レ</sup>實<sup>ニ</sup>修行<sup>ス</sup>。

八<sup>ニハ</sup>者佛<sup>ノ</sup>本願力<sup>ヲ</sup>莊嚴<sup>シ</sup>住<sup>ニ</sup>持<sup>ス</sup>諸功德<sup>ヲ</sup>遇者<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>空過<sup>ニ</sup>能令<sup>ニ</sup>速<sup>ニ</sup>滿足<sup>ニ</sup>足<sup>セ</sup>一切功德海<sup>ニ</sup>未證淨心<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ヲ</sup>畢竟得<sup>シテ</sup>證<sup>ス</sup>平等法<sup>ヲ</sup>身<sup>ヲ</sup>與淨心<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ト</sup>與上地<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ニ</sup>畢竟同<sup>ニ</sup>。

九<sup>ニハ</sup>者安樂國<sup>ノ</sup>諸菩薩衆身不<sup>シテ</sup>動搖<sup>ニ</sup>而遍至十方<sup>ニ</sup>種<sup>ニ</sup>應化<sup>ス</sup>如<sup>レ</sup>實<sup>ニ</sup>修行<sup>ス</sup>常作<sup>ニ</sup>佛事<sup>ヲ</sup>。

十者如<sup>レ</sup>是菩薩應化身一切時不<sup>ニ</sup>前<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>一心一念<sup>ニ</sup>放<sup>シ</sup>光明<sup>ニ</sup>悉能遍至十方世界<sup>ニ</sup>教化衆生<sup>ヲ</sup>種々方便修行<sup>ニ</sup>所成滅除<sup>ス</sup>一切衆生<sup>ノ</sup>苦惱<sup>ヲ</sup>。

十一<sup>ニハ</sup>者<sup>ニ</sup>是等菩薩於一切世界<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>餘<sup>リ</sup>照<sup>シ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>大會<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>餘廣大無量<sup>ニ</sup>供養恭敬讚<sup>ス</sup>嘆<sup>ス</sup>諸佛<sup>ノ</sup>如來功德<sup>ヲ</sup>。

十二<sup>ニハ</sup>者<sup>ニ</sup>是諸菩薩於十方一切世界<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>三寶<sup>ニ</sup>處住<sup>ニ</sup>持<sup>シテ</sup>莊嚴<sup>シテ</sup>佛法僧寶<sup>ノ</sup>功德大海<sup>ニ</sup>遍示<sup>シテ</sup>令<sup>メ</sup>解<sup>セ</sup>如<sup>レ</sup>實<sup>ニ</sup>修行<sup>ス</sup>。

如是等法王八種、莊嚴功德成就。如是等、四種莊嚴功、德成就就是名衆生世間清淨。安樂國土、具如是等二十九種、莊嚴功德成就。故名淨土。問曰生安樂土者凡有幾種。幾因緣。答無量壽經中、唯有三輩上中下。無量壽觀經中、一品中又分爲上中下三々。而九。合爲九品。今依一、無量壽經爲讚。且據此經一作三品論之。

上輩生者有五因緣。  
一者捨家離欲、而作沙門。  
二者發無上菩提心。  
三者一向專念無量壽佛。  
四者修諸功德。  
五者願生安樂國。

如是等法王八種、莊嚴功德成就。如是等、菩薩四種、莊嚴功德成就。是名衆生世間清淨、安樂國土。具如是等、廿九種、莊嚴功德成就。故名淨土。問曰生安樂土者凡有幾輩。幾因緣。答曰無量壽經中、唯有三輩上中下。無量壽觀經中、一品中又分爲上中下三々。而九。合爲九品。今依一、無量壽經爲讚。且據此經一作三品論之。

上輩生者有五因緣。  
一者捨家離欲、而作沙門。  
二者發無上菩提心。  
三者一向專念、無量壽佛。  
四者修諸。  
五者願生安樂國。

如是等法王八種、莊嚴功德成就。如是等、菩薩四種、莊嚴功德成就。是名衆生世間清淨、安樂國土。具如是等、二十九種、莊嚴功德成就。故名淨土。問曰生安樂土者凡有幾輩。幾因緣。答曰無量壽經中、唯有三輩上中下。無量壽觀經中、一品中又分爲上中下三三三。而九。合爲九品。今依一、無量壽經爲讚。且據此經一作三品論之。

上輩生者有五因緣。  
一者捨家離欲、而作沙門。  
二者發無上菩提心。  
三者一向專念、無量壽佛。  
四者修諸功德。  
五者願生安樂國。

具此五緣 臨命終時「無量」壽佛與諸  
大衆「現其人前」即「便隨佛」往生  
安樂「於七寶華」中「自然化生」。  
住不退轉「智慧勇猛」神通自在。

中輩生者有「七因緣」。

一者發無量菩提心。

二者一向專念無量壽佛。

三者少「多」修善「奉持齋戒」。

四者起立塔像

五者飯食沙門。

六者懸「繪」燃燈「散花燒香」。

七者以此廻向願生安樂。

臨命終時「無量」壽佛化現其身「光  
明相好具如」眞佛「與諸大衆」現  
其人前。即「隨化佛」往生安  
樂「住不退轉」功德智慧次如上輩。  
下輩生者「有三因緣」。

具「此五」緣「臨命終時」無量  
壽佛與諸大衆「現其人前」即「  
便隨佛」往生安樂「於七寶華  
中」自「然化生」住不退轉「智慧  
勇猛神通自在」。

具「此」因緣「臨命終時」無  
量壽佛與「諸」大衆「現其人  
前」即「便隨佛」往生安樂「於  
七寶華中」自然化生住不退  
轉「智慧勇猛」神通自在。

中「輩生者有七」因緣「

一者發無上菩提心

二者一向專念無量壽佛

三者多少修善奉持齋戒

四者起立塔像

五者飯食沙門

六者懸「繪」燃「燈散華燒香」

七者以此廻向願生安樂

臨「命終時」無量壽佛化「現其  
身」光明相好具如「眞」佛「與諸大  
衆」現其人前「即隨化佛」往生  
安樂「住不退轉」功德智慧次  
如上輩。  
下輩生者「有三因緣」

臨「命終時」無量壽佛化「現其  
身」光明相好具如「眞佛」與「諸大  
衆」現「其人前」即隨「化佛」  
往生安樂「住不退轉」功德智慧  
次如上輩。  
下輩生者有「三因緣」

一者假使不能作諸功德、當發無上菩提心。  
二者一「向專意」乃至十念々無量壽佛  
三者以至誠心願生安樂。」

臨命終時夢見無量壽佛亦得往生功德、智惠如此中輩。」

又有一種往生安樂不入三輩中。謂以疑惑心修諸功德願生安樂。不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生安樂。生安樂國七寶宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天亦皆自然。於五百歲不見佛不聞經法。不見菩薩聲聞聖衆。安樂國土謂之邊地。亦自胎生。

一者假使不能作諸功德當發无上菩提心  
二者一向專意乃至十念々無量壽佛  
三者以至誠心願生安樂

臨命終時夢見無量壽佛亦得往生功德智慧次如中輩

又有一種往生安樂不入三輩中謂以疑惑心修諸功德願生安樂不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生安樂一生安樂國七寶宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天亦皆自然於五百歲不見佛不聞經法不見菩薩聲聞聖衆安樂國土謂之邊地亦曰胎生

一者假使不能作諸功德當發无上菩提心  
二者一向專意乃至十念々無量壽佛  
三者以至誠心願生安樂

臨命終時夢見無量壽佛亦得往生功德智慧次如中輩

又有一種往生安樂不入三輩中謂以疑惑心修諸功德願生安樂不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本一生安樂國七寶宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天亦皆自然於五百歲中常見佛不聞經法不見菩薩聲聞聖衆安樂國土謂之邊地亦曰胎生

邊地」者言<sup>イフコ、ロハ</sup> 其五百歲中<sup>ニ</sup>不見聞三寶<sup>ヲ</sup>・義・同<sup>シ</sup>・邊地之難<sup>ニ</sup>。或亦於安樂國土<sup>ニ</sup>最在其邊。胎生者譬如胎生人<sup>ト</sup>初生之時<sup>ニ</sup>人法未成<sup>ニ</sup>・邊言<sup>テコニ</sup>其難<sup>⑥スナリ</sup>・胎言其闇。此二名<sup>ニ</sup>皆借<sup>テ</sup>此<sup>ニ</sup>・況彼<sup>ニ</sup>耳。非是八難」中<sup>ニ</sup>・邊地<sup>ニハ</sup>。亦非胞胎<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>胎生<sup>ニハ</sup>。何以知<sup>カ</sup>之<sup>ヲ</sup>。安樂國<sup>ニハ</sup>一向<sup>ニ</sup>化生<sup>ニ</sup>故<sup>カ</sup>。々知<sup>ル</sup>非實<sup>ニ</sup>・胎生<sup>ニハ</sup>五百年後還<sup>テ</sup>得<sup>ル</sup>・見聞三寶<sup>ヲ</sup>一故<sup>ニ</sup>。々知<sup>ル</sup>非八難<sup>ニハ</sup>中<sup>ニ</sup>邊地<sup>ニハ</sup>。」

問曰彼胎生者處七寶宮殿中受快樂一不復何所憶念。

答曰經一喻云譬如轉輪王々子得罪於王内於後宮一繫以金鎖一切供一具無所乏少猶如王子。々々于時雖有好妙種種自娛樂具心一不愛樂。但念設諸方便一求免一怖出。

邊地者言其五百歲中不見一  
聞三寶一義同【邊地者言其五  
百歲中不見聞三寶一義同】邊地之  
難一或亦於安樂國土一最在其  
邊一胎生者譬如胎生人初生  
之時人法未成一邊言一其難  
胎言其間一此二名皆借レ此  
況彼耳非一是「八難中邊  
地」亦非胞胎中胎生一何  
以知レ之安樂國一向化一  
故々知非實胎生一五百歲後一  
還得三見一聞三寶一故々知  
非一八難中邊地一也

問曰<sup>ニ</sup>「彼<sup>ク</sup>胎生<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>處<sup>シテ</sup>七寶宮殿<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>受<sup>クヤ</sup>二快樂<sup>ヲ</sup>一不復<sup>ヤ</sup>」何<sup>カ</sup>所<sup>アル</sup>二何<sup>ニ</sup>一憶念<sup>スル</sup>答曰<sup>ル</sup>「經<sup>ニ</sup>喻<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>譬<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>下轉<sup>ニ</sup>一輪<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>得<sup>テ</sup>罪<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>王<sup>ノ</sup>內<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>後宮<sup>ニ</sup>一繫<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>二金鎖<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>切<sup>リ</sup>供具<sup>ヲ</sup>無<sup>ク</sup>所<sup>ニ</sup>乏<sup>ク</sup>ナル<sup>ヲ</sup>猶<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>二王<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>時<sup>ニ</sup>雖<sup>モ</sup>有<sup>リ</sup>少<sup>ク</sup>二猶<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>二王<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>時<sup>ニ</sup>雖<sup>モ</sup>有<sup>リ</sup>好妙種々<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>娛樂<sup>ス</sup>」具<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>愛樂<sup>セ</sup>但<sup>シテ</sup>念<sup>ス</sup>中<sup>ニ</sup>設<sup>ス</sup>諸<sup>ヲ</sup>方便<sup>ヲ</sup>一求<sup>メ</sup>免<sup>ス</sup>怖<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>上

邊地<sup>トハノ</sup>」者<sup>シ</sup>言<sup>ハ</sup>其<sup>ニ</sup>五百歲<sup>ハレ</sup>中<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>タ</sup>三寶<sup>ヲ</sup>義<sup>シ</sup>同<sup>シ</sup>二邊地<sup>ノ</sup>之難<sup>ニ</sup>或<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>亦<sup>タ</sup>聞<sup>ク</sup>二安樂國<sup>ヲ</sup>土<sup>ニ</sup>最<sup>モ</sup>在<sup>リ</sup>二其邊<sup>ニ</sup>一胎生<sup>トハ</sup>者<sup>ノ</sup>譬<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>下胎生<sup>ハ</sup>人初<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>之時<sup>ニ</sup>人法<sup>ハ</sup>未<sup>ラ</sup>カ<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>邊<sup>ニ</sup>言<sup>ハ</sup>二其難<sup>ヲ</sup>一胎言<sup>ハ</sup>二其聞<sup>ヲ</sup>一此二名<sup>ヲ</sup>皆<sup>ハ</sup>借<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>況<sup>ヲ</sup>況<sup>ス</sup>彼<sup>ニ</sup>耳<sup>ヲ</sup>非<sup>ス</sup>是<sup>ニ</sup>八難<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>邊地<sup>ニ</sup>一亦<sup>ス</sup>非<sup>ス</sup>二胞胎<sup>ヲ</sup>中<sup>ニ</sup>胎生<sup>ニ</sup>一何<sup>ナ</sup>以<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>安樂國<sup>ニ</sup>土<sup>ハ</sup>一向<sup>ニ</sup>化生<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>非<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>胎生<sup>ニ</sup>二五百年<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>得<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>三寶<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>非<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>邊地<sup>ニ</sup>一也<sup>ニ</sup>

問<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>彼胎生<sup>ノ</sup>者處<sup>ハ</sup>三七寶<sup>シテ</sup>宮殿<sup>ニ</sup>  
中<sup>ニ</sup>受<sup>ル</sup>快樂<sup>ヲ</sup>否<sup>ヤ</sup>復何<sup>ソヤ</sup>所<sup>ニ</sup>二憶<sup>ス</sup>  
念<sup>テ</sup>一  
答<sup>ス</sup>曰<sup>ク</sup>經<sup>ニ</sup>喻<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>譬<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>下轉輪王<sup>ノ</sup>子<sup>ニ</sup>  
得<sup>ル</sup>罪<sup>ヲ</sup>於王<sup>ニ</sup>內<sup>ニ</sup>於後宮<sup>キコト</sup>一繫<sup>ス</sup>  
以<sup>テ</sup>金鎖<sup>カ</sup>上<sup>ニ</sup>一切<sup>ヲ</sup>供具<sup>モ</sup>無<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乏<sup>ス</sup>  
少<sup>スル</sup>猶如<sup>シ</sup>王<sup>ノ</sup>子<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>時雖<sup>モ</sup>  
有<sup>ル</sup>三好妙種種<sup>ヲ</sup>自娛樂<sup>ス</sup>具<sup>ヲ</sup>一心<sup>ニ</sup>  
受<sup>ル</sup>樂<sup>ヲ</sup>但念<sup>ス</sup>下<sup>ニ</sup>設<sup>テ</sup>三諸<sup>ヲ</sup>方便<sup>ヲ</sup>一求<sup>メ</sup>  
免<sup>ルコトヲ</sup>怖<sup>フコトヲ</sup>出<sup>ルコトヲ</sup>

<p>彼胎生者<sup>ノ</sup>亦復如是。雖<sup>モ</sup>處<sup>シテ</sup>七寶宮殿<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>妙色<sup>ノ</sup>聲香味觸<sup>ニ</sup>不以<sup>テ</sup>爲樂<sup>ト</sup>。但以<sup>テ</sup>不見<sup>ル</sup>三寶<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>供養<sup>ヲ</sup>修<sup>ス</sup>諸善本<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>爲苦<sup>ト</sup>。若識<sup>ス</sup>其本罪<sup>ヲ</sup>深自悔<sup>ミ</sup>憤<sup>シ</sup>求<sup>メ</sup>離<sup>レ</sup>彼處<sup>ヲ</sup>即得<sup>ル</sup>如意<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>同<sup>ニ</sup>三輩生者<sup>ノ</sup>當<sup>ニ</sup>是五百年<sup>ニ</sup>未方識<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>悔<sup>ミ</sup>耳<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>彼<sup>ノ</sup>胎生者<sup>ト云ハ</sup>亦復如是。雖<sup>モ</sup>處<sup>シテ</sup>七寶宮殿<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>妙色<sup>ノ</sup>聲香味觸<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>爲樂<sup>ト</sup>。但以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>三寶<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>供<sup>ス</sup>養<sup>ヲ</sup>修<sup>ス</sup>諸<sup>ノ</sup>善本<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>苦<sup>ト</sup>。若識<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>本罪<sup>ヲ</sup>深自悔<sup>ミ</sup>責<sup>ス</sup>求<sup>メ</sup>離<sup>レ</sup>彼處<sup>ヲ</sup>即得<sup>ル</sup>如意<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>同<sup>ニ</sup>三輩生者<sup>ノ</sup>當<sup>ニ</sup>是五百年<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>方識<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>悔<sup>ミ</sup>耳<sup>ヲ</sup>。」</p>	<p>彼<sup>ノ</sup>胎生者<sup>モ</sup>亦復如<sup>シ</sup>是<sup>ノ</sup>雖<sup>モ</sup>處<sup>シテ</sup>七寶宮殿<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>妙色<sup>ノ</sup>聲香味觸<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>爲樂<sup>ト</sup>。但以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>三寶<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>養<sup>ス</sup>修<sup>ス</sup>諸<sup>ノ</sup>善本<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>苦<sup>ト</sup>。若識<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>本罪<sup>ヲ</sup>深自悔<sup>ミ</sup>責<sup>ス</sup>求<sup>メ</sup>離<sup>レ</sup>彼處<sup>ヲ</sup>即得<sup>ル</sup>如意<sup>ニ</sup>還<sup>ル</sup>同<sup>ニ</sup>三輩生者<sup>ノ</sup>當<sup>ニ</sup>是五百年<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>方識<sup>ス</sup>罪<sup>ヲ</sup>悔<sup>ミ</sup>耳<sup>ヲ</sup>。」</p>
<p>問曰以疑惑心<sup>ヲ</sup>往生安樂<sup>ニ</sup>名曰胎生者<sup>ハ</sup>云何起疑<sup>ヲ</sup>。答曰經中但云<sup>テ</sup>疑惑<sup>ニ</sup>不信<sup>ニ</sup>不出所以<sup>ハ</sup>疑<sup>フ</sup>一意<sup>ヲ</sup>尋<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>了<sup>ス</sup>五句<sup>ヲ</sup>敢<sup>テ</sup>以對治<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>了佛智<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>能信<sup>ハ</sup>佛一切種智<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>了故<sup>ニ</sup>起疑<sup>ヲ</sup>。此一句惣斥<sup>ス</sup>所疑<sup>ヲ</sup>。下四一句一々對治<sup>ス</sup>所疑<sup>ヲ</sup>。々有四意<sup>ニ</sup>。</p>	<p>問曰以疑惑心<sup>ヲ</sup>往生<sup>スルヲ</sup>安樂<sup>ニ</sup>名曰胎生<sup>ト云ハ</sup>者云何起疑<sup>ヲ</sup>。答曰經中但云<sup>テ</sup>疑惑<sup>ニ</sup>不信<sup>ニ</sup>不出所以<sup>ハ</sup>疑<sup>フ</sup>一意<sup>ヲ</sup>尋<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>了<sup>ス</sup>五句<sup>ヲ</sup>敢<sup>テ</sup>以對治<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>了佛智<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>能信<sup>ハ</sup>佛一切種智<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>了故<sup>ニ</sup>起疑<sup>ヲ</sup>。此一句惣辨<sup>ス</sup>所疑<sup>ヲ</sup>。下四一句一對三治所疑<sup>ヲ</sup>疑<sup>ハ</sup>有四意<sup>ニ</sup>。</p>	<p>問曰以疑惑心<sup>ヲ</sup>往生<sup>スルヲ</sup>安樂<sup>ニ</sup>名曰胎生<sup>ト云ハ</sup>者云何起疑<sup>ヲ</sup>。答曰經中但云<sup>テ</sup>疑惑<sup>ニ</sup>不信<sup>ニ</sup>不出所以<sup>ハ</sup>疑<sup>フ</sup>一意<sup>ヲ</sup>尋<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>了<sup>ス</sup>五句<sup>ヲ</sup>敢<sup>テ</sup>以對治<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>了佛智<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>能信<sup>ハ</sup>佛一切種智<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>了故<sup>ニ</sup>起疑<sup>ヲ</sup>。此一句惣辨<sup>ス</sup>所疑<sup>ヲ</sup>。下四一句一對三治所疑<sup>ヲ</sup>疑<sup>ハ</sup>有四意<sup>ニ</sup>。</p>



一者疑<sup>フ</sup>但憶念<sup>シテ</sup>阿彌陀佛<sup>ヲ</sup>不<sup>ト</sup>必<sup>シモ</sup>得往<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>安樂<sup>ニ</sup>。何<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>故<sup>ニ</sup>經言<sup>ハ</sup>。業道<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>稱<sup>ハカリノ</sup>。重者<sup>オモキノ</sup>先牽<sup>ノ</sup>。云何<sup>ニ</sup>一生或百年<sup>ニ</sup>或十年<sup>ニ</sup>或一日<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>造<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>十念相續<sup>ニ</sup>便得<sup>ニ</sup>往生<sup>ニ</sup>即入<sup>ニ</sup>正定聚<sup>ニ</sup>畢<sup>ニ</sup>竟<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>退<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>三塗諸苦<sup>ニ</sup>永隔<sup>ニ</sup>耶。若爾<sup>ハ</sup>先牽<sup>ニ</sup>之義<sup>ニ</sup>何以取<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>。又曠<sup>ニ</sup>劫已來<sup>ニ</sup>備<sup>ニ</sup>造<sup>ニ</sup>諸行有漏<sup>ニ</sup>之法<sup>ニ</sup>繫屬<sup>ニ</sup>三界<sup>ニ</sup>。云何<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>斷<sup>ニ</sup>三界結惑<sup>ニ</sup>。直<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少時<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>阿彌陀佛<sup>ニ</sup>便出<sup>ニ</sup>三界<sup>ニ</sup>耶。繫業<sup>ニ</sup>之義<sup>ニ</sup>復欲<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>。

對治<sup>カ</sup>此疑<sup>ヲ</sup>故言<sup>ニ</sup>不思議智<sup>ヲ</sup>。不思議者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>佛智<sup>ヲ</sup>力能<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>。以多<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>少<sup>ニ</sup>。以近<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>。以遠<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>。以輕<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>。以重<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>輕<sup>ニ</sup>。以長<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>短<sup>ニ</sup>。以短<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>長<sup>ニ</sup>。如是<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>佛智<sup>ニ</sup>無量<sup>ニ</sup>無邊<sup>ニ</sup>不可思議<sup>ナリ</sup>。

一者疑<sup>フ</sup>但憶念<sup>スルモ</sup>念阿彌陀佛<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>必<sup>シモ</sup>得往<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>安樂<sup>ニ</sup>。何<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>故<sup>ニ</sup>經言<sup>ハ</sup>。業道<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>稱<sup>ハカリノ</sup>。重者<sup>オモキノ</sup>先牽<sup>ノ</sup>。云何<sup>ニ</sup>一生或百年<sup>ニ</sup>或十年<sup>ニ</sup>或一月<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>造<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>十念相續<sup>ニ</sup>便得<sup>ニ</sup>往生<sup>ニ</sup>即入<sup>ニ</sup>正定聚<sup>ニ</sup>畢<sup>ニ</sup>竟<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>退<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>三塗諸苦<sup>ニ</sup>永隔<sup>ニ</sup>耶。若爾<sup>ハ</sup>先牽<sup>ニ</sup>之義<sup>ニ</sup>何以取<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>。又曠<sup>ニ</sup>劫已來<sup>ニ</sup>備<sup>ニ</sup>造<sup>ニ</sup>諸行有漏<sup>ニ</sup>之法<sup>ニ</sup>繫屬<sup>ニ</sup>三界<sup>ニ</sup>。云何<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>斷<sup>ニ</sup>三界結惑<sup>ニ</sup>。直<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少時<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>阿彌陀佛<sup>ニ</sup>便出<sup>ニ</sup>三界<sup>ニ</sup>耶。繫業<sup>ニ</sup>之義<sup>ニ</sup>復欲<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>云何<sup>ニ</sup>。

對<sup>ニ</sup>治<sup>スルカ</sup>此疑<sup>ヲ</sup>故言<sup>ニ</sup>不思議智<sup>ヲ</sup>。不思議者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>佛智<sup>ヲ</sup>力能<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>。以多<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>少<sup>ニ</sup>。以近<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>。以遠<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>。以輕<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>。以重<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>輕<sup>ニ</sup>。以長<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>短<sup>ニ</sup>。以短<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>長<sup>ニ</sup>。如是<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>佛智<sup>ニ</sup>無量<sup>ニ</sup>無邊<sup>ニ</sup>不可思議<sup>ナリ</sup>。

一者疑<sup>ハク</sup>但憶念<sup>スルハ</sup>念阿彌陀佛<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>必<sup>シモ</sup>得往<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>安樂<sup>ニ</sup>。何<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>故<sup>ニ</sup>經言<sup>ハ</sup>。業道<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>稱<sup>ハカリノ</sup>。重者<sup>オモキノ</sup>先牽<sup>ノ</sup>。云何<sup>ニ</sup>一生或百年<sup>ニ</sup>或十年<sup>ニ</sup>或一月<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>造<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>十念相續<sup>ニ</sup>便得<sup>ニ</sup>往生<sup>ニ</sup>即入<sup>ニ</sup>正定聚<sup>ニ</sup>畢<sup>ニ</sup>竟<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>退<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>三塗諸苦<sup>ニ</sup>永隔<sup>ニ</sup>乎。若爾<sup>ハ</sup>先牽<sup>ニ</sup>之義<sup>ニ</sup>何以取<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>。又曠<sup>ニ</sup>劫已來<sup>ニ</sup>備<sup>ニ</sup>造<sup>ニ</sup>諸行有漏<sup>ニ</sup>之法<sup>ニ</sup>繫屬<sup>ニ</sup>三界<sup>ニ</sup>。云何<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>斷<sup>ニ</sup>三界結惑<sup>ニ</sup>。直<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少時<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>阿彌陀佛<sup>ニ</sup>便出<sup>ニ</sup>三界<sup>ニ</sup>乎。繫業<sup>ニ</sup>之義<sup>ニ</sup>復欲<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>云何<sup>ニ</sup>。

對<sup>ニ</sup>治<sup>スルカ</sup>此疑<sup>ヲ</sup>故言<sup>ニ</sup>不思議智<sup>ヲ</sup>。不思議者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>佛智<sup>ヲ</sup>力能<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>。以多<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>少<sup>ニ</sup>。以近<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>。以遠<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>。以輕<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>。以重<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>輕<sup>ニ</sup>。以長<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>短<sup>ニ</sup>。以短<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>長<sup>ニ</sup>。如是<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>佛智<sup>ニ</sup>無量<sup>ニ</sup>無邊<sup>ニ</sup>不可思議<sup>ナリ</sup>。



又<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>下<sup>下</sup>十圍之索千夫<sup>モルニ</sup>不<sup>レ</sup>制<sup>セ</sup>童子<sup>童</sup>  
揮<sup>フル</sup>フ<sup>フ</sup>レ<sup>レ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ル<sup>ル</sup>キ<sup>キ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>瞬<sup>スルカ</sup>頃<sup>ニ</sup>兩<sup>ニ</sup>分<sup>シヤ</sup>  
得<sup>レ</sup>言<sup>コト</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>二<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>兒<sup>ノ</sup>力<sup>ノ</sup>不<sup>ト</sup>能<sup>ハ</sup>レ<sup>レ</sup>  
斷<sup>ツ</sup>索<sup>ソ</sup>乎<sup>ヤ</sup>

又如<sup>⑩</sup>鳩鳥入水魚蚌斯斃犀角觸泥死者咸起。豈可得言性命一斷無可生耶。

又如黃鵠呼子安々々「還」活。豈可得言墳下千歲決無甦可耶。

一切萬法皆有自力他力。自攝他攝。開萬閉無量無邊。安得以下以有礙之識。一疑「無礙之法」。乎。又五不思議。中佛「法」最不可思議。而以百年之惡。爲「重疑」。十念々佛。爲「輕」。不得往生。安樂。入「正定聚」。者是事不然。

二者疑佛智。於人「不爲玄絶」。何以故。夫一切名字。從相待「生」。覺「智」。從不覺「生」。如迷方「從記方」。生。若使迷「絶」。不迷々々卒「不解」。迷若「可」。解。一「必迷者解」。亦可云「解者迷」。々々解々迷。猶「乎反覆」耳。乃可明昧爲異。亦安得超然哉。起此疑。故於佛智慧「生疑」。不信。

又如<sup>⑪</sup>鳩鳥入水魚蚌斯斃犀角觸泥死者咸起。豈可得言性命一斷無可生耶。

又如黃鵠呼子安々々「還」活。豈可得言墳下千歲決無甦可耶。

一切萬法皆有自力他力。自攝他攝。開萬閉無量無邊。安得以下以有礙之識。一疑「無礙之法」。乎。又五不思議。中佛「法」最不可思議。而以百年之惡。爲「重疑」。十念々佛。爲「輕」。不得往生。安樂。入「正定聚」。者是事不然。

二者疑佛智。於人「不爲玄絶」。何以故。夫一切名字。從相待「生」。覺「智」。從不覺「生」。如迷方「從記方」。生。若使迷「絶」。不迷々々卒「不解」。迷若「可」。解。一「必迷者解」。亦可云「解者迷」。々々解々迷。猶「乎反覆」耳。乃可明昧爲異。亦安得超然哉。起此疑。故於佛智慧「生疑」。不信。

又如<sup>⑫</sup>鳩鳥入水魚蚌斯斃犀角觸泥死者咸起。豈可得言性命一斷無可生耶。

又如黃鵠呼子安々々「還」活。豈可得言墳下千歲決無甦可耶。

一切萬法皆有自力他力。自攝他攝。開萬閉無量無邊。安得以下以有礙之識。一疑「無礙之法」。乎。又五不思議。中佛「法」最不可思議。而以百年之惡。爲「重疑」。十念々佛。爲「輕」。不得往生。安樂。入「正定聚」。者是事不然。

二者疑佛智。於人「不爲玄絶」。何以故。夫一切名字。從相待「生」。覺「智」。從不覺「生」。如迷方「從記方」。生。若使迷「絶」。不迷々々卒「不解」。迷若「可」。解。一「必迷者解」。亦可云「解者迷」。々々解々迷。猶「乎反覆」耳。乃可明昧爲異。亦安得超然哉。起此疑。故於佛智慧「生疑」。不信。

對治此「疑」故言不可稱智。不可稱智者言「佛智絶」於稱謂。非相形待。何以言之。法若是有必有之智。法若是無亦應有知無之智。諸法離於有無。故佛冥諸法。則智絶相待。汝引解迷爲喻。猶是一迷耳。不成迷解亦如夢中與他解夢。雖云解夢。非是不夢以知取佛。不曰知佛。以不知取佛。亦非知佛。以非知非。不知取佛。亦非知佛。以非知非々々不知。取佛亦非知佛。々々智離。此四句。緣之者心行滅指之。一言者語斷。

對治此「疑」故言不可稱智。不可稱智者言「佛智絶」於稱謂。非相形待。何以言之。法若是有必有之智。法若是無亦應有知無之智。諸法離於有無。故佛冥諸法。則智絶相待。汝引解迷爲喻。猶是一迷耳。不成迷解亦如夢中與他解夢。雖云解夢。非是不夢以知取佛。不曰知佛。以不知取佛。亦非知佛。以非知非。不知取佛。亦非知佛。以非知非々々不知。取佛亦非知佛。々々智離。此四句。緣之者心行滅指之。一言者語斷。

對治此「疑」故言不可稱智。不可稱智者言「佛智絶」於稱謂。非相形待。何以言之。法若是有必有之智。法若是無亦應有知無之智。諸法離於有無。故佛冥諸法。則智絶相待。汝引解迷爲喻。猶是一迷耳。不成迷解亦如夢中與他解夢。雖云解夢。非是不夢以知取佛。不曰知佛。以不知取佛。亦非知佛。以非知非。不知取佛。亦非知佛。以非知非々々不知。取佛亦非知佛。々々智離。此四句。緣之者心行滅損之。者言語斷。

以是義<sup>ニ</sup>故釋論言若<sup>ハ</sup>人見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是則爲被縛<sup>ハ</sup>。若不<sup>レ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是亦爲被縛<sup>ハ</sup>。若人<sup>ハ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是則爲解脫<sup>ハ</sup>。若不<sup>レ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是亦爲解脫<sup>ハ</sup>。此偈中說<sup>ハ</sup>不離四句<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者爲縛<sup>ハ</sup>。離四句<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者爲解<sup>ハ</sup>。汝疑佛智與人<sup>ハ</sup>不玄絶<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者是<sup>ハ</sup>事不然<sup>ハ</sup>。

三者疑<sup>ハ</sup>佛不能<sup>レ</sup>實度一切衆生<sup>ハ</sup>。何以故過去世<sup>ハ</sup>有無量<sup>ハ</sup>阿僧祇恆沙諸佛<sup>ハ</sup>。現在十方世界<sup>ハ</sup>亦有無量無邊阿僧祇恆沙<sup>ハ</sup>諸佛<sup>ハ</sup>。若<sup>ハ</sup>使佛實<sup>ハ</sup>能度一切衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者則無久無復三界<sup>ハ</sup>。第二佛則不應復爲衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>發菩提心<sup>ハ</sup>具淨修土<sup>ハ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>。而實<sup>ハ</sup>有第二佛<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>乃至實<sup>ハ</sup>有三世十方無量諸佛<sup>ハ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>故知佛<sup>ハ</sup>實不能度一切衆生<sup>ハ</sup>。起此疑<sup>ハ</sup>故於阿彌陀<sup>ハ</sup>一作有量想<sup>ハ</sup>。

以<sup>ハ</sup>是義<sup>ハ</sup>故釋論言若<sup>ハ</sup>人見衆般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是則爲被縛<sup>ハ</sup>。若不<sup>レ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是亦爲被縛<sup>ハ</sup>。若人<sup>ハ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是則爲解脫<sup>ハ</sup>。若不<sup>レ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是亦爲解脫<sup>ハ</sup>。此偈中說<sup>ハ</sup>不離四句<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者爲縛<sup>ハ</sup>。離四句<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者爲解<sup>ハ</sup>。汝疑佛智與人<sup>ハ</sup>不玄絶<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者是<sup>ハ</sup>事不然<sup>ハ</sup>。

一<sup>ニ</sup>三者疑<sup>ハ</sup>佛不能<sup>レ</sup>實度一切衆生<sup>ハ</sup>。何以故過去世<sup>ハ</sup>有無量<sup>ハ</sup>阿僧祇恆沙諸佛<sup>ハ</sup>。現在十方世界<sup>ハ</sup>亦有無量無邊阿僧祇恆沙諸佛<sup>ハ</sup>。若<sup>ハ</sup>使佛實<sup>ハ</sup>能度一切衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者則不應久無復三界<sup>ハ</sup>。第二佛則不應久無復三界<sup>ハ</sup>。第二佛發<sup>ハ</sup>菩提心<sup>ハ</sup>具淨修土<sup>ハ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>。而實<sup>ハ</sup>有第二佛<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>乃至實<sup>ハ</sup>有三世十方無量諸佛<sup>ハ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>故知佛<sup>ハ</sup>實不能度一切衆生<sup>ハ</sup>。起此疑<sup>ハ</sup>故於阿彌陀佛<sup>ハ</sup>一作有量想<sup>ハ</sup>。

以<sup>ハ</sup>是義<sup>ハ</sup>故釋論云若<sup>ハ</sup>人見衆般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是則爲被縛<sup>ハ</sup>。若不<sup>レ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是亦爲被縛<sup>ハ</sup>。若人<sup>ハ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是則爲解脫<sup>ハ</sup>。若不<sup>レ</sup>見般若<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>是亦爲解脫<sup>ハ</sup>。此偈中說<sup>ハ</sup>不離四句<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者爲縛<sup>ハ</sup>。離四句<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者爲解<sup>ハ</sup>。汝疑佛智與人<sup>ハ</sup>不玄絶<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者是<sup>ハ</sup>事不然<sup>ハ</sup>。

一<sup>ニ</sup>三者疑<sup>ハ</sup>佛不能<sup>レ</sup>實度一切衆生<sup>ハ</sup>。何以故過去世<sup>ハ</sup>有無量<sup>ハ</sup>阿僧祇恆沙諸佛<sup>ハ</sup>。現在十方世界<sup>ハ</sup>亦有無量無邊阿僧祇恆沙諸佛<sup>ハ</sup>。若<sup>ハ</sup>使佛實<sup>ハ</sup>能度一切衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>者則不應久無復三界<sup>ハ</sup>。第二佛則不應久無復三界<sup>ハ</sup>。第二佛發<sup>ハ</sup>菩提心<sup>ハ</sup>具淨修土<sup>ハ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>。而實<sup>ハ</sup>有第二佛<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>乃至實<sup>ハ</sup>有三世十方無量諸佛<sup>ハ</sup>攝受衆生<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>故知佛<sup>ハ</sup>實不能度一切衆生<sup>ハ</sup>。起此疑<sup>ハ</sup>故於阿彌陀佛<sup>ハ</sup>一作有量想<sup>ハ</sup>。

對治<sup>スルカ</sup>一此疑<sup>ヲ</sup>故言大乘廣智。大乘廣智者言<sup>ハ</sup>佛無法不知。無煩惱不斷。無善不備。無衆生不度。所以有三世十方佛者有五義。

一者若<sup>レ</sup>使無<sup>ニ</sup>第二佛乃至無量阿僧祇恆沙諸佛<sup>一</sup>者佛便不能度一切衆生。以實能度一切衆生<sup>一</sup>故則有十方無量諸佛。々々即是前佛所<sup>レ</sup>度衆生。

二者若<sup>レ</sup>一佛度一切衆生<sup>一</sup>盡者後亦不應復有佛。何以故無覺<sup>一</sup>他義<sup>一</sup>故復依何義<sup>一</sup>。說有三世佛耶。依覺<sup>一</sup>他義<sup>一</sup>故說佛々皆能度一切衆生。三者佛後能度猶是前佛之能。何以故<sup>一</sup>由前佛有後佛故。譬如帝王之曹得相紹襲<sup>一</sup>後王即是前王之能故。

對<sup>スルカ</sup>一治<sup>ニ</sup>此疑<sup>ヲ</sup>故言<sup>ハ</sup>大乘廣智一大々々者言<sup>ハ</sup>佛無法不知<sup>一</sup>無煩惱不斷<sup>一</sup>無善不備<sup>一</sup>無衆生不度<sup>一</sup>所以有三世十方佛者有五義<sup>一</sup>。一者若使無<sup>ニ</sup>第二佛乃至無<sup>ニ</sup>阿僧祇恆沙諸佛<sup>一</sup>者佛便不能度一切衆生<sup>一</sup>以實能度一切衆生<sup>一</sup>故則有十方無量諸佛<sup>一</sup>無量諸佛即是前佛所<sup>レ</sup>度衆生。二者若<sup>レ</sup>一佛度一切衆生<sup>一</sup>盡者後亦不應<sup>レ</sup>復有<sup>ニ</sup>佛<sup>一</sup>何以故無<sup>ニ</sup>覺<sup>一</sup>他義<sup>一</sup>故復依<sup>ニ</sup>何義<sup>一</sup>說<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>三世佛<sup>一</sup>耶依<sup>ニ</sup>覺<sup>一</sup>他義<sup>一</sup>故說<sup>ニ</sup>佛々皆度<sup>一</sup>一切衆生<sup>一</sup>三者後佛能度猶是前佛之能何以故<sup>一</sup>由<sup>ニ</sup>前佛<sup>一</sup>有<sup>ニ</sup>後佛<sup>一</sup>故譬如<sup>ニ</sup>帝王之曹<sup>一</sup>得<sup>ニ</sup>相紹襲<sup>一</sup>後王即是前王之能故。

對<sup>スルカ</sup>一治<sup>ニ</sup>此疑<sup>ヲ</sup>故言<sup>ハ</sup>大乘廣智一大乗廣智者言<sup>ハ</sup>無法不斷<sup>一</sup>無煩惱不斷<sup>一</sup>無善不備<sup>一</sup>無衆生不度<sup>一</sup>所以有三世十方佛者有五義<sup>一</sup>。一者若使無<sup>ニ</sup>第二佛乃至無<sup>ニ</sup>阿僧祇恆沙諸佛<sup>一</sup>者佛便不能度一切衆生<sup>一</sup>以實能度一切衆生<sup>一</sup>故則有十方無量諸佛<sup>一</sup>無量諸佛即是前佛所<sup>レ</sup>度衆生。二者若<sup>レ</sup>一佛度一切衆生<sup>一</sup>盡者後亦不應<sup>レ</sup>復有<sup>ニ</sup>佛<sup>一</sup>何以故無<sup>ニ</sup>覺<sup>一</sup>他義<sup>一</sup>故復依<sup>ニ</sup>何義<sup>一</sup>說<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>三世佛<sup>一</sup>乎依<sup>ニ</sup>覺<sup>一</sup>他義<sup>一</sup>故說<sup>ニ</sup>佛佛皆度<sup>一</sup>一切衆生<sup>一</sup>三者後佛能度猶是前佛之能何以故<sup>一</sup>由<sup>ニ</sup>前佛<sup>一</sup>有<sup>ニ</sup>後佛<sup>一</sup>故譬如<sup>ニ</sup>帝王之甲<sup>一</sup>得<sup>ニ</sup>相紹襲<sup>一</sup>後主即是前王之能故。

四者佛力雖能度一切衆生。要須有因緣。若衆生與前佛無因緣。須後佛。如是一無緣衆生。動徑一百千萬佛。不聞不見。非佛力劣也。譬如日月。周四天下。一破諸闇。而盲者不見。非日不明也。雷震裂耳。而聾者不聞。非聲不屬也。覺諸緣理。一之曰佛。若情強違緣理。非正覺也。是衆生無量。佛亦無量。徵佛莫問。有緣無緣。何不盡度一切衆生者。非理言也。

五者衆生若盡世間。則墮有邊。以此義。故則有無量佛。度一切衆生。問曰。若衆生不可盡。世間復墮無邊。故佛則不能實度一切衆生。

一切ノ衆生ニ  
 佛ニ度スニ一切衆生ハ  
 問曰若ク衆生不レ可レ盡ク世間復  
 墮ニ无邊ニ故佛則不能ニ實度ニ  
 縁衆動ノ徑ニ百千萬佛ハシレ聞  
 不見ノ非ニ佛力劣ニ也譬如下日月  
 周ニ四天下ニ一破スルニ諸ノ闇溟ニ而  
 盲ノ者不レ見非ニ日不レ明  
 也雷震裂レ耳而聾者不レ聞ノ非ニ  
 聲ニ不レ聞ノ也覺ニ縁理ニ  
 号レ之曰レ佛若情強違ニナリ  
 縁理ニ非ニ正覺ニ也是故ニ衆生无量  
 佛亦无量ニ微ニ佛莫レ問ニ有  
 縁无縁ハ何ニ不ニ盡度ニ一切衆生ノ者  
 非ニ理ニ言也  
 五ノ者衆生若ク盡キハ世間則墮ニ有  
 邊ニ以ニ是義ニ故則有ニ无量  
 佛ニ度スニ一切衆生ハ  
 問曰若ク衆生不レ可レ盡ク世間復  
 墮ニ无邊ニ故佛則不能ニ實度ニ  
 一切ノ衆生ニ

四<sup>ニ</sup>者佛力雖<sup>シ</sup>三<sup>ニ</sup>能度<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>  
要<sup>ス</sup>須<sup>ル</sup>シ<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ニ</sup>因緣<sup>ヲ</sup>若<sup>シ</sup>衆生與<sup>ニ</sup>前佛<sup>ニ</sup>  
無<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>因緣<sup>ヲ</sup>復<sup>タ</sup>須<sup>ル</sup>二<sup>ニ</sup>後佛<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>  
緣<sup>ノ</sup>衆生動<sup>ノ</sup>徑<sup>ハ</sup>二<sup>ニ</sup>百千萬佛<sup>ヲ</sup>  
不<sup>レ</sup>聞<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>非<sup>ニ</sup>佛力<sup>ヲ</sup>劣<sup>ナル</sup>也譬<sup>ハ</sup>  
如<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>日月周<sup>テ</sup>二<sup>ニ</sup>四天下<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>破<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>諸闇<sup>ヲ</sup>  
冥<sup>ナ</sup>而<sup>モ</sup>盲<sup>ク</sup>者不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>非<sup>ニ</sup>日<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>諸闇<sup>ヲ</sup>  
明<sup>ル</sup>也雷震裂<sup>サ</sup>裂<sup>ケ</sup>レ耳<sup>ヲ</sup>而<sup>モ</sup>聾<sup>ク</sup>者不<sup>レ</sup>聞<sup>ル</sup>  
非<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>聲<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>勵<sup>ヲ</sup>也覺<sup>ル</sup>二<sup>ニ</sup>諸緣<sup>ヲ</sup>  
理<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>号<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>佛若<sup>シ</sup>情強<sup>ク</sup>違<sup>テ</sup>二<sup>ニ</sup>緣<sup>ヲ</sup>  
理<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>正覺<sup>ヲ</sup>也<sup>ナリ</sup>是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>无<sup>ク</sup>  
量<sup>ナ</sup>佛亦<sup>モ</sup>无<sup>ク</sup>量<sup>ナリ</sup>微<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>佛莫<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>問<sup>フ</sup>  
有<sup>ク</sup>緣<sup>ヲ</sup>無<sup>ク</sup>緣<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>何<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>盡度<sup>ヲ</sup>中<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>切<sup>ニ</sup>  
衆生<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>者非<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>理<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>一<sup>ニ</sup>也<sup>セン</sup>  
五<sup>ニ</sup>者衆生若<sup>シ</sup>盡<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>世間<sup>ヲ</sup>即<sup>チ</sup>墮<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>  
邊<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>義<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>有<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>无量佛<sup>ヲ</sup>  
度<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>  
問<sup>フ</sup>曰<sup>ク</sup>若<sup>シ</sup>衆<sup>ヲ</sup>生<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>盡<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>世間<sup>ヲ</sup>  
復<sup>タ</sup>須<sup>ル</sup>シ<sup>レ</sup>墮<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>无邊<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>邊<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>  
能<sup>ク</sup>三<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>度<sup>シ</sup>二<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>  
一<sup>ニ</sup>



答曰世間非有邊<sup>ニ</sup>非無邊<sup>ニ</sup>。亦絶<sup>タリ</sup>四句<sup>ニ</sup>。佛令<sup>フシテ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>離<sup>ニ</sup>此四句<sup>ニ</sup>一名之爲度<sup>ニ</sup>。其實<sup>ニ</sup>非度<sup>ニ</sup>。非度<sup>ニ</sup>。非盡<sup>ニ</sup>。非不盡<sup>ニ</sup>。譬如<sup>ニ</sup>夢<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>大海<sup>ニ</sup>。值<sup>ニ</sup>濤波<sup>ニ</sup>諸難<sup>ニ</sup>。其<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>畏怖<sup>ニ</sup>。叫<sup>シテ</sup>聲<sup>ヲ</sup>徹<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>。有外人<sup>ニ</sup>喚<sup>ニ</sup>覺<sup>ニ</sup>。但然<sup>トシテ</sup>無憂<sup>ニ</sup>。但爲<sup>トモ</sup>渡夢<sup>ニ</sup>不爲<sup>ニ</sup>渡河<sup>ニ</sup>。

問曰言渡與不渡<sup>ニ</sup>皆墮邊見<sup>ニ</sup>。何以<sup>カ</sup>但說<sup>ヲ</sup>渡<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>爲大乘廣智<sup>ト</sup>不說<sup>ト</sup>度衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>爲大乘廣智<sup>ト</sup>耶。

答曰衆生<sup>ハ</sup>莫<sup>シ</sup>不厭苦<sup>ヲ</sup>求樂<sup>ヲ</sup>。畏<sup>リ</sup>縛<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>則歸向<sup>ニ</sup>。聞<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>不知<sup>ニ</sup>。所以<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>。便謂<sup>テ</sup>佛非大慈<sup>ニ</sup>悲<sup>ニ</sup>則不歸向<sup>ニ</sup>。不歸向<sup>ニ</sup>故長寢久夢<sup>ニ</sup>無由<sup>ニ</sup>可息<sup>ニ</sup>。爲是人<sup>ニ</sup>故多說<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>不說<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>。復次諸法無行經<sup>ニ</sup>亦言<sup>ニ</sup>佛不得佛<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>。亦不度<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。凡夫強<sup>ニ</sup>分別<sup>ス</sup>作佛<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。言度衆生<sup>ニ</sup>是對治<sup>ニ</sup>。悉旦<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>不度衆生<sup>ニ</sup>是第一悉檀<sup>ニ</sup>。二言各有所以<sup>ニ</sup>。不相違<sup>ニ</sup>背<sup>ニ</sup>。

答曰世間<sup>ハ</sup>非<sup>ニ</sup>有邊<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>無邊<sup>ニ</sup>。亦絶<sup>タリ</sup>四句<sup>ニ</sup>。佛令<sup>フシテ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>離<sup>ニ</sup>此四句<sup>ニ</sup>一名之爲度<sup>ニ</sup>其實<sup>ニ</sup>非度<sup>ニ</sup>。非度<sup>ニ</sup>。非盡<sup>ニ</sup>。非不盡<sup>ニ</sup>。譬如<sup>ニ</sup>夢<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>大海<sup>ニ</sup>。值<sup>ニ</sup>濤波<sup>ニ</sup>諸難<sup>ニ</sup>。其<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>畏怖<sup>ニ</sup>。叫<sup>シテ</sup>聲<sup>ヲ</sup>徹<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>。有外人<sup>ニ</sup>喚<sup>ニ</sup>覺<sup>ニ</sup>。但然<sup>トシテ</sup>無憂<sup>ニ</sup>。但爲<sup>トモ</sup>渡夢<sup>ニ</sup>不爲<sup>ニ</sup>渡河<sup>ニ</sup>。

問曰言渡與不渡<sup>ニ</sup>皆墮<sup>ニ</sup>邊見<sup>ニ</sup>。何以<sup>カ</sup>但說<sup>ヲ</sup>渡<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>爲大乘廣智<sup>ト</sup>不說<sup>ト</sup>度衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>爲大乘廣智<sup>ト</sup>耶。

答曰衆生<sup>ハ</sup>莫<sup>シ</sup>不厭苦<sup>ヲ</sup>求樂<sup>ヲ</sup>。畏<sup>リ</sup>縛<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>則歸向<sup>ニ</sup>。聞<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>不知<sup>ニ</sup>。所以<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>。便謂<sup>テ</sup>佛非大慈<sup>ニ</sup>悲<sup>ニ</sup>則不歸向<sup>ニ</sup>。不歸向<sup>ニ</sup>故長寢久夢<sup>ニ</sup>無由<sup>ニ</sup>可息<sup>ニ</sup>。爲是人<sup>ニ</sup>故多說<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>不說<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>。復次諸法無行經<sup>ニ</sup>亦言<sup>ニ</sup>佛不得佛<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>。亦不度<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。凡夫強<sup>ニ</sup>分別<sup>ス</sup>作佛<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。言度衆生<sup>ニ</sup>是對治<sup>ニ</sup>。悉旦<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>不度衆生<sup>ニ</sup>是第一義悉檀<sup>ニ</sup>。二言各有所以<sup>ニ</sup>。不相違背<sup>ニ</sup>。

答曰世間<sup>ハ</sup>非<sup>ニ</sup>有邊<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>無邊<sup>ニ</sup>。亦絶<sup>タリ</sup>四句<sup>ニ</sup>。佛令<sup>フシテ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>離<sup>ニ</sup>此四句<sup>ニ</sup>一名之爲度<sup>ニ</sup>其實<sup>ニ</sup>非度<sup>ニ</sup>。非度<sup>ニ</sup>。非盡<sup>ニ</sup>。非不盡<sup>ニ</sup>。譬如<sup>ニ</sup>夢<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>大海<sup>ニ</sup>。值<sup>ニ</sup>濤波<sup>ニ</sup>諸難<sup>ニ</sup>。其<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>畏怖<sup>ニ</sup>。叫<sup>シテ</sup>聲<sup>ヲ</sup>徹<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>。有外人<sup>ニ</sup>喚<sup>ニ</sup>覺<sup>ニ</sup>。但然<sup>トシテ</sup>無憂<sup>ニ</sup>。但爲<sup>トモ</sup>渡夢<sup>ニ</sup>不爲<sup>ニ</sup>渡河<sup>ニ</sup>。

問曰言渡與不渡<sup>ニ</sup>皆墮<sup>ニ</sup>邊見<sup>ニ</sup>。何以<sup>カ</sup>但說<sup>ヲ</sup>渡<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>爲大乘廣智<sup>ト</sup>不說<sup>ト</sup>度衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>爲大乘廣智<sup>ト</sup>耶。

答曰衆生<sup>ハ</sup>莫<sup>シ</sup>不厭苦<sup>ヲ</sup>求樂<sup>ヲ</sup>。畏<sup>リ</sup>縛<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>則歸向<sup>ニ</sup>。聞<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>不知<sup>ニ</sup>。所以<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>。便謂<sup>テ</sup>佛非大慈<sup>ニ</sup>悲<sup>ニ</sup>則不歸向<sup>ニ</sup>。不歸向<sup>ニ</sup>故長寢久夢<sup>ニ</sup>無由<sup>ニ</sup>可息<sup>ニ</sup>。爲是人<sup>ニ</sup>故多說<sup>ニ</sup>渡<sup>ニ</sup>不說<sup>ニ</sup>不渡<sup>ニ</sup>。復次諸法無行經<sup>ニ</sup>亦言<sup>ニ</sup>佛不得佛<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>。亦不度<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。凡夫強<sup>ニ</sup>分別<sup>ス</sup>作佛<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>。言度衆生<sup>ニ</sup>是對治<sup>ニ</sup>。悉旦<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>不度衆生<sup>ニ</sup>是第一義悉檀<sup>ニ</sup>。二言各有所以<sup>ニ</sup>。不相違背<sup>ニ</sup>。

問曰如夢<sup>ニ</sup>所得<sup>タリ</sup>息<sup>ノ</sup>豈不是度<sup>ニ</sup>耶。若一切衆生所夢皆息<sup>ヤハ</sup>。世間豈不能盡<sup>ス</sup>耶。答曰說夢爲世間。若夢息<sup>ヌレハ</sup>則無夢<sup>ナシ</sup>者若無夢<sup>ナシ</sup>者亦不說度者。如是一知世間卽是出世間<sup>ナリト</sup>。雖度<sup>ニ</sup>無量衆生<sup>ノ</sup>則不墮顛倒。

四者疑佛。不得一切種智。何以故」  
若能遍知諸法、一々墮有邊、故。若  
不能遍知、則非一切種智。」故  
對治此疑、故言無等無倫最上勝智。  
無等無倫最上勝智者、凡夫智虛妄  
佛智如實虛實殊殊。理無  
得等。故言無等。

聲聞辟支佛<sup>ハ</sup>欲<sup>ハ</sup>有所知<sup>ル</sup>。入定<sup>ニ</sup>。方知<sup>ル</sup>。  
 出定<sup>シテ</sup>。又知<sup>ル</sup>亦<sup>ハ</sup>有限<sup>ニ</sup>。佛得如實三昧<sup>ニ</sup>。  
 常在<sup>ト</sup>。深定<sup>ニ</sup>而遍照<sup>タマフ</sup>。万法<sup>ヲ</sup>。二與<sup>ト</sup>。  
 無二深淺<sup>ト</sup>。非倫<sup>ニ</sup>。故言無倫。

問曰如三夢得二息<sup>コト</sup>一豈不<sup>ス</sup>是<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>耶若一切衆生所夢皆息<sup>セハ</sup>世間豈不<sup>ス</sup>盡耶<sup>ナレ</sup>

答曰說<sup>テ</sup>夢爲<sup>ス</sup>二世間一若夢息<sup>スレハ</sup>无<sup>レ</sup>夢者一若无<sup>ス</sup>二夢<sup>ニ</sup>者一亦不<sup>レ</sup>說<sup>カ</sup>二度者一如<sup>ニ</sup>是知<sup>ニ</sup>二世間即是出世間<sup>ナリト</sup>雖<sup>ト</sup>レ度无量衆生一則不<sup>レ</sup>墮顛倒<sup>ニ</sup>

「四者疑<sup>ニ</sup>佛不<sup>ス</sup>レ得<sup>ニ</sup>一切種智<sup>ヲ</sup>一何<sup>ニ</sup>以故若能遍<sup>ニ</sup>知<sup>ハ</sup>諸法<sup>ヲ</sup>一々々々<sup>ニ</sup>墮<sup>ルニ</sup>有<sup>レ</sup>一邊<sup>ニ</sup>故若不<sup>レ</sup>能遍<sup>ニ</sup>知<sup>ルニ</sup>一則非<sup>ニ</sup>一切種智<sup>ニ</sup>一故對<sup>ニ</sup>治<sup>スルカ</sup>疑此<sup>ノ</sup>疑<sup>ヲ</sup>一故言<sup>ニ</sup>无等无倫最上勝智<sup>ハ</sup>一々々々々々々々々々<sup>ナリ</sup>者<sup>ハ</sup>一凡夫智<sup>ナリ</sup>虛妄<sup>ナリ</sup>佛一智<sup>ハ</sup>如實<sup>ナリ</sup>ト<sup>ルカニ</sup>殊<sup>ニ</sup>理无<sup>レ</sup>得<sup>コト</sup>一<sup>レ</sup>等故言<sup>ニ</sup>无等<sup>ト</sup>

聲聞辟支佛欲<sup>ハ</sup>有<sup>ト</sup>二所智<sup>テ</sup>入<sup>レ</sup>定<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>知<sup>レ</sup>出<sup>テ</sup>定<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>又知<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>限<sup>ニ</sup>佛<sup>ハ</sup>知<sup>レ</sup>如實<sup>ニ</sup>三昧<sup>ヲ</sup>常<sup>ニ</sup>在<sup>シテ</sup>二<sup>ニ</sup>深定<sup>ニ</sup>而遍<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>一照<sup>ス</sup>万法<sup>ヲ</sup>二與<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>二深淺非<sup>レ</sup>倫<sup>カラズ</sup>故言<sup>ニ</sup>无<sup>レ</sup>倫<sup>ト</sup>

問<sup>テ</sup>曰<sup>ハ</sup>如<sup>ル</sup>ニ夢<sup>ム</sup>得<sup>ル</sup>一<sup>ハ</sup>息<sup>ハ</sup>豈<sup>ムコトヲ</sup>不<sup>レ</sup>ニヤ  
是<sup>レ</sup>度<sup>ニ</sup>一<sup>ハ</sup>耶<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>一<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>衆<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>所<sup>ナ</sup>夢<sup>ム</sup>皆<sup>ハ</sup>息<sup>ハ</sup>  
世<sup>テ</sup>間<sup>ニ</sup>豈<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>ニヤ<sup>キ</sup>盡<sup>キ</sup>  
答<sup>テ</sup>曰<sup>ハ</sup>說<sup>テ</sup>レ<sup>ハ</sup>夢<sup>ム</sup>爲<sup>ス</sup>二<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>間<sup>ト</sup>一<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>夢<sup>ム</sup>  
息<sup>ハ</sup>ムトキハ則<sup>レ</sup>无<sup>レ</sup>二<sup>ハ</sup>夢<sup>ム</sup>者<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>一<sup>ハ</sup>夢<sup>ム</sup>者<sup>ハ</sup>  
亦<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>說<sup>テ</sup>二<sup>ハ</sup>度<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>如<sup>レ</sup>是<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>二<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>間<sup>ト</sup>  
一<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>出<sup>ナリト</sup>世<sup>ハ</sup>間<sup>ト</sup>一<sup>ハ</sup>雖<sup>モ</sup>レ<sup>ハ</sup>度<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>无<sup>ク</sup>  
量<sup>ハ</sup>衆<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>墮<sup>ニ</sup>二<sup>ハ</sup>顛<sup>ハ</sup>倒<sup>ト</sup>一<sup>ハ</sup>  
四<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>疑<sup>ハク</sup>一<sup>ハ</sup>佛<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>二<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>種<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>何<sup>ヲ</sup>  
以<sup>テ</sup>故<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>遍<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>二<sup>ハ</sup>諸<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>諸<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>諸<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>遍<sup>ク</sup>  
墮<sup>ル</sup>二<sup>ハ</sup>有<sup>レ</sup>邊<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>二<sup>ハ</sup>遍<sup>ク</sup>  
知<sup>ル</sup>一<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>非<sup>ル</sup>二<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>種<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>  
對<sup>シ</sup>二<sup>ハ</sup>治<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>疑<sup>ハク</sup>二<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>言<sup>フ</sup>二<sup>ハ</sup>无<sup>ク</sup>等<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>倫<sup>ハ</sup>  
最<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>勝<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>无<sup>ク</sup>等<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>倫<sup>ハ</sup>最<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>勝<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>  
凡<sup>ハ</sup>夫<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>虛<sup>ハ</sup>妄<sup>ハ</sup>佛<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>如<sup>レ</sup>實<sup>ハ</sup>虛<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>  
玄<sup>ハ</sup>殊<sup>ハ</sup>理<sup>ハ</sup>无<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>レ<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>言<sup>フ</sup>二<sup>ハ</sup>无<sup>ク</sup>  
无<sup>ク</sup>等<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>  
聲<sup>ハ</sup>聞<sup>ハ</sup>辟<sup>ハ</sup>支<sup>ハ</sup>佛<sup>ハ</sup>欲<sup>ハ</sup>スレハ有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup>  
定<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>出<sup>ル</sup>定<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>一<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>亦<sup>ハ</sup>  
有<sup>レ</sup>限<sup>ハ</sup>佛<sup>ハ</sup>得<sup>ル</sup>二<sup>ハ</sup>如<sup>レ</sup>實<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>昧<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>在<sup>ト</sup>二<sup>ハ</sup>深<sup>ハ</sup>  
定<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>而<sup>ハ</sup>遍<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>三<sup>ハ</sup>照<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>万<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>與<sup>ハ</sup>无<sup>ク</sup>  
二<sup>ハ</sup>深<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>非<sup>ル</sup>倫<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>言<sup>フ</sup>二<sup>ハ</sup>无<sup>ク</sup>倫<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>



<p>八地已上、菩薩雖得報生三昧、用無出入、而習氣微動、三昧不極明淨。形待佛智、猶爲有上。佛智斷具足、如法而照。法無量、故照亦無量。譬如函大蓋亦大。</p> <p>此三句亦可展轉相成。以佛智無與等者、一故所以無倫。以無一偏、故最上勝。亦可最上勝、故無等。無等之、故無倫。但言「無等」便足。復何以須下三句、一者如須陀洹智、不與阿羅漢等、而是其類。初地至十地、亦如是。智雖不等、非不其倫。」何以故、非最上、故汝以知有邊無邊爲難、疑佛非一切智、一者是事不然。</p>	<p>問曰下輩生中云十念相續、便得往生云、何名爲十念相續。</p>
<p>八地已上、菩薩雖得報生三昧、用無出入、而習氣微動、三昧不極明淨。一形一持、佛智猶爲有上、佛智斷具足、如法而照。法量、故照亦無量。譬如函大蓋亦大。</p> <p>此三句亦可展轉相成、以佛智無與等者、一故所以無倫。以無一偏、故最上勝。故無等、無等、故無倫。但言「無等」便足。復何以須下三句、一者如須陀洹智、不與阿羅漢等、而是其類。初地至十地、亦如是。智雖不等、非不其倫。何以故、非最上、故汝以知有邊無邊爲難、疑佛非一切智、一者是事不然。</p>	<p>問曰下輩生中云十念相續、便得往生云、何名爲十念相續。</p>
<p>八地已上、菩薩雖得報生三昧、用無出入、而習氣微動、三昧不極明淨。一形待佛智、猶爲有上、佛智斷具足、如法而照。法無量、故照亦無量。譬如函大蓋亦大。</p> <p>此三句亦可展轉相成、以佛智無與等者、一故所以無倫。以無一偏、故最上勝。亦可最上勝、故無等。無等、故無倫。但言「無等」便足。復何以須下三句、一者如須陀洹智、不與阿羅漢等、而是其類。初地至十地、亦如是。智雖不等、非不其倫。何以故、非最上、故汝以知有邊無邊爲難、疑佛非一切智、一者是事不然。</p>	<p>問曰下輩生中云三十念相續、便得往生云、何名爲三十念相續。</p>

答曰譬如有奮人空曠追處一值遇怨賊一拔白一奮勇一直來。欲取其人一勁走規一渡一河。若得渡一河一首領可全。爾時但念渡河一方便我至河岸爲着衣一渡一爲脱衣一渡。若着衣一納一恐不得過。若脱衣一納一恐無得暇。但一有此念一更無他緣。一念何當渡河。卽是一念如是十念一不雜餘心一名爲十念相續。

行者亦爾。念阿彌陀佛一如彼一念渡至于十念。若念佛名字一若念佛相好一若念佛光明一若一念佛神力一若念佛功德一若念佛智慧一若念佛本願一一无他心間雜一心々相次一乃至十念一名爲十念相續。

答曰譬<sup>ハ</sup>如下<sup>シ</sup>有<sup>テ</sup>人空曠<sup>ノ</sup>廻<sup>ナル</sup>處<sup>ニシテ</sup>值<sup>ニ</sup>遇<sup>アル</sup>賊<sup>一</sup>拔<sup>レ</sup>刀<sup>ヲ</sup>奮<sup>テ</sup>勇<sup>ヲ</sup>直<sup>ニ</sup>來<sup>ル</sup>欲<sup>ス</sup>取<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>人<sup>一</sup>勁<sup>ツ</sup>走<sup>ク</sup>規<sup>ヲ</sup>渡<sup>ル</sup>一河<sup>一</sup>若<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>渡<sup>ル</sup>河<sup>一</sup>首領<sup>ヲ</sup>可<sup>シ</sup>全<sup>ク</sup>爾時<sup>ニ</sup>但<sup>ニ</sup>念<sup>テ</sup>渡<sup>ル</sup>河<sup>一</sup>方便<sup>ニ</sup>我<sup>ハ</sup>至<sup>ル</sup>河<sup>ノ</sup>岸<sup>ニ</sup>爲<sup>シ</sup>着<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>渡<sup>ル</sup>一爲<sup>シ</sup>脱<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>渡<sup>ル</sup>一若<sup>シ</sup>着<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>納<sup>ム</sup>一恐<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>過<sup>ク</sup>若<sup>シ</sup>脱<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>納<sup>ム</sup>一恐<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>暇<sup>ヲ</sup>但<sup>ニ</sup>有<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>更<sup>ニ</sup>无<sup>カ</sup>他緣<sup>上</sup>一<sup>中</sup>念<sup>一</sup>何<sup>ニ</sup>當<sup>ヘ</sup>レ<sup>ニ</sup>渡<sup>ル</sup>河<sup>一</sup>卽<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>一<sup>中</sup>念<sup>一</sup>如<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>雜<sup>ニ</sup>餘<sup>ノ</sup>心<sup>一</sup>名<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>相<sup>ヲ</sup>續<sup>ト</sup>一

行<sup>ハ</sup>者<sup>モ</sup>亦<sup>モ</sup>爾<sup>ナリ</sup>念<sup>スル</sup>阿<sup>ニ</sup>彌<sup>ニ</sup>陀<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>一<sup>中</sup>如<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>渡<sup>ル</sup>一<sup>中</sup>經<sup>フ</sup>三<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>字<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>相<sup>ヲ</sup>好<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>明<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>神<sup>ヲ</sup>力<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>功<sup>ヲ</sup>德<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>智<sup>ヲ</sup>慧<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>本<sup>ヲ</sup>願<sup>ヲ</sup>一<sup>中</sup>无<sup>ク</sup>他<sup>ノ</sup>心<sup>一</sup>間<sup>ヲ</sup>雜<sup>ト</sup>一<sup>中</sup>心<sup>一</sup>々<sup>ニ</sup>相<sup>ヲ</sup>次<sup>ニ</sup>一<sup>中</sup>乃<sup>チ</sup>至<sup>ル</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>名<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>三<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>相<sup>ヲ</sup>續<sup>ト</sup>一

答曰譬<sup>ハ</sup>如下<sup>シ</sup>有<sup>テ</sup>人空曠<sup>ノ</sup>廻<sup>ナル</sup>處<sup>ニシテ</sup>值<sup>ニ</sup>遇<sup>アル</sup>賊<sup>一</sup>拔<sup>レ</sup>刀<sup>ヲ</sup>奮<sup>テ</sup>勇<sup>ヲ</sup>直<sup>ニ</sup>來<sup>ル</sup>欲<sup>ス</sup>取<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>人<sup>一</sup>勁<sup>ツ</sup>走<sup>ク</sup>規<sup>ヲ</sup>渡<sup>ル</sup>一河<sup>一</sup>若<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>渡<sup>ル</sup>河<sup>一</sup>首領<sup>ヲ</sup>可<sup>シ</sup>全<sup>ク</sup>爾時<sup>ニ</sup>但<sup>ニ</sup>念<sup>テ</sup>渡<sup>ル</sup>河<sup>一</sup>方便<sup>ニ</sup>我<sup>ハ</sup>至<sup>ル</sup>河<sup>ノ</sup>岸<sup>ニ</sup>爲<sup>シ</sup>着<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>渡<sup>ル</sup>一爲<sup>シ</sup>脱<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>渡<sup>ル</sup>一若<sup>シ</sup>着<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>納<sup>ム</sup>一恐<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>過<sup>ク</sup>若<sup>シ</sup>脱<sup>テ</sup>衣<sup>ヲ</sup>納<sup>ム</sup>一恐<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>暇<sup>ヲ</sup>但<sup>ニ</sup>有<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>更<sup>ニ</sup>无<sup>カ</sup>他緣<sup>上</sup>一<sup>中</sup>念<sup>一</sup>何<sup>ニ</sup>當<sup>ヘ</sup>レ<sup>ニ</sup>渡<sup>ル</sup>河<sup>一</sup>卽<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>一<sup>中</sup>念<sup>一</sup>如<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>雜<sup>ニ</sup>餘<sup>ノ</sup>心<sup>一</sup>名<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>相<sup>ヲ</sup>續<sup>ト</sup>一

行<sup>ハ</sup>者<sup>モ</sup>亦<sup>モ</sup>爾<sup>ナリ</sup>念<sup>スル</sup>阿<sup>ニ</sup>彌<sup>ニ</sup>陀<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>一<sup>中</sup>如<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>渡<sup>ル</sup>一<sup>中</sup>經<sup>フ</sup>三<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>字<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>相<sup>ヲ</sup>好<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>明<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>神<sup>ヲ</sup>力<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>功<sup>ヲ</sup>德<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>智<sup>ヲ</sup>慧<sup>ヲ</sup>一若<sup>シ</sup>念<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>本<sup>ヲ</sup>願<sup>ヲ</sup>一<sup>中</sup>无<sup>ク</sup>他<sup>ノ</sup>心<sup>一</sup>間<sup>ヲ</sup>雜<sup>ト</sup>一<sup>中</sup>心<sup>一</sup>々<sup>ニ</sup>相<sup>ヲ</sup>次<sup>ニ</sup>一<sup>中</sup>乃<sup>チ</sup>至<sup>ル</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>名<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>三<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>一</sup>相<sup>ヲ</sup>續<sup>ト</sup>一

<p>一往言「十念相續」似若不難。然凡夫心猶野馬。識劇彌猴。馳騁六塵。无暫停息。宜及信心預自剋念。使積習成。性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行。死无惡念。如樹西傾。倒必隨典。若使刀風一至。百苦湊身。習不在懷。念何可弁。又宜同志。五三共結言要。垂命時送相開曉。爲稱阿彌陀佛名。願生安樂。聲々相次。使成十念也。譬如臍印。々泥印懷文成。此命斷時。卽是生安樂。一時入正定聚。更何所憂也。」</p> <p>略論安樂土義</p>	<p>一往言「十念相續」似若不難。然凡夫心猶野馬。識劇彌猴。馳騁六塵。无暫停息。宜及信心預自剋念。使積習成。性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行。死无惡念。如樹西傾。倒必隨典。若使刀風一至。百苦湊身。習不在懷。念何可弁。又宜同志。五三共結言要。垂命時送相開曉。爲稱阿彌陀佛名。願生安樂。聲々相次。使成十念也。譬如臍印。々泥印懷文成。此命斷時。卽是生安樂。一時入正定聚。更何所憂也。」</p> <p>右此一卷者六道衆生之骨目出能三界。麟麒教也亦聖人之財自毫也。</p> <p>常樂寺「什物」</p>
<p>一往言「十念相續」似若不難。然凡夫心猶野馬。識劇彌猴。馳騁六塵。无暫停息。宜及信心預自剋念。使積習成。性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行。死无惡念。如樹西傾。倒必隨典。若使刀風一至。百苦湊身。習不在懷。念何可弁。又宜同志。五三共結言要。垂命時送相開曉。爲稱阿彌陀佛名。願生安樂。聲々相次。使成十念也。譬如臍印。々泥印懷文成。此命斷時。卽是生安樂。一時入正定聚。更何所憂也。」</p> <p>略論安樂淨土義</p>	

良忍本

- ①「白」依拠本では「淨」となっており、左側に点、右側に「白」とある。
- ②「無」と「分」の間に点、その右に「所イ」。
- ③「傍」左に「ソフ」。
- ④「量」右に丸。
- ⑤「快」↓「イ+夾」か？
- ⑥「況」左に「タクラフ」。
- ⑦「未」右に「或□（末）か」。
- ⑧「斥」右に「或□（弁）か」イ、左に「サス」。
- ⑨「轉輪王行」四字それぞれ左に丸。
- ⑩「鳩」右上に丸。左に「チム毒鳥也」。
- ⑪「性」右上に丸。
- ⑫「言」右に「ノ」？墨付きか。
- ⑬「玄」↓「云」か？
- ⑭「旦」右上に墨付き。
- ⑮「之」↓繰り返し返し記号（々）か？
- ⑯「復」依拠本では「後」、左に丸、右に「復」。
- ⑰「白」右に「白刃イ本」左に丸。
- ⑱「間」左下に墨付き。

常楽寺本

- ①依拠本には「田」の左に点。右に「日」<sup>ツ</sup>とある。
- ②「世」の下に丸。「聞」は上欄に有り。
- ③「聞」<sup>ムト</sup>の下に丸。「聞」は上欄に有り。
- ④「觀經中」三字それぞれ左に傍線と丸。
- ⑤「離」の右に丸。その下に「棄」。
- ⑥「生」<sup>シテ</sup>「安樂」は上欄に有り、その上下に丸。（⑥の位置は「南條本」他異本に依る。）
- ⑦「同」<sup>ツナシ</sup>右に「コノ字アリ」。以下【】内の部分は線で囲い、上下に丸があるが、読むなという指示か。
- ⑧「何一」は薄れている。消そうとした跡か。
- ⑨「疑」の下に丸。以下「此一句總辨所疑」<sup>ハシテ</sup>下四句、一一對治所疑<sup>ツ</sup>「疑」は上欄に有り、その上下に丸。
- ⑩「爲」を線で消し右に「以」と修正。
- ⑪「貢」に「タテマツル」の左訓。
- ⑫「驢」に「ウサキムマ」の左訓。
- ⑬上欄に「鳩鳥」。
- ⑭「反」に「アヲノキ」？の左訓。
- ⑮「亦」の下に丸。以下「非」<sup>ス</sup>知<sup>ニ</sup>佛<sup>ツ</sup>は上欄に有り。

①⑥ 「備」に「ハラ」の左訓。

①⑦ 「襲」に「カサヌ」の左訓。

①⑧ 「徴」に「ハタス」の左訓。

①⑨ 「智」の下に丸。そこから次の【】部の上下の丸へ線が引かれている。

②⑩ 「首」に「クヒコロモノ」、「領」に「クヒ」の左訓。

②⑪ 上欄に「稱」。

南條本

① 「覽者」に「アシナヘタルモノ」の左訓。

② 「主主」に「ワウワウ」の左訓。

③ 「斯須」に「シハラク」の左訓。

④ 「勁走」に「イソキハシリ」の左訓。

